

緋弾のアリア 時を守
る武偵

心はニート

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『撃てない武偵』こと黒野ソウジは、行く先々でフラグを立てる友人の遠山キンジとともに、さまざまな事件に巻き込まれていく。

モテない武偵こと黒野ソウジが嫉妬に狂う話でもあります。

現在更新停止中です。

目次

武偵殺し

0.	ウサギとカメ	1
1.	始まりとチャリジャック	5
2.	風穴とドレイ	19
3.	青春とバスジャック	36
4.	推理と結束	55
5.	武偵殺しとハイジャック	72
6.	決着と着陸	85
7.	一段落とプロローグ	96
魔剣		
8.	星伽白雪とエンカウント	116
9.	侵入者と護衛任務	126

ブラド

1 0.	作戦会議と三角関係	137
1 1.	見えない敵とプランB	147
1 2.	魔剣と武偵殺し	156
ブラド		
1 3.	依頼と化け物退治	167
1 4.	オオカミと神童	178
1 5.	潜入任務と行方不明	193
1 6.	剣と盾	203
1 7.	氷と銃	217

武偵殺し

0. ウサギとカメ

——おかしい

神崎・H・アリアは戸惑っていた。目の前にいる黒髪で、ごく平凡そうな男に。

『おいソウジ！いつまで縮こまつてるつもりだ?!一発くらい撃てよ！』

『しぶといんだよ！早く死ね亀！』

「う、る、せえよ！うわっ！あぶな!!」

ギヤラリーに『亀』と呼ばれた目の前の男、動きは大したことがない——が、攻撃があたらない。

あぶないと言いながらもどこか余裕がありそうな気さえする。

軽そうな見た目と、しまりの無い顔から笑っているようにも見えてしまう。

ガキッ！

「うおっ！」

(っ?!また!)

いや厳密に言えば当たってはいる。だが攻撃の全てを防御か回避し、いなしてくるの

だ。これだけなら防御のうまいヤツで済むかもしれない。

だがここぞという時、普通なら完全に攻撃が入り、勝敗が決するであろう時に限ってはあきらかにおかしい。

反応と対応が桁違いに速い。今の防御もまるで、トンファーを持った彼の腕が瞬間移動でもして、こちらの剣を防いだかのような異常な速さだ。

「そ、そろそろ終わりにしない？」

「……そうね」

いったいどれほど闘っていたのか、結局授業の終わりまでこの演習の決着はつかなかった。彼の評価はBランク武偵のハズだが、やはりランク付けなど大して意味が無い。

「はあ、はあ……。いや、さすがSランク。逃げるのに精一杯で何もできなかったよ」

『おいソウジ！さっさと着替えて遊びに行くぞ！』

「おう、今行く！じゃあなアリアさん、また明日」

「あつちよっ……」

呼び止める間もなく更衣室に行ってしまった。まあ良い、彼の言う通りまた明日会える。

自分も更衣室に戻りながら先ほどまでの演習を思い返す。
(うわさ通り、つてことね)

強襲科での噂——『撃てない武偵』、通称 亀

銃も近接格闘もそれなり、通常の動きも特別速いわけではない。ただトンファーによる防御が固い、それだけだ。そして一番おかしなところは、人に向けて実弾を撃たないこと。

なぜ強襲逮捕を常とする攻撃的な強襲科に防御特化の彼がいるのかはわからない。そんな彼を強襲科の大半は臆病者、固いだけでろくに攻撃に移れないノロマな亀と見ている。

だが、一部の生徒や教師から見た評価は違う。自衛、護衛など、『護る』^{まも}という点においてこの学校の生徒で彼の右に出るものはいないという。

そんな彼を影でこう呼ぶ者もいる——

彼、黒野ソウジを『負けない武偵』、と

(……でもパートナーとしてはダメだわ)

アリアが求めるのは一緒に闘っていけるパートナー。アリアは彼の能力を認めつつも、自分について来れる人間では無いと判断した。

1. 始まりとチャリジャック

武偵——それは凶悪化する犯罪に対抗するために新設された国家資格、『武装探偵』のこと。

武装を許可され逮捕権を有するが、任務に対して金銭などの報酬を求めするため、警察というより何でも屋寄りだ。

そんな『武偵』を育成する学校の1つである東京武偵高校に通うオレ、黒野ソウジは今日、2年生の始業式を迎える。

だが特別な日だろうと日課を欠かしたりはしない。むしろこういう気持ちが入り込むような日こそ、日課の座禅が必要なんだ。祖父から勧められてから、心を落ち着かせることができ集中力が上がっている気がする。

——ゆつくりと息を吐き出し、精神を統一する。外界の情報を意識せず、それでも無視するわけでは無い。自分の感覚に集中することで鋭くなっていくのがわかる。遠くの水一滴が落ちる音ですら感じ取れるような——

……ピン、ポーン

ん？……なんだ下の部屋か……いや、ダメだダメだ。こんなことで集中を解いてるよ

うでは。じいさんがいたら叩かれているところだ

再び集中する。

そう、遠くの水一滴すら――

『キンちゃん！』

『その呼び方やめろって言ったろ』

『あつ……ご、ごめんねでも私キンちゃんのこと考えてたから……』

――下の部屋の会話ですら聞き取れるほど集中する。キンジの奴、朝からかわいい幼馴染みの白雪さんが来るとかうらやま、いやけしからん。オレもソウちゃんって呼ばれて身の回りの世話された……いやいや何を考えているんだ！ 煩惱退散！

ふう、落ち着くんだオレ、深呼吸しろ。キンジは特殊なんだ。あいつ以外の男は大体かわいい幼馴染なんていない。大丈夫だ、あいつが特殊でオレが普通なんだ。ほら、もう何も怖くない。オレはもうひとりじゃない。泣いてなんかいない。

再び集中する。いちいち反応するからいけないんだ。じいさんにも『お前は集中力が足りん！』と言われるわけだ。それでも一度没頭すると、集中状態のオレは自分でも驚くほどの力を発揮する。周りの動きが遅く見えたり気配の察知や攻撃に対する反応が早くなったり。

ほら、今だつて遠くで落ちる水の――

『これ……作るの大変だったんじゃないか?』

『う、ううん、ちよつと早起きしただけ。それにキンちゃん、春休みの間またコンビニのお弁当ばかりだったんじゃないかな……つて思つたら、心配になつちやつて……』

『そんなことお前に関係ないだろ』

……ふう、やれやれだ。キンジ君たら朝から白雪さんに手作り料理なんてもらつちやつて。あまつさえ、その天使のご好意を無下にしようとするリア充鈍感クズ野郎なんだからもう。

だが別に嫉妬したりはしない。あのふたりはお似合いだと思ふし、素直に祝福してやる。オレは大人なのだ。なんだか集中も切れてしまったしキンジの部屋に行くことにするか。

「ようキンジ、おはよう」

「おう、ソウ――」

「キンジ。朝から悪いが今からお前を全力でぶん殴る。歯あ食いしばれ。あ、白雪さん

おはよう」

「いきなりなんだ?!」

「朝から清楚系美少女の手作り料理をおいしくいただくリア充野郎は制裁しなければならぬんだ。大人しく殴られるが良い」

「理不尽だろ。これは白雪が勝手に持つてきたんだ」

「そ、そう! キンちゃんは悪く無……」

「ああん?! 理不尽はどっちだ! なんてお前にだけ嫁が『キンちゃん♪』とか言つて勝手に料理持つて来てくれるんだ? こんな世界間違つている! オレなんて幼馴染みすらいねえんだよ?!」

「知るか! それに嫁つてなんだ?」

「よ、嫁!?!……キンちゃんの妻……ふ、ふふっ」

部屋のテーブルには重箱にエビやら鮭やらのやけに高そうな食材がならんでいる。

白雪さんが作ったのだらう、さすが星伽神社の箱入りお嬢様だ。いいお嫁さんになるだらう、むしろお嫁さんにしたい。結婚してください。

しかしトリップしている白雪さんを見てわかるように、彼女はキンジにゾツコンだ。それはもうたまに怖いくらいに。いつもは大和撫子を体現したようなおしとやかな子なのだが、時たまこのようにどこかの世界に旅立ってしまう。

そんな彼女の愛情を受け止めるどころか迷惑そうにするキンジは一回殴った方が良
いと思うんだ。なんか涙出てきたちくしよ。

「ちくしよ……オレも彼女欲しいよお……この鮭食べて良い？」

「なんで泣いてんだよ。好きなの食べ、さすがに食いきれん」

「ふっ……ふふ……妻……」

「うまいなこれ」

非情な現実には打ちのめされながらもなんとか気持ちを立て直し、愛妻料理のおこぼれ
をいただく。未だに妄想の世界から戻ってきてないけど、この子料理うまいな。

「さて、オレは先に行くぞ。ごちそうさまでした」

「えっ？あ、お粗末さまでした」

「なんでもういいのか。なんか用事でもあるのか？」

「いや、別にないけど……」

ここにはいられない——そう悟ったのだ。視界の端でキンジをチラチラ見つつ頬を
染めながら、みかんを剥いている白雪さんがいたからだ。

それ、オレの分じゃないですよね？キンジのために剥いてあげてるんだろ？ね。ごち
そうさま言うまでオレの存在忘れてたんじゃないか。泣いてるオレもいるんですよ？

「……白雪さんの愛はお前だけのものだ」

「く、黒野くん?!」

「何言ってるんだお前」

いたたまれなくなったオレはそそくさとキンジの部屋を出る。あの空間にいたら心が荒んでいく。寮の近くから学校へ向かうバスも出ているが、今日は天気が良いので自転車で行こう。きっと自然がオレの心を癒してくれるさ。

オレが通う東京武偵高校は、レインボーブリッジ南方に浮かぶ南北およそ2キロメートル・東西500メートルの人工浮島にある。一般教育の他に武偵の活動に関わる専門科目を履修でき、科目は強襲科や狙撃科、探偵科など多岐に渡る。

最初はその多彩さにしり込みしたものだ、学科名の通りの事を学ぶので、どんなことをするのかはすぐ理解できた。

ゆつくり景色を眺めながらのんびりと自転車を漕ぐ。男子寮からだいぶ走り、学校が見えてきたところでふと空を見上げる。

今日は晴れ、春の陽気に照らされて気持ちの良い朝だ。暖かい風、道の草花、小鳥のさえずり、キンジの叫び声、全てがオレの心を癒していく。

特に最後の叫び声は、朝から幼馴染み同士のいちやいちやを見せつけられ荒んだ心を

——ん?

何かが横を高速で通り過ぎて行つた。

「……………??」

今、前を走っていったのは、確かいつもはバスで学校に行くハズのキンジが必死に漕ぐ自転車と、それに併走するように走る、たしか『セグウェイ』とか言う乗り物だ。

しかもそのセグウェイ、人が乗っておらず、変わりに短機関銃のUZIが取り付けられていた。

「……………ははっ。なかなか派手な登校だな」

意外すぎるエクストリーム登校に理解が追い付かず、学科の第2グラウンドの方に走り去った2台を呆然と見送ってしまった。いったいどんな業を背負えばあんな特殊な状況に追い込まれるのか。きつと日ごろの行いが悪いんだろう、主に女性関連で。

「つと、笑ってる場合じゃないな、追いかけてやらないと」

恐らく何らかの事件ではあるのだろうと、走り去ってしまったキンジを追いかける。

武偵憲章の4条に『武偵は自立せよ。要請なき手出しは無用の事』とあるが、さすがに目の前の危機を放っておくことは出来ないな。

とは言っても、速度が出ている自転車が今から走って追い付くのはキツイか。

「……………あれ、アリアさんか?」

何とか自転車を目視出来る距離を維持していると、グラウンドの近くにある7階建ての女子寮の屋上に女の子が立っていた。

高校2年生にしては小柄すぎるシルエットにピンクの長い髪をツインテールにしている。遠目から見てもわかるその特長から、去年の3学期に転入してきた神崎・H・アリアさんだろうと当たりをつける。同じ強襲科なのですぐにわかった。

あんなところで何をしているんだろう、と思った次の瞬間にはすでに飛び降りていた。

一瞬驚いたがすぐにパラグライダーを開き、キンジに向けて降下した。どうやら助けるつもりらしい。

「……やっぱりすげえな」

その救出劇は鮮やかだった。降下しながら2丁の拳銃でセグウェイを破壊し、そのままパラグライダーに逆さ吊りになってキンジを抱き止めた。

運転手を失った自転車はコントロールを無くし、よろよろと少し走ったあと——爆発した。

「?!爆弾か!!キンジとアリアさんは……!」

どうやら自転車に爆弾が仕掛けてあったらしい。アリアさんが何故あんな助け方をしたのかと思っただが、恐らく自転車が減速か停止かすると爆発する仕組みだったのだろう。それを避けるために自転車の勢いを殺さずにキンジを助けたのだ。

改めてその判断力と行動力に驚きながら、爆風で体育倉庫の方に吹っ飛ばされた2人

のもとへ向かう。

「ん？なんだ？……！ウソだろ!？」

オレが体育倉庫に向かうのより速く、先ほどのセグウェイと同型と思われるものが7台も走っている。もちろん全てにUZI付きだ。

——ガガガガガン！

「くそっ!!」

体育倉庫の中に向かってセグウェイが斉射する。ふたりは無事なのか？

「キンジ！アリアさん！無事か?!援護するー!」

「ソウジ?!わかった！お願い!」

ふたりに呼び掛けたが、返事があつたのはアリアさんの方だけだった。防弾の跳び箱を盾にして応戦しているようだ。

キンジは無事か？姿の见えない友。援護するも、なかなかセグウェイに当たらない。次第に焦る。

なんとか追い払いうが、まだ近くにいる。きつとすぐに斉射を再開するだろう。……このままじゃジリ貧か。

どうしたものかと考えていると——キンジがアリアさんをお姫様抱っこして跳び箱から飛び出してきた。

「ちよつとの間だけ——お姫様にしてあげよう」

「な、なな、なに……?!」

「そこにいたか! ってお前この状況で『なってる』のかよ!」

先ほどの朝食の時と別人かと思うほど、柔らかい微笑みとキザったらしい言葉を扱うキンジ。『ヒステリアモード』になつたのだろう、なにやらかつこつつけたことをアリアさんに言っている。

7台のセグウェイを前に余裕で拳銃を構えるキンジは、そのセグウェイ達の一斉射撃を全て上体を反らしてかわした。そして流れるようにUZIの銃口に弾丸をお見舞いし、一瞬にして全てを破壊してしまった。

『ヒステリアモード』のキンジはやはりすごい。と思うのと同時にオレの中には怒りが沸いていた。

——状況を整理しよう。まず『ヒステリアモード』についてだ。詳細は教えてくれないのでわからないが、どうやらキンジが性的に興奮すると『ヒステリアモード』になり、急激に戦闘能力、判断力などが向上するようだ。性的に興奮すると、そこが大事だ。

つまりキンジは……いや、遠山キンジ容疑者はこの状況で欲情したということであ

る。自転車に仕掛けられた爆弾に吹っ飛ばされ、UZI付きのセグウェイに攻め立てられながら、こちらの心配をよそにハアハアしてやがったのだ。

しかも状況的に、興奮を覚えた相手は一緒に跳び箱の中に隠れて密着していたアリアさんということになる。

アリアさんは……確かにかわいい。美少女と言って良いだろう。だが彼女は、彼女には失礼だが小学生と見紛うほど小柄で起伏に乏しい。

そんな彼女に何を感じたのか、何をしたのか……それによつては遠山容疑者に対する処遇も変わってくる。

キンジを疑いたくはないが、状況がそれを許してはくれない。あろうことか彼女の前でベルトを外し始めやがった。

何をする気だ、やめろ、しかしいきなりの展開に声が出ない。よく聞こえないが奴の言葉に真っ赤になるアリアさん。くそっどんな卑猥な言葉をかけやがった！確保しようとして遠山容疑者に走りよる。

そして被害者であるアリアさんから決定的な言葉が発せられてしまった。

「あ、あたしが気絶してるスキに、服を脱がそうとしてたじゃない！そ、それに、む、む胸見てたあああああつ！これは事実！強猥の現行犯！」

「はい逮捕。キンジ、詳しく話しを聞こうか」

素早く確保に向かう。これは言い逃れできないだろう。これはダメです。

「……ソウジ、違うんだ。誤解なんだよ」

「ああ、そうだな。そうかもかもしれないな。詳しくは尋問科でな」

あの窮地を脱する為には必要だったのかもしれない。事実、『ヒステリアモード』のキングのおかげでセグウェイを破壊できたのだ。

でもそれはそれ、これはこれだ。

「よしアリア、ソウジ、冷静に考えよう。いいか？俺は高校2年生だ。中学生を脱がしたりするワケ無いだろう？歳が離れすぎだ。だから——安心していい」

冷静に考えてどこにも安心できる要素が無いんだが、こいつは何を言っているんだ？歳が離れていると勘違いしていても、脱がしてない保証にはならないぞ。そういう趣味の人もいる。

アリアさんも納得できないのか両手を振り上げて怒っている。当然だ、実際は高校2年生だし。

「あたしは中学生じゃない!!」

「……悪かったよ。インターンで入ってきた小学生だったんだな。助けられたときから、そうかもなとは思っていたんだ」

「いやキング、お前もうしゃべるな」

どんだんどツボにはまっていくキンジと今にも爆発しそうなアリアさん。キンジ、小
学生扱いはまずい。

というか『ヒステリアモード』になった以上、小学生かも、と思っていながら興奮し
てしまったということになるのだがそれは良いのか？

キンジの新たなロリコン容疑に問い詰めるべきか、と考えていると、アリアさんが銃
を構えだした。

「こんなヤツ……助けるんじゃないかなかった!!あたしは高2だ!!」

「ま、待てっー!」

「おっ!」

何やら戦闘が始まってしまった。困ったことにアリアさんも『ヒステリアモード』の
キンジも、オレよりもだいぶ強いので介入もできない。

……まあお互いに武偵だし、防弾装備もあるわけだから大事にはならないだろう。

強襲科では日常茶飯事くらいのもので、ふたりの戦闘を黙って見てることにす
る。

そして思ったより戦闘は長続きせず、キンジが隙をついてさっさと逃げてしまった。
つまらん。

「この卑怯もの!ソウジ何やってんのよ!あいつ逃げる!!」

「……逃げたところで同じ学校で、同じ学年だしすぐ見付かるだろ」

「そういうことじゃない！」

怒られてしまった。

怒り狂うアリアさんをなだめながらオレは、このキンジと彼女のイザコザはまだしばらく続くのだろうな、と何となく思うのだった。

2. 風穴とドレイ

「先生、あたしはアイツの隣に座りたい」

「な、なんでだよ……！」

「ブフォツ！」

朝のHRの時間になって先生が来てすぐに、去年の3学期から転入した子を紹介するというので誰かはわかったが、予想より早い再会とそのセリフに思わず吹き出してしまった。

たしかにすぐ見付かるとは言ったが、まさかアリアさんが同じクラスでさらにキンジの隣に座りたいと言うとは思わなかった。

そんな2人の、周りからみれば謎な関係性にノリのいいクラスメートたちは歓声を上げ、キンジの右隣に座っていた武藤剛氣に至っては、

「良かったなキンジ！お前にも春が来たみたいだぞ！」

とか言ってアリアさんと席を代わることを快諾している。武藤は白雪さんラブだからその方が都合いいのだろう。先生も、

「あらあら最近の若い子たちは……！」

などと何やら嬉しそうである。ふたりは決してそういう関係ではないのだが、盛り上がったこの場は止められない。みんな楽しそうで大変よろしい。

「キンジ、これ。さっきのベルト」

そして当のアリアさんといえは今の周囲の反応を知ってか知らずか、さらなる爆弾を投下してしまう。

さっきキンジに聞いたがアリアさんのスカートの留め具が壊れてしまっていたので、ずり下がらないようにベルトを貸しただけらしい。

ただ借りたベルトを返しているだけなのだが、ノリの良いバカが集まるクラスでそれは自殺行為だ。

「理子わかったー！ わかつちやつたー！ これ、フラグばつきばきに立っているよー」

ガタツと席を立ち、口火を切ったのはキンジの左隣に座るバカ筆頭、峯理子さんだ。

ゆるいパーマの金髪をツーサイドアップにし、制服にフリルをつけるなど見た目はとても女の子らしくかわいいのだが、どこか残念なところのある子だ。けどかわいい。付き合ってください。

「キーくんは彼女の前でベルトを取るような何らかの行為をした！そして彼女の部屋にベルトを忘れてきた！つまりふたりは——熱い熱い、恋愛の真っ最中なんだよ！」

完璧な推理だ……！ バカ騒ぎするにはこれ以上の推理は無い。さすが探偵科に所属

しているだけはある。おかげでクラスのボルテージは最高潮に達する。乗るしかない、このビッグウェーブに。

「キンジがこんなかわいい子といつの間にも!?」

「影の薄いヤツだと思っていたのに!」

「朝一で白雪さんの手作り料理をもらっておきながら!武藤の気持ちも考えろ!」

「ちくしょう……なんでキンジばかり!轢いてやるう!」

見事に連携を取り口々にキンジを追い詰めていく。武藤が泣いている気がするがオレのせいじゃない。

教室内がお祭り騒ぎになり、收拾がつかなくなってきたころ、予想外のことが起こった。

——教室に2発の銃声が響いた

一気に静かになる教室。顔を真っ赤にしたアリアさんが2丁の拳銃を持っている。

……これは悪ノリが過ぎただろうか。

「れ、恋愛なんて……くっつだらない!」

アリアさんの剣幕に、いつもテンションが高い理子さんもおとなしく着席する。

「全員覚えておきなさい!そういうバカなことを言うヤツには——」

「——風穴あけるわよ！」

そんな朝の風穴宣言の後、特に何もなく一般教科の授業が始まった。この学校では別に発砲してはいけない決まりは無いというのが恐ろしい。

その後も何事もなく授業は進み、昼休みに入ったところで当然のごとく質問攻めに合っているキンジをよそに、理子さんが今朝のお祭り騒ぎの件で話しかけてきた。

「いやーさつきはびっくりしたねーソウくん。まさか撃つとは思わなかったよお」

「まったくですな。理子さんがノリノリで迷推理したからだ。反省しなさい」

「あー理子のせいにしたー！ソウくんもノってたくせに！ぶんぶん！」

ぶんぶんと口で言ってるあたりキャラを作っているのだろうが、違和感無くかわいいと思える。しゃべり方や仕草はあざといが、それがよく似合っているから文句も言えない。むしろ良い。付き合ってください。

「まあアリアさんが何考えてるかはわからないけどねえ。わざわざ隣の席に座る意味はなんだろう」

「くふふつ。だからあふたりは熱い、熱い……」

「ストツプ。また撃たれるぞ」

そんな冗談を言い笑いあってから、お互いに昼休みに用事があるということでのその場

で別れた。彼女は基本的に誰にでもあんなノリで明るい子だ。このクラスのアイドルになるだろう。

朝から騒がしい事件が起こり少し疲れたオレは、全ての授業が終わったところでまっすぐ家に帰って一息ついていた。今は夕食を食べているところだ。

「……さすがオレ、素晴らしい腕だ」

自分でご飯を作り自分でそれを食べる。オレには勝手にご飯を作ってくれる幼馴染も彼女もいないのだからしょうがない。ひとり寂しく自画自賛していると、下の部屋で今朝と同じように来客あったようだ。

ピンポーン

また白雪さんだろうか？朝夕2回来るとか完全に通い妻だな、うらやましい。さっさと付き合っちゃえば良いのと思う。

ピンポンピンポーン

ピポピポピポピポピピンポーン

「うるせえー」

あんまりにも連打するのでさすがにうつつとうしくなり、思わず言ってしまった。窓開

けてたせいかいつもより音が大きい。

これは白雪さんじゃないだろうな、彼女はおしとやかな子だ、きつとこんなことはない。

そう思いながら迷惑な来客とキンジに文句を言うために階段を降り、キンジの部屋に行くことにする。

部屋の前には誰もいなく、留守だと思つて帰つたのか、部屋の中にいるのか。どつちにしる文句の一つでも言いたい気分のオレはドアの前まで行き、インターホンを押そうとした。

と、そこで中から話し声が聞こえた。

『あんだこ、一人部屋なの？』

特徴のある声なのでアリアさんだとすぐわかつた。何の話をしているのか？というか今朝の今で、すでに部屋に来るとかキンジのフラグ立てスキルはどうなっているのだろう。オレの部屋なんか女子が来たことすら無いのに。

悔しい気持ちもあるが、僻んだところでしょうがない。オレは大人なのである。

理子さんの迷推理もあながち間違つていなかったのかもしれない。個人的には白雪さんとかくついて欲しかったがそれはキンジの問題だ、アリアさんとうまくいくことを願つてやろう。

がんばれよ、キンジ——

「——キンジ。あんた、あたしのドレイになりなさい！」

「進展早すぎだろ!!」

思わずドアを開けてツッコんでしまっていた。これはしょうがない。いきなり主従プレイとか最近の若者どうなってるの？怖い！オレ君たちが怖いよ。なんか涙出てきた。

「……………」

「……………」

「……………」

長い沈黙が訪れる。驚きの表情で固まるアリアさん。なんでお前いんの？みたいな顔で固まるキンジ。何故か泣いているオレ。

「…………キンジ。お疲れのところ悪いが今からお前を全力でぶん殴る。歯あ食いしばれ」
「またかよ?!」

「今日初めて出会った女の子を部屋に連れ込んだあげくいきなり主従プレイを始めるドM糞野郎は制裁しなければならぬんだ。大人しく殴られるがよい」

「勝手に入ってきたんだ。俺のせいじゃない」

「黙りやがれ違法フラグ建築士が！何をどうやったたら今日会った転入生が『ドレイになりなさい！』とか言いにくるんだ？突貫工事でラブコメ突入してんじゃねえよ！」

「知るか！俺だつて何がなんだかわからん」

「？な、なんなのよ……」

何がなんだかわかっていないような顔でいるアリアさん。いや、あなたの発言のせいなのだがどうしてそんな顔をしているのでしょうか。

「ちくしょう……なんでキンジばかり………お茶飲んで良い？」

「情緒不安定だなお前。適当に飲めよ」

「……よくわからないけど、あたしもコーヒー飲む。エスプレッソ・ルンゴ・ドツピオ。

砂糖はカンナ」

「了解、お嬢様。少々お待ちを」

「お前絶対わかってないだろ」

「なめるなよキンジ。余裕だ」

そんなもののインターネットで調べればすぐだろう。まずエスプレッソってなんだろうか？ルンゴとドツピオ？誰だよお前ら有名な人？

そうして四苦八苦しながらようやくエスプレッソっぽいコーヒーができ上がった。

「あら、割りとよくできてるじゃない」

「恐れ入ります」

「マジで出来るのかよ……それで奴隷ってなんだ？ どういう意味だよ」

なんとか飲み物を入れて落ち着いたオレ達は、さっきの問題発言の意図をアリアさんに聞く。

それにしても奴隷に奴隷以外の意味があるのだろうか？ R18的な話しじゃないの？

「強襲科で、あたしのパーティに入りなさい」

どうやら違ったようだ。しかしどうしてそれが奴隷になりなさいになるのか、普通に頼めば良いだろうに。

少しわくわくしていたが期待外れの話のようなので早々に引き上げることにする。

「じゃ、オレ帰るわ。あとは2人でごゆっくり」

「お前何しにきたんだ？ ていうか帰るな。こいつと2人きりにしないでくれ」

「夕食の途中なんだ。悪いが構っている暇は無い」

食器を片付けて帰る準備をする。早く帰らなければせつかく腕によりをかけた夕飯が冷めてしまう。そういえば何しに来たんだっけ？

「一応、ソウジも候補に入ってるから」

さあ帰ろうかというところでアリアさんが意外なことを言ってきた。え？ ドレイ候

補になってるのオレ。

「それはありがたい話だけどなんで？オレはしががないBランクだけど」

「この前の模擬戦でだいたいあんたの実力がわかったわ」

「……？あの時は逃げ回るのに精一杯だった。だからそれが決め手だと言われてもな」

「逃げ回れたからよ。あたしの攻撃、全部捌いてたじゃない。並の動きじゃないわ」

確かに反射神経はよい、というか集中すると周りの動きが一瞬ゆっくりに見える時もある。日ごろの精神統一の成果だろう。

「ふっ、ばれてしまったか。そう、強襲科の秘密兵器とはオレのことよ」

「変わり身早いな」

やれやれ、実力者とは目立とうと思わなくても注目を集めてしまいうらしい。はっはっは良いんですよ？パートナーにしてくれても。

「でもソウジは攻めが全然ダメね。あれじゃ犯罪者の強襲逮捕なんてできないわ」

「……そんなはつきり言われると……まあ、一応連絡先渡しとくよ」

そうやって自分の部屋にもどる。いや、別にパートナーになりたかったとかそんなんじゃない。そんなじゃないから。

その後も下から怒鳴り声やら悲鳴やらチャイムやら聞こえた気がするが、しばらくす

ると静かになった。きつとアリアさんも帰ったんだろう。

——わかつてはいた。自分が『撃てない武偵』なんて呼ばれてるのも知ってるし、演習してて亀だなんだとヤジられるのはしよっちゅうだ。

でも、武偵は自分も、誰かも、そして犯罪者ですら護らなきやいけない。

『武偵法9条 武偵は如何なる状況に於いても、その武偵活動中に人を殺害してはならない』

日本で決められた法律だ。

だったら——だったら攻撃しなければ良い。実弾を撃つ銃も人が斬れる剣も使わなきやいい。なんでわざわざ相手を殺してしまう可能性が高い武器を使わなきやならないんだ？人を殺すことを禁じるなら、『攻撃』では無く、非殺傷の武器で『制する』術を考えるべきだ。

犯罪者が凶悪だから？生半可な武器じゃ対応できないから？

それなら……それなら殺人犯でさえ 殺してはいけない なんてキレイ事を——

そこまで考えてハツとする。オレは何を考えていたんだろう、こんなの武偵の考えじゃない。それに、攻撃『できない』やつが何をえらそうに。オレは相手を制する格闘に秀でているわけでもない。オレが言うことには重さも何も無い。

オレはノロマな亀、『撃てない武偵』だ。それでいいじゃないか。誰かを護り、自分を護って生きていけば良い。犯罪者の強襲逮捕とかは、アリアさんとかそういう荒事が得意な人がやればいい。適材適所というヤツだ。

犯罪者を護るのは……きつと誰かがやってくれるさ。

翌日、朝一で今日も日課の座禅を組む。何故か今日は集中状態になかなか入れなかった。しかし時間をかければいつだって入れるんだ。

徐々に深くなっていく。半目を開けつつもどこも見ない。意識を失わずに何も考えない。没頭していく――

『バカキンジ！ほらさつさと起きる！』

『何すんだ！この……』

………え？……うん？いやいや、聞こえるわけ無いだろう、うん。朝一で来客があつたような気配は無かつたし。

まずいな、今日は調子が悪いようだ。うまく集中できないし幻聴も聞こえる。いかにいかに。下の部屋でドタバタと振動や音が聞こえるのもキンジが一人で踊つてるんだろう、おかしなヤツだな。

——ふう、深呼吸だ。いつものようにやれば良い。集中するんだ、風の音でも聞こう。今日の風はかなり弱い、それでも集中すればどれだけの強さか、どこから吹いてるのかさえわかるはずだ。

そう、どんなに微弱な風だつて——

『登校時間をずらすぞ』

『なんで？』

『なんでも何も、この部屋から俺とお前が並んで出てつてみる。見つかったら面倒なことになる』

………はっはっは確かにその通り、この男子寮から女連れで出ていったらウワサになるよな。正しい判断だよキンジ。

なるほど、そういうことなら手助けしてやろう。何、心配いらないさ、オレにまかせとけ。とりあえずキンジの部屋に行こうか。

「よう、キンジ。おはよう」

「!?ソ、ソウジ!!」

「……キンジ、朝から悪いが今から」

「わかっている!さすがに俺もこれはどうかと思う。わかっているから殴ろうとするな」

認めるということはつまりそういうことなのだろう。

「つまりなんだ?あの後お2人は親睦を深めて一緒にお泊りになった、と。2人は昨日お知り合いになられたんですね?はっはっは、手なんか組んじやってもうキンジ君たら女たらし糞野郎なんだから」

「深めてない!よく見ろ!しがみつかれてるんだっ!は……な……せ!」

「やだ!逃がすもんか!キンジはあたしのドレイだ!」

「おやおやお熱いことで。邪魔しちや悪いから先行くな。お幸せに!」

いつまでもじゃれあっている微笑ましい二人を置いて先に学校に行くことにする。置いて行くとか助けてくれとか聞こえたがきつと気のせいだろう。

「——と言うわけだよ理子さん。これが今朝の出来事だ」
「うおー!! キーくんってばだいたーん!」

学校についてすぐに理子さんに報告した。なにやらキンジとアリアさんの仲が気になるようで、オレの話に興味深々だ。

「いやまさかキンジがなー。オレは白雪さんだと思つてたのに」
「俺は良いと思うぞ! 応援しようぜ!!」

いつの間にか話に混ざつていた武藤がとてもうれしそうに言つてきた。キンジとアリアさんがくつついたからと言つて白雪さんがお前になびくわけではないとは言わないほうがいいか。なんか幸せそうだし。

アリアさんがこのクラスに入つてから話題に事欠かない。しばらくは退屈しなくて済みそうだ。

それから数日たったある日教室で、何か疑いの眼差しをこちらに向けながらキンジが話しかけてきた。いったいどうしたと言うのだろう。親友とも言えるこのオレに向かつてそんな目で見てくるなんて……心当たりがありすぎる。

「……アリアフアंकクラブとかいうところで、俺とアリアが付き合っていることになっているらしい。理子からそう聞いた」

まさかオレがその情報を流したとでも言うのだろうか、心外だ。

「へー。アリアフアंकクラブの人には、アリアさんがキンジの腕にしがみついて一緒に部屋から出てきたという嘘偽り無い事実しか話してないけど、どこから付き合っているなんて話になったんだろ？」

「やっぱり情報元はお前か。いいか、アリアは俺の部屋に無理矢理泊まったんだ。自分のパーティーに入るって言うまで泊まるってな」

「……キンジ、アリアさんがいくら子供っぽいからって、そんな駄々っ子みたいな理由で泊まったなんて言われて信じられると思うか？」

そんなまさか、さすがにすんなり信じることはできない。あるとしても、話込んでいて夜になったから仕方なく泊まった、ぐらいの話だと思っていた。

「それが本当だ。なんとか追い出そうとしたんだが暴れられてな。それに昨日だって俺を待ち伏せして、わざわざ猫さがしの依頼に一緒についてきた」

確かに昨日は強襲科の授業には出ていなかった。探偵科のキンジの方に行ってたわけだ。

「そりゃパーティーのメンバーってのは重要だけど、なんだか必死だな。なんでそんな

強引な手で勧誘してくるのか聞いたのか？」

「聞いたが武偵なら自分で調べろの一点張りだ。理子にもアリアの調査を依頼したが、アリアがすごい奴だって言うこと以外わからなかった」

アリアさんがすごい人だと言うのはオレも聞いたことがある。『双剣双銃カドのアリア』——アリアさんは高名な貴族の上、ロンドン武偵局のSランク武偵として活動し、その間一度も強襲逮捕で犯罪者を逃したことがないらしい。

しかしその辺りの表面的な情報は調べようと思えばすぐ調べられる、ありふれた情報だ。そこから彼女の行動理由を察することはできないだろう。

「……で、アリアさんは今日も泊まるって？」

オレの問いにうなだれるようにキンジが頷く。そんなに嫌なんだろうか。

しかし、気の毒には思うがこれはキンジの問題だ。手助けしてやらんことも無いが決めるのはキンジ自身じゃなくてはならない。

——そう、あの事故があった時から、武偵に憧れを無くしたキンジが、武偵を辞めるかそれともアリアさんと続けて行くか。

それを決める大事な問題なのだ。

3. 青春とバスジャック

「遅い」

どうにかアリアさんを説得してくれ、と頼まれたので仕方なく学校の帰りにキンジの部屋に入ったところで、何故かすでにアリアさんが部屋にいた。

開口一番に帰りが遅いことを怒るアリアさんは、きつと今か今かとキンジの帰りを待ちわびていたのだろう。

「お前もう合鍵渡したの？まだ早いんじゃないか？」

「渡すか！……はあ、一応聞くがどうやって入ったんだ」

「あたしは武偵よ」

合鍵を渡して無かったのならどうやって他人の部屋に入ることができるのか、という当然の疑問はアリアさんの即答で解決した。

武偵よつてことは武偵の基礎である鍵開けで部屋に入ったということだろう。つまり勝手に人の部屋のカードキーを偽造して侵入したという自白ととれるな。

「はい逮捕。アリアさん、詳しく話を聞こうか？」

「なんでよ!?!」

「武偵だからって勝手に部屋に入っているわけじゃない。不法侵入です」

当然だ。この短期間でカードキーを偽造し侵入したという行動力と執着心、猫探し任務での待ち伏せ。そしておそらく帰宅時間もある程度把握しているだろうからストーリーの容疑もある。言い逃れはできない。

「キンジはあたしのドレイよ！ドレイの部屋に入るのに許可なんて要らないわ」

「っ!?なるほどた、たしかに……！すまない、不当逮捕だったようだ」

「それであつさり納得するな。俺はそいつのドレイでもなんでも無い」

完璧な反論で論破されてしまった。そりゃそうだ、ご主人様がドレイの部屋に入るのに気を使う必要なんて無いや、ははっ。

「で、アリアさんはなんでここに居るんだ？今日もここに泊まるのか？」

「そう。キンジが強襲科でパーティーに入るって言うまで泊まるの」

キンジが言っていた通り、そのつもりらしい。しかしパーティ組むためだけに男の家に泊まるとか、なかなかの覚悟だ。私を好きにして良いからパーティ組んで！みたいなアレですかね？ふしだらですね。

しかし意地になっているアリアさんもいることだし、なんだか思ったより面倒な状況だな。

「よし、と言うわけでオレは帰る。お疲れ様でした」

「逃げるなソウジ。こいつをどうにかしてくれ」

逃げるだなんて心外だ。まあ、どうにかしてくれと言うのであれば全力で説得してやらんこともない。

「……アリアさんも一緒に帰ろ？」

「嫌」

「ダメだったわ、すまん」

「あきらめるの早いな!？」

アリアさんの意志は固い。これはどうすることもできないだろう。薄情者だのと理不尽な罵倒をしてくるキンジを無視して自分の部屋に帰った。

翌日、オレは強襲科で授業を受けていた。強襲科とはその名の通り犯罪者や犯罪組織を強襲し、剣や銃を用いて逮捕する術を学ぶ学科だ。

逮捕卒業時生存率97%——つまり卒業するまでに死人がでる恐ろしい所である。

授業もそろそろ終わりそうな頃、そんな場所に何故か探偵科であるキンジが来ている。

もしかするとアリアさんと話し合った結果、強襲科に戻ることにしたのかもしれない。

キンジは今でこそ事情があつてEランクの探偵科だが、入学当初は強襲科を履修し、Sランクだった。その名残か、強襲科ではキンジを慕う人間も多い。

「おうキンジい！お前は絶対帰つてくると信じてたぞ！さあ、1秒でも早く死ね！」

「キンジ！お前みたいなマヌケはすぐ死ぬぞ！武偵つてのはマヌケから死んでくもんだ」

慕う人間も多いんだ。決して本気で死ねと言われてるわけでは無く慕われているんだ。強襲科では挨拶みたいなものだ。

実際何をしに来たのかはわからないが、その調子で授業の終わりまでもみくちやにされていた。

「で？何しに来たんだ？」

授業が終わり、やっと解放されたキンジに強襲科に来た理由を尋ねた。

「1回だけアリアと組んで事件を解決してやることになった。だから強襲科に転科しないで自由履修として、強襲科を取る、その手続きだ」

「ほー。お前が折れたのか？どうい風風の吹き回しだよ。『なんでもするからパート

ナーになって!』イベントが発生したのか?」

「……………」

軽い冗談のつもりだったのだが……キンジのリアクションがぎこちない。つまりそういうことなのだろうか。

これは制裁するべきだろう。

「……キンジ、今からお前を」

「殴るな。なにもしてない」

「……言われはしたのかよ。ウソだろ?」

「似たようなことはな」

実際に言われたらしい。アリアさんが必死すぎて怖い。

しかし兄を喪ったあの事故以来、強襲科から探偵科に転科し、今年で武偵を辞めると言うまでやる気を無くしたキンジを引っ張り出すとは、アリアさんの強引さには驚かされる。

そんな話をしながら強襲科を出たところで、そのアリアさんが夕焼けの中で、門のところで誰かさんを待っている。こちらを見てからうれしそうに小走りしてきてるが、オレさんを待っていた訳じゃないな。

「アリアさんと帰る約束でもしてたのか?」

「するわけ無いだろ。勝手に待ってたんだ」

とたんに不機嫌になりキンジは答えた。約束してないにしてもそうなりそうなのは理解しているのだろう。

「まあどつちでもいいけどな。オレはこれから武器の整備してから帰るから」

「ああ、じゃあな」

そこでキンジと別れ、授業で使用した武器の調整をするために強襲科の施設内に戻った。

おそらくアリアさんと一緒に帰るのだろうが、彼女の願いを聞き入れて一応強襲科に戻ったことで、今よりは関係が良好になると思う。

後日、キンジとアリアさんがおそろいのストラップをつけていた。良好になるだろうとは思ったがいきなりデートをかますとは、どうすればそうなるのか一度参考に聞いてみるべきだろうか？

今日も朝から日課の座禅を組み精神統一をする。最近キンジの部屋からアリアさ

んも居なくなったこともあってか、よく集中できてきている気がする。強襲科にキンジが条件付きで戻ることになったあの日から、部屋に来ることは無くなったらしい。

外は雨。今はまだ小降りだが、予報では強い雨になりそうと言っていた。いつもは自転車通学だが、今日ばかりはバスで行くべきだろう。

「……さて、そろそろ行くか」

静かに目を開ける。やはり今日はいつもととは違い、心も静かで落ち着いている。キンジがいつもバスで行くので、せつかくだから一緒に行こうと思ひ部屋をでる。

「おうキンジ、おはよう」

「あ？ソウジか」

キンジの部屋に入ると、そろそろ行かなければバスに乗れないかもしれないのに何故か湯飲みを茶を淹れている。これから飲むつもりか？

「お前、時間は大丈夫なのか。7時58分のバスに乗るんだろ？」

「まだ時間あるだろ」

そう言つて自分の腕時計に目をやる。こいつは何を言ってるのだろうか？のんびり茶を飲む時間なんて無いだろう。

「いや、ほんとに時間無いぞ。その時計壊れてんじゃないか？」

「何言ってる、そんなわけ……」

そう言いながら自分の腕時計と携帯の時間を見比べるが、途中で固まる。

「……」

「……さつさと準備しろバカ野郎」

やはり時間がずれていたらしい。無言で飲もうとしていた茶を捨てた。そしてそこからすぐに準備し、部屋を出た。

「くそっ理子のやつ、適当な仕事しやがって」

「なんで理子さんが出てくるんだよ」

バス停に向かいながら腕時計をにらみ、悪態をつくキンジ。

「あいつに時計壊されてな。直すって言うから預けた」

「それで時間がズレてたのか。……今日の朝、急に預けた時計が返ってきた、ってわけじゃないなら、気付かないお前も相当マヌケだけだな」

「うるせえ」

普通、壊れた腕時計が返ってきたらまず時間が合ってるか確認しそうなものだが、こいつは違うらしい。

しかし、理子さんがいくら探偵科筆頭バカだとしてもそんなミスするだろうか？ いや、あの子のことだからこれもちよつとしたイタズラかもしれないな。

そうこうしている内にバス停に着いた。バス停には雨のせいかすでに人だかりができていた。その中でも背の高いツンツン頭の男がいる。武藤だろう。

「よーう、ソウジも今日はバスか？」

「おう武藤、おはよう。まあこの雨だしな」

本格的に振りだしてきた大粒の雨を指してそういうと、武藤もそりやそうだなと納得した。

他の自転車通学の奴も同じなのだろう。いつもより人が多いらしい。

少し待つと定刻通りにバスが来た。

「これ全員乗れるのか？」

定員がどの程度かわからないが、待っている人とバスを見比べると無理なような気がする。

予想は的中し、オレとキンジの前にいた武藤が乗る頃にはすでに車内はいっぱいだった。

「やった！乗れた！けどもういっぱい！乗れたとしてもどっちか一人だぞ！」

「……しようがない、キンジが乗れよ」

「いいのか？」

あと一人しか乗れないというのなら考えるまでもないだろう。

「いいのかつて、お前のチャリ爆発しただろ。歩きじゃ遅刻だろうし、オレがチャリで行く」

「悪いな」

「悪いと思うならさっさと新しいやつ買えよな。じゃ、また学校で」

満員なら仕方ないことであるが、この雨の中を自転車で行くのはなかなか辛そうだが文句を言っている暇はない。オレも早く自転車を取りに行かなければ。

大雨の中、がんばって自転車を漕ぎなんとかギリギリに学校についたオレは、すぐに教室に向かった。が、何か様子がおかしい。

バスで行ったハズの武藤もキンジもない。いったいどうなっているのか？ HRの時間になっても先生が来ないとなると、何かトラブルか。

それから少しして電話がなった。……アリアさんからだ。嫌な予感がする。

『ソウジ、今どこ？』

「一般校区の教室だ。どうかしたのか？」

切羽詰ったような声。やはりなにかあったのか？

『C装備に武装して女子寮の屋上に来なさい。すぐ』

C装備——防弾ベストに強化プラスチックのフェイスガード付きヘルメット、さらに

インカムやフィンガーレスグローブ。強襲科の物騒な事件に介入する際の攻撃的装備だ。有無を言わさずこの装備を指示されるということは――

「事件か！わかった、すぐ行く」

バスに乗っていった奴等がまだ登校していない。そこにこの電話だ、勘弁してほしい関係があるかもしれない。すぐに着替え、指定された場所に行く。

そこには同じくC装備に着替えたアリアさんが大雨に打たれながら誰かと無線で会話をしていた。

アリアさんだけでなく、階段の庇の下には雨を避けるように座る、Sランクで狙撃科のレキさんがいた。

直接話したことは無いが、有名なので知ってはいる。ヘッドホンに碧のショートヘアの美少女だが、無口で無表情、無感情のためロボットみたいと言われている子だ。

まったく、心が無いのはどちらだろうか？高校2年生の可憐な女の子に向かってロボットなどと言うなんて。

少し感情表現が苦手が無口だけだろうに、そう思い彼女に声をかけた。

「話すのは初めてだね、レキさん。オレは黒野ソウジです」

「……………」

「…………レキさん?」

「……………」

「もしもーし」

「……………」

「……………」

ロボットかもしれないな、ガン無視だ。それとも嫌われてるんだろうか。ぴくりとも動かないんだけどオレの声きこえてます？あつヘッドホンしてるからか。でも外の音聞こえないって危なくない？

どうやらレキさんは自分の世界に入っているようなので、あいさつはとりあえず後にしよう。どんな子か知らないし邪魔したら撃たれるかもしれない。そういう人多いからな。

「時間切れね」

通信を終えたアリアさんが、こちらを向きながら言う。

「もう1人ぐらいSランクが欲しかったとこだけ他の事件で出払ってるみたい」

「ならAランクは？」

「そつちもすぐ連絡取れる奴はいないわ。直接連絡できたのはあんただけ」

他に友達いないの？という言葉をなんとか飲み込んだ。直接連絡してすぐ来てくれる人がオレとレキさん、今バスに乗っているキンジぐらいしかいないのだろう。

他にも声をかければ良かったか、と思つたが、時間切れということはある時間も無さそうだ。

Bランクであるオレを一応評価してくれているんだろう、その期待には応えなければ。

「わかつた。それで何の事件だ？」

「バスジャックよ」

「……まさか、キンジと武藤が乗つてたやつか？」

「そう。さつきキンジと連絡が取れたわ。車内には爆弾も怪しい人間もいないようね」

嫌な予感的中した。あのバスがジャックされたらしい。

「爆弾？犯人から連絡があつたのか？」

「ええ、誰かの電話から突然、機械の音声で爆弾を仕掛けたこと、速度を落としたり爆発することを警告されたらしいわ。これは『武偵殺し』の犯行よ」

『武偵殺し』——武偵の車などの乗り物に爆弾を仕掛けて自由を奪い、サブマシンガンをつけたラジコンで追い回す。そんな手口を使う奴だ。

だが、『武偵殺し』は捕まったハズ……いや、今は関係無いな。模倣犯だろうとなんだろうと、今事件が起こっているのは変わりない。犯人が誰だろうとやることは変わらな

い。
「状況はわかつた。目標へはどうやって？」

「アレよ」

すると間もなく車輛科のヘリがこの場所に降りてくる。爆弾が仕掛けてあるのなら一刻も早く現場に向かうべきだろうが、それにしても早い。

「……手際がよろしいことで。警察より動きが早いんじゃないか」

「当然よ。ヤツの電波をつかんで通報より先に準備を始めたんだもの」

そう言つて少し得意げに言う。だがこれ以上軽口を叩いている暇は無い。すぐにヘリに乗り込もう。

『ヤツの』電波をつかんでということは犯人に目星がついていて、前から追つていているということだろうか。その相手をすでに捕まっているハズの『武偵殺し』だというのだから、もしかしたらバスジャックの犯人は……

いや、これも後回しだ。今は事件の解決が先だ。

——事件に関わる以上は誰もケガさせたりしない。それがオレの目指す武偵だ。細心の注意を払つて行動しろ。よく考えて動くんだ、みんなを護るために。

轟音の中ヘリがしばらく飛ぶと、レキさんがインカムごしに言葉を発した。

『見えました』

何がだろうか？窓から見えるのは台場の建物と湾岸道路くらいで車を視認するには遠すぎる位置だ。

『ホテル日航の前右折しているバスです。窓に武偵高の生徒が見えます』

「えっマジで見えるの？」

『よ、よく見えるわね。あんた視力いくつよ？』

『左右ともに6.0です』

自然とともに生きる辺境の部族とかは視力が異常に良いという話はよくあるが、レキさんはそんな人には見えない。単純に規格外の人なんだろう。

操縦士がレキさんの誘導通りに降下していくと、確かにバスが見えてきた。だいぶ速度が出ているのは武偵殺し（仮）の指示か。

『空中からバスの屋上に移るわよ』

「待った。まずは周囲の確認だ」

『周囲？』

「犯人は武偵殺しだと推測してるんだろ？だったら警戒すべきなのは爆弾だけじゃない」

『……！そうか、ヤツの手口！』

犯人を武偵殺しとするなら当然、爆弾を仕掛けた乗り物を追うように、サブマシンガ

ンを搭載した何かがないか警戒するべきだ。

オレの方に確証があるわけではないが、アリアさんが相手を武偵殺しと判断した以上、そのように動くべきだろう。

———そういえばキンジのチャリにも爆弾が仕掛けてあつてそれをUZI付きセグウェイが……

『見えました。バスの後方をUZI搭載の赤いオープンカー、ルノー・スポール・スパイダーが追っています』

またもや思考が脱線しそうになったとき、インカムからレキさんの声がした。本当にいたのか、UZI付きのが。

『レキ、狙える?』

『……建物で射線が通りません』

『わかったわ!バスに移り次第あたしがルノーの相手する。ソウジはその間に爆弾を探して!』

「了解。お互い気を付けよう!」

そう言つてヘリから強襲用パラシュートを使いながらバスへ降下した。

ヘリからルノーを狙い撃つて安全を確保してから降下するのが最善だろうが、ここは建物の多い台場。狙うのは無理があるようだ。

ルノーもオレの射撃では足止めできないだろうが、キンジのチャリジャックの時に、パラグライダーで飛びながらセグウェイを撃つて見せたアリアさんの腕なら大丈夫だろう。

降下しながらバスの屋根には爆弾が無いことを確認し、降りてすぐにワイヤーを支えに、車体の下を確認する。……! あった。で、でかいぞこれは!

『ソウジ! どう?!』

「車体の下にカジンスキーβ型のC4! 視認できる範囲で炸薬を約3500立法センチ確認! 解体を試みる!」

『了解。こっちはまかせて!』

レインボーブリッジに入ったところで爆弾の解体をしている間、上からUZIとアリアさんが撃ち合う音が聞こえた。相対した瞬間にタイヤを狙ったのか、ルノーは後方でスピンしてガードレールにぶつかった。さすが、素早い対応だ。

周囲に他の車もいなかったようで、おそらく警視庁が手を回して封鎖してくれたのだろう。みんな自分の仕事をこなしている、負けてられないな。だが――

『爆弾は?』

「……バスから取り外せても、ここで解体するのは時間がかかりそうだ。まずいな……」
『都心に着く前になんとかしないと!』

『ソウジさん』

「え？」

『レキ？』

爆弾が解体出来ないまま高速で走るバスが都心についてしまうのは避けたい。どうすべきか、というところでレキさんがオレの名前を呼ぶ。

「こんなときなのに、オレの名前知ってたの？などと考えてしまう。

『海に落としてください』

「……そうか、了解！」

解体しなければならぬと少し視野が狭まっていた。確かにその方が確実だろう。

バスに取り付けてある金具を外し、海に放り投げる。

少ししてから水柱が上がった。どうやら成功したらしい。

「……ふう、なんとか上がったか。ちよつと焦ったな」

『お疲れ様、ソウジ。人手が足りないかと思っただけど問題なかったわね』

「ああ、お疲れアリアさん。先に車内のキンジと連絡取れたのが大きかったかな、状況確認の手間が省けた。レキさんもありがとうな」

『いえ』

バスは次第に減速し、停まった。そして中から乗客が降りてくる。もちろんキンジや

武藤もいる。

「まあ、無事でよかった。けが人はいないよな？」

なんとか怪我人もなく、バスジャック事件は解決した。

しかし犯人は当然捕まっていない。犯人は何者なのか、本当に武偵殺しなのか……何もわかっていない。

4. 推理と結末

バスジャック事件の後、アリアさんとオレ、そしてキンジで今回の事件について資料の整理をしていた。

事件現場を担当した者の視点としてまとめた資料を、今回の捜査を担当する理子さんを中心とした探偵科チームに報告書として提出するのだ。

「なんで俺までやらなくちゃならないんだ」

「お前チャリの時も今回も被害者だろ？同一犯っぽいからまとめた方が楽なんだよ」

キンジがだるそうに言う。むしろこういうのは探偵科よりの仕事じゃないだろうか。

まあこいつは武偵自体を辞めようとしてるわけだからそうなるのも仕方ないかもな。だが、少しイラツとした顔をしたアリアさんはキンジに言いたいことがあるようだ。

「文句言つてないでさっさとやりなさい！犯人は『武偵殺し』なんだから同一犯に決まってるでしょ、ヤツを追うの！」

「俺は犯人を追うつもりは無い。それに武偵殺しは逮捕されたハズだぞ、アリア」

「それは真犯人じゃないわ、誤認逮捕なのよ」

確かにキンジの言う通り、武偵殺しは逮捕された。だがアリアさんの方も、今回の事

件は『武偵殺し』だと言う。何か確証があるのだろうか。

「誤認逮捕ね……そういえばアリアさんはバスジャックの時に『ヤツの』電波をつかんだ、って言ってたな。前から追っていたのか？」

「ええ、ヤツが車とか爆弾を遠隔操作するための特殊な電波を割り出したの」

「なるほど、じゃあ実際に操作していたのが『武偵殺し』だとは限らないわけか。真犯人を知っているわけじゃないんだろ？」

「違う！武偵殺しなの！あたしにはわかるわ」

同じ電波を発しているからといっても、模倣犯が偶然か故意に同じものを使ったかもしれない。今捕まっている人が『武偵殺し』では無いと言える根拠にはならない。

ところがアリアさんはそれでも譲らない。

「そこまで言うならその他に、今捕まっている『武偵殺し』が誤認逮捕だという証拠があるのか？」

「……………」

「?どうしたアリア」

証拠の有無を聞くと黙りこんでしまった。しかし証拠が無いわけではなく、言うべきか迷っているように見える。

しばらくして意を決したようにアリアさんは言った。

「……教えるべきか迷ってたのよ。今捕まっているのは——あたしのママなの」

「な?！」

「誤認逮捕だつていう証拠は無いわ。それどころか犯人はママだつていう証拠は不自然なくらいある」

「それは……」

母の無実を信じている。……それだけでは無く他にも疑う余地があるようだが、確かにアリアさんが信じる理由にはなる。彼女がいつも焦っている様な、必死な様な気がするのにも関係あるのかもしれない。

「悪かった、少し無神経だったな。……アリアさんが誤認逮捕だと信じる理由はわかつたし、オレも信じたいと思う。でも」

「わかつてる!……証拠がないもの」

「……うん、残念だけど」

「アリア……」

空気が重くなる。

証拠が無いのなら誰もアリアさんの母の無実を晴らすために動きはしないだろう。だからこそ彼女は自分で追っていたのだ、『武偵殺し』の電波を。

だからと言って、今はどうすることもできない。できるのは奴の事件をまとめて、探

偵科に報告するくらいだ。本物だろうと模倣犯だろうと、比べてみれば今後の対策くらいは見えてくるだろう。

とりあえず仕事を進めねば、と『武偵殺し』の過去の事件と今回の事件を照らし合わせる。

——『武偵殺し』が起こした事件とされているのは2件。今回と同じような手口でバイクジャックとカージャックで武偵を襲った。……ん？これだけ？武偵殺しだなんて騒がれている割には2件だけか。いや、充分重い罪ではあるが、その2件だけで捕まったとするならニックネームをつけられるほどだろうか？

と、そこで別の資料に目が止まる。……可能性事件？なるほど、要は証拠は無いが『武偵殺し』の仕業である可能性が有る事件、ということか。

いくつかある可能性事件によって、武偵が狙われているというウワサが立ち、それが発展して仮に『武偵殺し』という名前がつけられた、ということか。

とすると、表に見えている事件よりこっちの方が案外手がかかりが——?!

「どうしたソウジ？何かあったのか？」

「ソウジ？」

「……………」

固まってしまったオレを心配するように見てくる2人。だがあまりの衝撃に少しの間答えることができなかった。

「……キンジ、さつき犯人を追うつもりはないって言ったよな？」

「あ、ああ」

「追わなきゃいけないかもしれないぞ……お前のために」

「?どうしたって言うのよ」

そう言っただけでキンジに資料を手渡す。

「なんだ?これ」

「武偵殺しが関わった可能性のある事件だ。見てみる」

「いったいそれがなんだって言うんだ?……っ?!な、なん、で……?」

「何だったのよ。あたしにも教えなさい!」

『2008年12月24日 浦賀沖海難事故 死亡 遠山金一 19歳』

「……………兄、さん……?」

「え?」

「ああ、そうだ。お前の兄さん、金一さんが亡くなったあの事故だ」

クルージング船の事故だった。金一さんは乗員乗客を全て避難させ、そのせいで逃げ遅れたことになっている。通常なら金一さんは英雄扱いされてもおかしくは無い。だがクルージング会社が訴訟を恐れ、金一さんをスケープゴートにし、マスコミもそれについて彼を非難した。曰く、『船に乗り合わせながら事故を未然に防げなかつた無能な武偵』と。そして遺族のキンジにもその矛先は向かつた。そのせいで心に深い傷を負い、キンジは武偵をやめると言うようになった。

ふざけた話だ。関係者一人づつ呼んで制裁を加えてやりたい。

顔が凍りついたような、青ざめた顔をするキンジ。無理もない、キンジにとつては一番のトラウマかもしれない。ここでこの事故を掘り返すのは酷だろうが、それでも必要なことだ。

「キンジのお兄さんが……まさか」

青ざめた顔のままうつむくキンジを、気遣うように見るアリアさん。そして少し間が空いて、顔を上げてキンジが口を開いた。

「……おかしいとは思っていたんだ。あの兄さんが逃げ遅れた、あの優秀な兄さんが、つてな。でも……いろいろあつてその事故を避けてた。本当のことを考える余裕なんて

なかつたんだ」

「キンジ……」

「違和感はずつとあつたんだ。でも、確かに武偵殺しに邪魔されたとしたら……あの海難事故が武偵殺しによって仕組まれたシー・ジャック事件だったとしたら!!」

「落ち着けキンジ。つて言つても無理だろうがな」

青ざめていたキンジの顔が怒りで赤くなる。兄のこととなると、とたんに冷静でいられないのはそれだけキンジの中で金一さんの存在が大きかつたのだろう。こいつにとっては憧れの『正義の味方』^{ヒーロー}だったのだから。

だが熱くなつていているキンジとは対照的にアリアさんは浮かない顔をしている。

「その事故では……武偵殺しの電波が感知されていないの」

「……兄さんの事故は武偵殺しと関係ないつて言いたいのか?」

「そうかもしれない。でもあたしの考えは違うわキンジ。ヤツは電波を流す必要が無かつたのよ」

「どういうことだ?」

「あたしが拾っている電波は、さつきも言つたけど、爆弾とか車とかを『遠隔操作』するためのものなの」

「——!そ、そうか!遠隔操作する必要が無かつたんだ!じゃあ武偵殺しは船内にいた

のか?!」

「……キンジの『違和感』を信じるなら、キンジが言ったように金一さんを武偵殺しが邪魔したということか、確実に仕留めるために直接。だから結果的に逃げ遅れてしまった」

優秀な兄が逃げ遅れるハズがないというキンジがずっと感じていた違和感。キンジがようやく納得できたような顔をしてうなずいている。

「まあ、この事故がシージャック事件だったっていう仮説の上での推理だけだな。けど、キンジも金一さんの死に疑問を持っていて、アリアさんも遠隔操作以外なら電波を感じることができなかつた。そこは間違いないよな?」

「ああ」

「そうね」

証拠の無い、推理というより推測だが、こう考えれば武偵殺しの次の目的が見えてくる。手がかりが無い状態から手繰り寄せた一本の糸。とことん考えてみるべきだろう。

「だとするなら、引き続きこの線で考えてみよう。奴の目的が見えてくるかもしれない。

——最初にチャリジャック以前の犯行を時系列でまとめると、まずいくつかの可能性事件。事件としては小さく、また証拠もないため報道はされていない。だが武偵殺しが関係していると思われるものだな」

「次はバイクジャック、その次はカージャックね。『武偵殺し』の犯行として報道されているのはこの2件だけよ」

「そしてシージャック、兄さんの事件か。ここでいったん武偵殺しの犯行は終わる。アリアの母親が代わりに捕まり、武偵殺しは捕まった、と報道されたわけだ」

そう、ここまですでに世間的に武偵殺しの犯行とされるもの。武偵殺しが起こす事件はひとまず無くなったんだ。

「……だがまた武偵殺しと思われる事件が発生した。キンジのチャリジャックだ。まるでキンジ爆発しろとも言うようにピンポイントで狙われた」

キンジ爆発しろは心のそこから同意できるが、物理的にやるのはダメだろう。もしかして武偵殺しはキンジのリア充ぶりに嫉妬して犯行に及んだのか？ なかなか過激な制裁だ。

「なんで俺なのかはわからんが、不自然だ。あれだけの事件を起こしながら、なんでリセットして俺だけを狙った？」

「リセット……確かにそうね。だんだん大きくなる事件が最初にもどった感じがするわ。そして次がバスジャック、また大きくなってる」

「……偶然、か？ いや、それにしてもあからさまだな。金一さんの事件を境に——」
と、そこまで言っただけでハツとして顔を上げると、3人同時に目が合った。それだ！

「チャリジャック以前の目的は兄さんだったんだ、だから直接兄さんの妨害をした！そしてその目的が達成されたから、そこで一度終わったんだ」

「そして活動を『最初から』また始めた。……これは、武偵殺しのメッセージか！新しい標的を定めたんだ」

「その標的っていったい誰のことなの？次はその人を直接狙うんでしょ?！」

「そうだ、問題はそこだ。新しい標的が、順当に行けば次あたりでバスより大きい乗り物をジャックされ、その標的である『武偵』が狙われるかも……ん？」

「……その答えはもしかしたら最初に出ていたのか？」

「わかったの?！」

「最初に?どういふことだソウジ」

「最初から標的を定めていたのだとしたら、行動を操れる武偵が1人いるじゃないか。そもそも武偵殺しは世間的には捕まっついていて、誰も本当のヤツを追おうとしてない。わざわざスケープゴートとして捕まえさせた人の娘である武偵以外は」

「おい、それって!！」

「……あたし?！」

たどり着いた、のか？ヤツの目的に、この頼りない推測で。武偵殺しが最終的な標的

を定めているとすれば、その標的を誘導するために何らかの策を使つたはず。それが、アリアさんのお母さんの逮捕なのか。

「ママの冤罪を晴らすために動いている武偵はあたしだけ。……っ！あたしはヤツの手のひらで踊らされていたって言うの?!」

「落ち着きなつてアリアさん、何も証拠はないんだ。見当外れの可能性だつてあるし」

「ああ、でもつじつまが合う。アリアは心当たりないのか？バスより大きくて、次かその次に狙われそうな乗り物だ」

もし本当に狙いがアリアさんなら次のジャック対象も決まるかもしれない。

キンジに問われたアリアさんは一瞬だけ考えるように俯いたがすぐに答えた。

「飛行機……！ロンドンに帰るための飛行機があるわ！」

「ハイジャックか!!」

「おいおい、本当に心当たりあるのかよ……っというかアリアさん帰るの?」

「ロンドン武偵局が早く帰つて来いつてうるさいのよ。もともとそんなに長く滞在するつもりじゃなくて、飛行機ももう予約してあるんだけど、キャンセルしようと思つてたの。武偵殺しも捕まつてないし、まだキンジの見極めも終わつてないから」

ロンドン武偵局がそう言うのはアリアさんがあつちで活躍していたからだろう。彼女が日本に来た理由は武偵殺しかパートナー探しかだろうが、そのどちらも中途半端で

帰るわけにはいかないというのもわかる。

「キャンセルした方がいいだろうな。アリアを狙っているなら尚更だ」

「まあ、もともとそのつもりだったなら、狙われていてもいなくても問題ないか」

狙いをそのように仮定するなら、アリアさんが乗りさえしなければハイジャックされないだろう。もともとキャンセルするつもりなら何の問題も無い。良かった良かった。

それなのにアリアさんは考え込むようにしている。……嫌な予感がするな。

「キャンセルはしないわ」

「ああ……そうなるのか」

「アリア?!何を言ってるんだお前!」

「確かに!あたしが乗らなければハイジャックされないかもしれないけど、そうとは限らないじゃない!最悪なのは誰も機内でヤツに対応できないことよ!」

「……そりゃ武偵殺しの狙い通りに行かなくて、それでも予定通りにジャックするとかヤケになつて暴れるとか、もともとが愉快犯的な動機だとかあるだろうけど。それを考え出したら……」

「武偵憲章第七条!悲観論で備え、楽観論で行動せよ!可能性があるなら備えるべきよ」

武偵殺しが武偵を狙うと言つても一般人に手を出さないと限定されない。嫌な想像だが見せしめの意味で犯行に及ぶかもしれない。

けどアリアさんを標的と仮定した話なのに、それを根本から否定するような考えはどうなの？この考えに従うなら、アリアさんが乗らない方が安全な可能性が高いだろう。

でも別の可能性がある以上……無視するわけにはいかないのか。

「それに、これはチャンス。ヤツはこつちが狙い通りに動いてると思ってる。油断して今なら逮捕できるわ」

「無茶なことを言うな。仮にそれができたとして、他の乗客はどうするつもりだ？」

「航空会社にハイジャックの可能性があるって警告するわ。あたしとロンドン武偵局の名前を出せば動くはずよ」

そう言っただけで電話しだす。そうと決めたら行動が早いあたりは見習うべきなんだろう。

しかし、動くはずよ、か。さすがは高名な貴族の上、二つ名持ちのSランク武偵、スケールが違うな。オレが同じように電話しても絶対に相手にされない自信がある。

それにしてもなんだか大事になったな、ただ探偵科への報告書作成のために来たのにどうしてこうなった。

「……大丈夫か？」

「……ああ、さすがに堪えた。まさかこんなところで兄さんの事故と向き合うことになるなんてな……でも——」

そうやってキンジがため息をつく。どこか決意したような、そんな目で言葉を続ける。

「いつかは向き合わなきゃいけないかったんだ。そして……真実が今まで思っていたものと違っているとしたら、俺も武偵殺しを追いたい。……俺はまだ、武偵だからな」

「おお、珍しくやる気だな」

良かった、とは言えないがあの事故以来死んだ目をしていたこいつの目に、少しばかり光が戻った。

その一方であまり交渉がうまくいかなかったのか、電話を荒々しく切り、無然としているアリアさんがいた。

「なんなのよもう！ そんな不確定な情報じゃ客に言えないって!! 危機感が足りないわ！」

「いや、そりやそうでしょ。乗客何人いるか知らないけど、確認もないのにキャンセルとかはできないって」

「それでどうなったんだ？ アリア」

「……一応、そういう可能性があるってことで護衛の同行を許可されたわ、少数だけ。あたし達はハイジャックがあった時のもしもの戦力として動くの。何かあつたら報酬も出すし、機内の警備も自由にしていいって。……何かあつてからじゃ遅いの！」

まあ、それで充分だろう。あるかどうかもわからない事件にしては、むしろ良識的な判断だ。

「……ところでアリア、もしかして『あたし達』に俺は入ってるのか?」

「当然でしょ」

「そうぞキンジ。がんばって来い」

「あんたにも決まつてるでしょ!」

話の流れからしてそんな気はしてたが、やっぱりそうなってしまいうらしい。いやいやもうここはプロに護衛頼みましようよ。

「ええ……アリアさんとキンジは因縁あるけどオレは無いし。依頼も無いのにそんな」

「じゃあ依頼。あたし達と一緒に来なさい。護衛よ、報酬出すから」

「ええ……SランクとかAランクの人連れてけば良いのに。それかプロの護衛雇えばいいじゃないか。いつそ会社の株買ったら?株主の言うことなら聞くかもしれないじゃん?つて言うかアリアさん乗らなくてキンジと他の誰か乗せれば解決じゃん?」

「お前何気に最低な事言ってるぞ」

「つべこべ言わない!そんなことしたら武偵殺しに対策されるでしょ!少数精鋭よ。ここにいる人間だけで対処して、外に情報を漏らさないの。それに、あたしについて来れそうなのは今のところキンジだけだけど、あんたにも期待はしてるんだから」

期待しないでいただきたい。確かに護衛なら得意分野だけど、そこまで実戦経験があるわけじゃないんだ。

「いつの間にオレの評価上がったの……もうやだキンジも何か言ってる」

「確かにソウジがいれば盾になるから良いな。武偵殺しも銃や剣を使うかもしれない」

「もうやだお前嫌い……なんでやる気マンマンなの？」

「……俺にとつてこの推理が見過ごせないからだ。別に武偵を続けるつもりになったとか、そういうんじゃない。ただ……もし本当に兄さんを殺したのが武偵殺しなら……ヤツだけは俺の手で！」

キンジが燃えている。少し前まで報告書作成すらめんどくさがってたのに燃えている。金一さんが関わってるかも知れないとわかったとたんに現金なやつだ。

「あたしだってママの冤罪を晴らせるならどこへだって行くわ。……キンジ。これが約束の、最初の事件になるのね」

「どんな大きな事件でも、とは言ったが本当に大事件だな」

「約束は守りなさい？ あんたが実力を見せてくれるのを楽しみにしてるんだから」

「俺はEランクの武偵でBランクもある。全力でやるが期待しすぎるなよ」

2人がそう言って笑いあう。……もう止められないか。

「……2人がそんなにやる気になったらオレも頑張るしかないな。でも、これでハイ

ジャックされなかつたら笑えるな」

「笑い事で済むならそれでいいだろ。イギリスの旅行ガイドでも買っておくか？」

「バカなこと言っていないの！絶対ヤツを捕まえるのよ!!」

「結束が固まったような気がするオレ達。果たして武偵殺しは本当に現れるのだろうか。」

5. 武偵殺しとハイジャック

なんやかんやあつたが、とりあえず今回の事件の報告書は出来上がった。とは言つても結局、本物の武偵殺しやハイジャックについては書かなかつたが。

ここからはいかに相手に対策されずに準備をするかにかかつている。あの部屋でした打ち合わせも外に出すことは無い。盗聴器の類も無かつたし、あとは当日まで準備するだけだ。

相手を武偵殺しと想定する以上、やりすぎるということは無いだろう。キンジ曰く、金一さんはヒステリアモードのキンジより桁違いに強かつたらしい。それを殺したのが武偵殺しというのなら……やっぱプロとかに頼んだほうがいいんじゃないかな、この件。

だが——依頼を受けた以上、怪我人は出したくない。細心の注意を払って行動しろ。よく考えて動くんだ。

「理子さんこれ、報告書。参考になるかわからないけど、どうぞ」
「ソウくんおつかれー！どう？何かわかつた？」

「いや、なーんも。犯人が武偵殺しの模倣犯っぽいのと、派手好きって事くらいかな」
同じ生徒だとしても本当のことは話すわけにはいかない。第一、見当外れな可能性だつてあるわけだしな。

「ハデ好き?」

「だつて爆弾の大きさはバスどころか、電車すら吹き飛ばす威力で、そのバスを追うのが真つ赤なオープンカーだからな。絶対派手好きだね」

「くふつ。確かにそうかも。そーいうところから意外と犯人がわかつたりするんだよ?」

プロファイリングつてやつだろうか? さすがにそのあたりは探偵科でAランクの評価を受けている理子さんだ、この件を任されているだけある。普段はおバカキャラを演じているが、演じられているからこそきつと頭がいい子なんだろう。

「ふーんそういうものかな。まあ、そのあたりは専門家に任せるよ。……そういえば話は変わるけど、キンジは見事にいたずらに引つかかった。バスジャックに巻き込まれたから、遅刻したほうが良かったかもしれないけど」

「……イタズラ?」

あれ? 伝わらなかつたか、リアクション待ちなのかと思つていたのに。

「キンジの腕時計だよ。わざと時間ずらしたんじゃないのか? ……まさか素で間違えたの?」

「あーそうだった、くふふつ。そう、引つかかったんだね。キーくんなら気付かないと思っただ」

「やっぱりなー。そういうわけだから、キンジに会ったからかってやるといい。じゃあね」

やはりイタズラだったらしい。少し間があっただけど本気で忘れてたのか？相当なめられてるな、あいつ。ま、いいや、オレもあとでまたからかってやろう。さて、仕事も一段落ついたことだし帰ろうかな。

そしてついにロンドン行き飛行機が発つ日がきた。空港には集合せず、キンジとアリアさんのチームとオレに別れて機内に入る。飛行機に爆弾が付いていないことは事前に確認済みだ。

作戦としては有事の際にまず動くのが、交代で機内を巡回している2人、犯人を追う役だ。オレは操縦室の扉の前で待機して、何かあったら乗客のフオローや伏兵と爆弾に警戒する。ハイジャックの可能性があると先方に同行は許可されているので、こうして堂々と立っていられる。

ハイジャックの定石としてはまず操縦室の掌握だろう、と怪しい人物がいなか目を光らせる。この飛行機は座席が個室になっているようで、中は何うことはできないが乗客はほとんど乗ったころだろう。

……何事も無ければ無いでもちろん良いのだが、ここまでやって意味なかったらちよつと空しいな。

飛行機が飛び立ち、しばらくして雷が鳴る。機内放送もされていたが、乱気流にあたり、少し迂回して飛ぶそうだ。まったく、ハイジャックされるまでも無く墜落するとかは勘弁してくれよ。

そんなことを考えるといつの間にか……女性のC Aがこちらに歩いてきていた。本当にいつの間にか、だ。なんだ……この人は本当にC Aか？何故ここに来るまで気付かなかった。

「……失礼、聞いているかと思いますが、ここの警備を担当している武偵です。操縦室に何か御用ですか？」

「え？あ、あの、お飲み物の差入れを……」

「……そうですか。では私が代わりに渡しておきましょう」

まずい気がする、とても嫌な予感だ。そうだ、良く知っているような気がする気配だから……警戒できなかつた。

「え？えーと……」

「どうされました？何か不都合でもありますか」

「いえ、そういうことでしたら」

飲み物をこちらに渡そうとした。その瞬間——彼女は笑った。

「っ!!」

いきなりナイフを構え、斬りかかって来る。寸でのところで隠し持っていたトンファーで受ける。

こいつ……！完全に黒だ。まさか本当に来るとはな！

すぐに緊急コールをアリアさんとキンジに送る。

「狙いはアリアさんか？……『武偵殺し』!!」

迷いはもう無かった。目の前のこのプレッシャー。今のナイフ捌き。ただ者じゃない。

こいつが……！こいつが本物の——

「くふっ。そこまでわかってたんだ、ソウくん」

「——え？」

予想外の言葉に……今度はナイフへの反応が遅れた。

「ぐっ!!」

完全に虚をつかれた。ちくしよう……腕を斬られた！でも……なんで？

目の前のC A、顔は違うが間違いない。

「……理子、さん？」

「ソウくんはあまいなあ。理子だとわかった瞬間に気を抜いたでしょ？くふふっ。でも今のもかすり傷で済んじゃうんだね」

体勢を崩し、扉にもたれかかったオレに、再びナイフで斬りかかって来る。

「ちっ!!」

何を呆けているんだオレは……目の前にいるのは『敵』だ！早く立て直せ。

「二度もやられるかよー！」

「——動くなー！」

再びの攻撃が届くところで、良く知っている男の声がした。声のする方を向くと、そ

ここには銃を構えたキンジがいた。ナイスタイミングだ。

だが目の前の『武偵殺し』はそれでも余裕を崩さない。

「Attention Please. でやがります」

そう言つて武偵殺しはピン、と音を立ててカンをキンジの方に放り投げる。

ここでガス缶?! 毒ガスか? 自爆する気かよ!

「みんな部屋に戻れ! ドアを閉めろ!!」

キンジの声が機内に響く。それと同時に寄りかかっていた後ろの扉が開いた。

「うお?!」

預けていた体重をそのままに、操縦室の方に倒れこんでしまった。

「君! 無事かね? 早くケガの手当てを」

「!は、はい。助けていただいたようで。ありがとうございます」

どうやらこちらの様子を中であがっていた機長が、機転を利かせて助けてくれたようだ。

「いや、助けられたのはこちらの方だ、礼を言おう。聞いてはいたが本当にハイジャック犯が来るとはな」

「確証があればもつと警備を厳重にできたのですが。……私たちだけでは心許ないとは思いますが、必ず、皆さんをお守りします」

ケガの手当てをしてもらい、外の様子をうかがう。煙はもう無いが通路が暗い。非常灯に切り替わっているとところを見るに停電のようだ。

そこに、『ポーン』というベルト着用を促す注意音が一定のリズムで流れ出す。どうやらモールス信号のようだ。……『おいで、わたしは、1階のバーにいる』……か。誘ってやがる。

「……行くのかね？」

「はい。まず、仲間が犯人を追うことになっています。私は、乗客の安否を確認しつつ他に怪しい人間と危険物がいないか探し、その後仲間と合流します。機長さんは内側からロックをかけ、絶対に外に出ないで下さい。可能であれば管制塔に連絡を」

「わかった。気をつけるんだぞ」

そうして再び操縦室の外にでて、周囲を見渡す。と、キンジと……アリアさんも部屋から出て来た。

「ソウジ！無事か?!」

「かすり傷だ、どうってことない。……で、なんで一緒にいるんだよ。交代で巡回の予定だろ？ちょうどタイミングが良かったのか？」

「う………その……」

ちょうど交代の時間だったとしたらあまりにもタイミングが良い。が、アリアさんは

罰が悪そうに俯き、キンジも呆れたようにアリアさんを見る。

「……アリアが雷が怖くて一人で居られないって」

「子供かよ……」

「ち、違う!! 怖いわけじゃないじゃない!!」

「いや! 今はいいや。そんなこと言ってる場合じゃない、ヤツを追ってくれ。オレは客室を回る」

「そ、そうよ! ヤツを追わないと!」

「そうだ、そんな場合じゃない、今は事件の解決が先だ。アリアさんのことはあとで笑ってやればいい。今は事件の解決に必要なやり取りだけを——そうだ。」

「ああ、これを言っておかないと。……武偵殺しの正体は理子さんだ」

「な?! ほ、本当か?!」

「オレも信じられなくて不意をつかれちゃった、気をつけろよ。じゃあな、またあとで」
「あ、ああ、わかった」

信じられないといった表情をするキンジとアリアさんを置いて、客室をひとつづつ確認していく。

全ての部屋を確認し、危険がないと判断して落ち着く。とりあえずの危機はないよう
で良かった。あとはキンジたちと合流してヤツを捕まえよう。いや、アリアさんもいる
んだ、相手が一人ならもう取り押さえてるかもしれないな。

しかし——武偵殺しの正体は理子さんか、そんな素振りは一度も見せなかったな。
……いや、キンジの腕時計の時に怪しいと思うべきだったか。こちらの行動を操作して
いたんだ。

想定がまだ甘かった、心も甘かった。だからこんなケガをするんだ、守りが取り柄の
くせに。

慎重に階段を降り、1階のバーに向かう。その途中でヤツの笑い声が聞こえた。

『きやははは！ねえねえ、狭い飛行機の中、どこへ行くっていうのー？』

高笑いとともに誰かに話しかけている。この場合のだれかはあの2人しかいないだ
ろう。

そして——その2人はオレの前から走ってきた。正確には……キンジが血まみれの
アリアさんを抱えて。

「?!ケガをしたのか？」

「ソウジ！ヤツを抑えてくれ！俺はアリアを!!」

「了解！死なせるなよ!!」

そのままキンジは走り去っていった。

アリアさんがケガをした。箇所と出血量からしておそらく側頭動脈だろう。

……誰のせいでケガをした？ 何故させてしまった？ オレが最初の接触で制していれば誰もケガをせずに済んだじゃないか。

そう思い——自分の顔を殴る。無能な亀に制裁だ。……そしてもう1人の、殴らなければならぬヤツの元に向かう。

「よう……『武偵殺し』」

「あれ？ソウくん？くふふっ……お前の出番は終わりだよ。脇役は引っ込んでな」

急にヤツの口調が変わる。そっちが素か？そのほうがやりやすいが。

覚悟を決めて愛用のトンファーを構える。

「……峰理子。お取り込み中の所悪いが……今からお前を全力でぶん殴る。歯あ食いしばれ」

「どうしたの？そんなに怖い顔して」

「仲間を……友達を傷つけ、命の危険にさらす糞犯罪者には制裁を加えてやる」

「……何も知らないヤツが！出しゃばるなよソウジ!!」

ああ、知らないさ。友達だったヤツが別の友達を殺そうする理由なんて……知りたくもない。

「——知ったことかよ!!お前にどんな理由があろうと！誰かを殺そうとしていい理由になるわけがない！そんなバカは、オレが捕まえて……償わせてやる!」

少し前まで友達だと思っていた相手に、武器を向ける。……ちくしやう、なんか涙でできた。

「……く、くふふ。そう、そうだね。じゃあ——やってみなよ!!」

互いに走りより、攻撃が交差する。

……絶対に捕まえる。ここで君の罪を終わらせるよ——理子さん。

6. 決着と着陸

戦闘を開始し、しばらくした頃、オレ達は膠着状態になっていた。相手の攻撃は全部防げてはいるのだが、こちらからも攻撃できていないからだ。誰とやったところで、オレの戦いはいつもこんな感じだから焦っているわけではない。

しかし、驚きはした。まさか髪の毛を操ってナイフで攻撃してくるとは思わなかった。両手に銃、髪に2本のナイフ。手数が多くて捌くにも一苦労だ。これは恐らく超能力という奴だろう。武偵校にも超能力を扱う学科はあるが、戦うのは初めてだ。思いの外やりにくい。

「……ハア、ハア、……そろそろ、降参、しとけよ。それで、一発殴らせろ」
「……はあはあ、ほんつと、しぶといね。亀なんて、言われるだけはあるよ」

さすがに息が切れてきた。もつと体力つけないとダメだな。
相手にも疲れが見える、弱音を吐くわけにはいかない。が、こちらの方が消耗が激しい。操縦室前でケガした腕も痛い。超痛い。目眩してきた。……時間稼ぎでもしようか。

話でもして時間稼いでいる間に回復しようか、などと考えていたところに——お待ち

かねの援軍が来た。

「理子！そこまでだ!!」

「ソウジ！無事?!」

「……おせえよキンジ。……アリアさん、思ったより元気そうだな、良かった」

やっと主役の登場だ。階段の方から2人が来た。ホント、狙ったようなナイスタイミングだよ——『正義の味方』！

……ん？でも、なんかキンジの様子がおかしい気がする。いや、おかしいというよりこの、人が変わったかのような印象は……『ヒステリアモード』、か？ということとはつまり……

「あは！アリアと何かしたんだ？よくできたねえ、こんな状況下で。くふふつ」

そういうことですよね、理子さん。そういうことだよな、キンジ。

「ソウジ、ここからは俺——」

「……キンジ。シリアスな所悪いが、今からお前を全力でぶん殴る。つーか殺す。歯あ

食いしばれ」

「それ今やるのか!？」

「オレが生と死を賭けた戦いを繰り広げている間裏で女と乳繰り合ってた節操なしには最優先で制裁しなければならぬんだ。あ、理子さんちよつとタイム!!」

「え? う、うん」

「……ソウジ、今はそんなことをやってる場合じゃない」

「それはこつちのセリフだってんだよ! いや、助かったよ? このタイミングで『ヒステリアモード』のお前とかスゲー頼りになるよ? でも感情は別! オレが涙をこらえながら理子さんと死闘を演じている間、お前アリアさんと何やってたの?」

アリアさんが真っ赤になってキンジを見て、見つめあって、あわてている。普通ではないリアクションだ。

「あ、あたし、ふあ、ファーストキスだったのに……!」

「アリア、俺もだつて言つたら?」

「本当に何やってんだよ?! お前いい加減にしろよ!」

何なのそれ、オレは何なの? なんかもう頑張つて損したよ。

「選交代! もう疲れたんで脇役は休みます! どうぞ理子さん、主役の登場です。待つててくれてありがとう」

「え？あ、そ、そう？」

律儀に待つててくれた彼女に礼を言つて、キンジ達とは逆方向、理子さんを挟むような形に移動する。

そして——キンジとアリア対武偵殺しの最後の戦いが始まる。冷たい目で理子を見るキンジ。

「疲れが見えるな。だが手加減はしない」

「ああん……そういうキンジ、ステキ。どつきどきする。勢い余つて殺しちゃうかも」
「そのつもりで来るといい。そうしなきゃ、お前が殺される。」

キンジの低い声に、理子はクラツと来たような顔をして、拳銃を構える。

「——さいっこー。愛してる、見せて——オルメスの、パートナーの力」

キンジはナイフを構えてに理子に向かって走り出す。アリアは銃を構えて、その影になるように後ろに付いて同じように走っている。

銃に対してあまりに無警戒なキンジに一瞬、理子は戸惑った。それでも一瞬の後、キンジに向かって一発の銃弾を放つ。

それをキンジは——避けない。自分を守ろうともしない。銃弾に向かってそのまま、まっすぐに向かい合い……銃弾を斬った。

理子の顔が驚愕の色に染まる。盾と目隠しの役割を果たしたキンジはそのまま屈み、後ろのエリアがすぐさま理子の拳銃に銃弾を当て、弾き飛ばす。

そしてついに2人が理子の目の前に迫り、エリアは持ち替えた刀で、キンジはそのままナイフで、理子の左右のツインテールをそれぞれ斬った。そして——

「峰・理子・リュパン4世——」

「——殺人未遂の現行犯で逮捕するわ！」

「……くっ！」

こうして、『武偵殺し』の一連の事件は終わりを迎えた。

「いやーお疲れ。さすがエリアさん、鮮やかなお手並みで。キンジも銃弾斬るとか人間やめ始めたな」

「ソウジも良くやったわ。キンジ、そいつちゃんと縛っておくのよ」

「悪いな、理子」

「オルメス！くそ、離せ!!」

武器も取り上げ、理子さんを縛り上げたオレ達は飛行機が無事に空港に着くまで待機することにした。……それにしてもさっきからアリアさんを『オルメス』って呼んでいるけどなんて意味だろう。何かオレにはわからない因縁があるようだ。そういえば逮捕するときもキンジが峯・理子・『リュパン4世』って呼んでたな。

……今更だがなんかよくわからない状況だ。どういうことか聞いてみようか。と、思ったところで、轟音とともに飛行機が立っていられないほど強く揺れた。

「な?!なんだ!何があつた!」

事態が呑み込めない。爆発物の類はなかつたはずだ。だがこれは……爆発か?

「理子!なんだこれは?爆弾は設置してないだろ?」

「し、知らない!これは本当に知らない!」

「じゃあ何なのよこれは?!どう考えても『イ・ウー』の仕業でしょ!」

理子さんじゃない、じゃあいったいなんだこれは?って言うかイ・ウーってなんだよ。わからないことだらけだ。事態をつかむために理子さんをキンジが担いで、みんなで操縦室に向かう。

「機長さん!何があつたんですか?!」

「き、君か!管制塔に連絡を入れて、近くの羽田空港に着陸の準備をしていたんだが、後

方からミサイルが！」

「ミサイル?! そ、それで被害は? 飛べるんですか?」

一体どういうことだ? ミサイルなんてどこの誰が! 外からのミサイル攻撃なんて防ぎようがないじゃないか。後ろで息を飲むキンジとアリアさん。理子さんもこの事態に信じられないような顔をしている。

「ああ、エンジン4基の内2基が破壊されたが飛行は問題ない。だが……燃料が漏れている。持って15分といったところだ」

「そ、そんな……」

最悪の事態だ。そしてそんな最悪の事態に追い打ちをかけるように無線が入る。

『ANA600便。こちらは防衛省、航空管理局だ。羽田空港の使用は許可しない。空港は現在、自衛隊により封鎖中だ』

防衛省? なんて着陸を許可しない? ……着陸に失敗すると思っているのか。何を言っているんだ、乗客の命がかかっているんだぞ。

怒りがこみ上げてくるが今、口を挟むと返って状況が悪化するかもしれない。ここは歴戦の風格を持つ機長さんに任せよう。

「……こちらはANA600便の機長だ。説明を求める。まさか、私が着陸に失敗するとも言ううのかね?」

怒気を込めた低い声で相手に確認する機長。この人優しそうだと思つてたけど迫力あるな。年は50代だろうか？貫禄がある。

『機長……？——あ、あなたは……！まさか伝説の?!ということとは副操縦士もいるんですね?!』

「伝説かどうかは知らないが、私は絶対に失敗しない。15年前も、10年前も……今日もな」

「すごい人なんですか機長さん。伝説つて？」

無線の相手の態度が急に変わる。声だけでわかるつて何者なんだよ？15年前と10年前に何があつたんだ。

『……あなたなら信頼できる。防衛大臣も納得するでしょう。封鎖を解除します……』
武運を』

「機長さんすげえ?!」

一度封鎖された空港があつさりと解除された。飛行機が着陸の準備に入る。

「本当に着陸できるのか?!」

「おいキンジ、伝説の機長に向かつてなんて言い草だ。何の伝説か知らんけど。……ここににいる誰よりも信頼できるだろ」

「……いや、実を言うと計器を読み上げる補佐が必要だ。いつもは副操縦士がやってく

れるんだが……」

「副操縦士は何やってるのよ？」

そういえば最初に操縦室に来た時から副操縦士さんいなかったな。でも個室もトイレも全部調べたけどそれっぽい人は誰もいなかったはず。

……そういえばおかしい。なんで機長さんは一人なんだ？そんなことあるわけがない。なぜその疑問に気づけなかった？

「お待たせしました。機長」

「うお?!」

「きやあ?!」

「おお、来たか。長いトイレだったな」

いつの間にかキンジとアリアさんの後ろにまだ若い、20代、30代あたりの副操縦士らしい人が立っていた。一体いつの間に……？馬鹿な！気配を感じなかった……だと?!

「……一体どこにいたんですか？副操縦士さんは？」

「君が最初に操縦室に来た時には機長と一緒にいたよ。気づかなかったかな？」

「なん……だと？」

なんて強キャラっぽいんだこの人。目の前にいるのに気配が感じられないってどう

いうことなんだよ。マジで何者なんだよこの人たち。守る必要なかったんじゃないか？

「しゃべっている暇はないぞ。早く席につけ。間もなく着陸態勢に入る」

「了解。間もなく着陸態勢に入ります。皆さんは安心して座席にお戻りください。……必ず無事に着陸しますから」

そう言つてこちらに笑いかける。なんて頼もしいんだ。

「……信じて、いいんですよね。機長さん」

最後の確認をする。答えはもうわかつている。

「ああ、もちろんだ。……君は言つてくれたね、私たちが必ず守つてくれると。今度は私の番だ。……必ず、皆さんをお守りします」

機長さんと固い握手を交わし、オレ達はアリアさんが予約していた個室に向かった。

しばらくして飛行機に振動があつたが思ったよりは少なかった。無事に着陸できたようだ。本当にすごいな、あの人たち。

こうしてハイジャック事件は解決した。理子さんは警察に連れていかれ、事情聴取を受けている。これで本当に武偵殺し事件は終結した。

——だがこの事件はこれから起こる『イ・ウー』との戦いの序曲に過ぎなかった。

7. 一段落とプロローグ

「ほんつとすいませんでした!!」

今、オレは病院でアリアさんに土下座している。病室に入つてのいきなりの行動に、アリアさんも一緒に見舞いに來たキンジも呆氣にとられている。でも、ケジメはつけなければならぬ。

「い、いきなりどうしたのよソウジ」

「オレが無能なせいでアリアさんにそんな傷を……! 護衛として同行したくせになんと言う体たらく! 死んでお詫びします!! もちろん報酬なんていりません!」

「バカ! 声大きいぞ。ここは病院だ」

そう、アリアさんは今回の件において依頼人なのだ。報酬をやるから護衛として来いという依頼を受けたくせに、依頼人に傷を負わせてしまったのだ。なんという無能。オレなんか死ねばいいんだ。

「あ、ああ、この傷ね。気にしなくていいわよ。というかソウジのせいじゃないわ」

「本人が気にするなって言ってるんだからいいだろ」

「……いや、そういうわけにはいかないんだよ。オレは事件に関わった以上誰にもケガ

をさせない、そういう武偵を目指してるんだ。……ここで自分の落ち度を認めないわけにはいかない」

今回の件はオレの目指す武偵像からかけ離れている。自分の油断で傷を負い、そのせいで犯人に逃走の機会を与え、その結果依頼人がケガをしたのだ。どう考えてもオレのせいです。オレなんか死ねばいいんだ。

アリアさんがため息をつきながらこつちを見る。

「……わかったわ。ソウジの目指す武偵になるために、それが必要だっていうなら、罰を与える」

「……どんな罰でも受けます」

「おい、アリア？」

いったい何を言われるんだろうか？ 本当に死ねって言われたらどうしよう。あ、この病室割と高い位置にあるし窓から飛んで受身取らなきゃ死ぬるかなあ。うまくできなかつたらすごい痛そうだよな。

そんなことを考えているオレの目を、アリアさんはその赤い目でまっすぐに見る。怖い。

——そして、オレに『罰』が与えられた。

「——ソウジ。あんた、あたしのドレイになりなさい」

「え？」

「これからはあたしと、あたしが命じた人を必ず護るの。どんな状況だろうと、あたしの命令は絶対よ……報酬は出すから」

そう言って、彼女は笑った。失敗した無能な亀に、自分を護れと、自分が命じた人間を護れと。

涙が溢れる。オレに……こんなオレにまだ護らせてくれるというのか！……これが女神！天使か?!なんと慈悲深い。……見つけたのかもしれない。オレが仕えるべき人を。そう言えばこのお方は高名な貴族様！そしてこの懐の深さ！完璧じゃないか。どこのお家の人かは知らんけど！

「……………承知……………いたしました……………アリア様!!」

生涯の主人を見つけたオレは感激に打ち震える。そうか、これがめぐりあわせか。ありがとう神様。あなたのおかげで就職できました。

「別に話し方とかは今までどおりで良いわよ」

「え？そう？じゃあ気分が変わることにするね。これからよろしく、アリアさん」

「お前本当に変わり身早いよな」

お許しをいただくことができたので、その後適当にしゃべって解散した。とりあえず一つ目の問題は解決して良かった。あとはあの時の機長さんと副操縦士さんにお礼を言いたいところなんだけど、あれから全然連絡が取れなくて困っている。とても忙しい人たちなようで直接会いに行くのも迷惑になるらしい。……いつか機会があればちゃんとお礼を言わないといけないな。

そして数日後、オレとキンジはアリアさんに連れられて新宿警察署に来ていた。ここにはアリアさんのお母さんがいる。武偵殺しを逮捕できたって事は冤罪が晴れたわけだ。

と、いうことは今日はもしかして感動の場面に立ち会うことになるのだろうか？少し

緊張してきたな。アリアお嬢様のお母様ということとはもちろんその方も警護対象だ、ちやんとしなければ。スーツ着てくればよかった。

しかし予想とは違い、署内で誘導されたのは留置人面会室だった。アクリルの板越しでしかも2人の管理官に見張られている。

まだ手続きが済んでいない？ それにしては物々しい雰囲気だ漂っている。どういふことなんだこれは。本物の武偵殺しは……捕まっただろ？

しばらくしてアクリル板の向こう側に若い女性が現れた。アリアさんによく似た人で、お姉さんと言われたら信じてしまいそうだ。この人が――

「まあ……アリア。後ろのお2人はお友達？ それともどちらかは彼氏さんかしら？」

「か、彼氏?! ち、ち違うわよママ!!」

アリアさんが顔を真っ赤にしてキンジをチラチラ見ている。わかりやす過ぎるんだが、もうそういう関係なんだろうか。いや、そう言えばハイジャックの時キスがどうか言っていたな。あの時そんな感じになったのかもしれない。

まあその辺りは今は良い、あいさつが先だろう。

「初めまして、私は黒野ソウジです。彼氏さんはこの目つきの悪い男、遠山キンジです。私はアリア様の忠実な奴隷に過ぎません」

「まあ……やっぱり彼氏……ど、奴隷?! アリア様?! アリア一体どういふことなの? お友達

を作るのでさえ下手だったアリアが……いえ、作るのが下手だったからこそ?!

「ち、違うのママ! そういうのじゃないの! ソウジ!! ややこしい説明しないでよ!!」

「俺も彼氏じゃない! 早く訂正しろ!」

一番最初にキンジを奴隷にするなどと言ってこちらを勘違いさせたお方は誰だっただろうか? 言葉というものは時として混乱を招くものだ。今後の教訓にしていただけとありがたい。

顔を真っ赤にして怒り狂うアリアさんと、勘弁してくれとでも言いたげなキンジ。こっちは気を利かせたつもりだったんだが、まだそういう関係じゃなかったらしい。いまいち2人がどういふ距離感かわからないな。

少し場が混乱したが、とりあえず友達だということに納得してもらい、話を進める。

「……キンジさん、ソウジさん、初めまして。わたし、アリアの母で、神崎かなえと申します。娘がお世話になってるみたいですね」

「あ、いえ……」

「……」

キンジが柄にもなくどきまぎして答える。こういうタイプに弱いのかもかもしれない。本当にアリアさんと付き合うことにでもなったら、かなえさんも交えて修羅場に発展しそうである。

オレは「しばらく黙ってろ」、とご主人様に怒られてしまったのでお辞儀だけしておく。まあこれ以上親子の会話を邪魔するつもりも無かったのでそれは構わない。

問題は——何故こんな状態でかなえさんと面会しなければならぬかだ。冤罪は晴れた、そのはずだったのに。そして、その疑問の答えは……アリアさんから信じられない真実とともに伝えられた。

「ママ、武偵殺しが捕まって、ママの懲役864年が一気に742年まで減刑されるわ。公判だつて年単位で引き延ばせる。最高裁までの間に、他も絶対、全部何とかするから。そしてイ・ウーの連中を全員ここにぶち込んでやるわ」

自分の耳が腐ったのかと思つた。……864年？742年？何だその刑期は。まさか、かけられている容疑は……冤罪は『武偵殺し』だけじゃない？

……『イ・ウー』。そうだ、アリアさんは理子さんに向かって、ミサイルは『イ・ウー』の仕業だと言つていた。武偵殺しの仲間……組織名か？

「アリア。気持ちはうれしいけど、イ・ウーに挑むのはまだ早いわ。パートナーは見つかったの？」

「それは……」

そうしてまたキンジをちらつと見る。『パートナー』、パーティーのメンバーでは無く、この場合は相棒という意味だろう。アリアさんはずつと探していたんだ、一緒に戦

えるパートナーを。

だがキンジは、アリアさんから目線をそらす。やっぱり、武偵をやめるつもりなのだろうか。それとも迷っているのか。

「……候補はいるのね。アリア、あなたには、あなたを理解してくれるパートナーが必要なの。適切なパートナーはあなたの能力を何倍にも引き延ばしてくれる。焦ってはダメ、まずはパートナーが先よ。一人で先走ってはいけない」

「……それは、ロンドンで何度も聞かされたわよ。いつまでもパートナーを作れないから欠陥品とまで言われて……」

「人生は、ゆつくりと歩みなさい。早く走る子は、転ぶものよ」

「ママ……うん、わかってる。バスジャックの時だって、ハイジャックの時だって……きつと一人じゃ解決できなかつた。キンジも、ソウジもいたから武偵殺しを捕まえられたの。だから、あたしはもう大丈夫、『独奏曲』じゃない。パートナーの大切さ、ちゃんとわかつたわ」

「アリア……!」

アクリル板がなければ2人が抱き合ってるシーンだ。オレがぶつ壊してやろうかこの無粋な壁。

お互いに涙を浮かべ、笑いあっている親子。オレもちよつと前から泣いている。

——そして、親子の時間は終わりを告げる。

「神崎。時間だ」

「……じゃあね、アリア」

「うん、また来るね……ママ」

面会は終わり、かなえさんは部屋を出て行った。誰もいないアクリルの向こうを見つめながら……アリアさんはしばらく泣いていた。

アリアさんは先に帰らせ、オレはまだ面会室にいる。今のアリアさんと彼女を合わせるわけにはいかないだろうと、1人で面会することを決めたのだ。

キンジも金一さんのことについて聞きに来るのかと思つたが、どうやら面会が可能になつた日にすぐにここに来ていたらしい。どんな会話をしたのか気になるところだが、後で言う、とはぐらかされてしまった。怖い顔をしていたが何かあつたのだろうか。

この面会にはオレも覚悟がある。……当然だな、自分たちが捕まえた人に会おうと言うんだ、無神経だと責められても仕方ない。だが……話しておきたいと思つたんだ。

そして目の前にいる彼女——峰理子に話しかけ……ようとしたところで逆に話しかけられた。

「よーっす！ソウくん!!なんか久しぶりな感じだねー」

座っていた椅子からズルつと崩れる。なんでそんなテンションなんだよ。

「……どんな罵倒が飛んでくるかと身構えてたのに。思ったより元気そうだね、理子さん」

いつもの調子で来られてしまうと……すごいやりにくいな。もう少し険悪なムードになると思ってたのに。

「ん？なーに、怒られたかったの？そういう趣味なんだ？」

「いやいや、そういう趣味じゃないし。なんだよもう、すごい覚悟して来て損したよ」

「くふふつ。そんなに慌てる逆に怪しいよ？」

本当に調子が狂う。思わずこちらもいつもの調子で返してしまった。オレにそんな趣味があるわけじゃないじゃないかまったく。確かに相手の攻撃を受けるばかりでこちらから攻めないし、最近アリアさんの奴隷になったけどそんなわけ……

「……オレってMなの？」

「いや、あたしに聞かれても」

なんとということだ、こんなところで自分の性癖と向き合うなんて。そうだったのか……オレは心のどこかで罵倒されることを期待していた……？

「い、いや、今日は真面目な話をしに来たんだ。理子さんについてなんだけど」
「あたし？何の話？」

「……ここからすぐ出るんだろ？」

「……ああ、その話か」

彼女がいつもの調子なのは、極端に言えばいつでも出ることができからだろう。

——『司法取引』。合法化されているこの方法を使えば、条件付きで解放されるはずだ。個人的な感情としてはあまり認めたくはないが、彼女は望めば早い内に出られるだろう。

そう思って聞いてみたのだが、どうもそういうわけでは無いようだ。

「まだ出ない。……の方が今のところ安全だ」

「……安全？」

急に口調が変わるのに未だなれないが、男っぽいしやべり方に変わった彼女が不思議なことを言った。安全……？何かに襲われる危険があるってことか？

考えられることといえは……

「……イ・ウーによる制裁か？」

「その辺りは言えない。取引材料になりそうなことを今言うわけにはいかないからな」
まあそりやそうさ。情報があればあるほど司法取引は有利になるだろう。組織につ

いては聞けないか。そうなるとう今はもう話すことがなくなってしまうたな、どうしよう。

話題に悩んでいると、あきれたような目で、少し怒っている感じで理子さんが見てきた。

「まさかそれだけ聞きに来たのか？ソウジ」

「え？うん」

確かにもつといろいろ聞いておいたほうが良いかもしれないけど、聞きたかったことは、イ・ウーについてだしな。いつ頃出てくるかとか、そのあたりから話を始めれば何か話してくれるかとも思ったが、そんな甘い相手じゃなかったし。

「……なんのつもり？あたしが出てから何をさせるつもりだ？」

「いや、別に何もないけど。釈放されればまた友達になれるかな、って思ってた聞いただけだよ」

理子さんが、何言ってるんだこいつみたいで見てくる。うん、何言ってるんだろうな、オレ。こんなこと言うつもりはなかったのに。いつもの調子の彼女を見ていたら、思わずそんなことを言っていた。

理子さんはしばらくしてまたあきれたようで、今度は少し笑って言った。

「……ほんと、甘いね。あたしのこと糞犯罪者とか言ってたのに」

「……また、なんかやったら捕まえるけどね。今度は絶対殴るからな」
「くふふつ。できもしないクセに」

いつの間にか面会の時間は過ぎて、理子さんは部屋を出て行った。無人になった面会室を後にして、オレも帰ることにする。

調べによれば理子さんは『武偵殺し』とは言われているが、誰も殺してはいない。だがそれは結果論だ。バスジャックの時も、ハイジャックの時もこちらが下手を打てば死人が出ていたはずだ。かなえさんだって武偵殺しの容疑をかけられ追い詰められていた。だから彼女には厳しく接しなければならなかったのに……何も考えずに、不意にそんな甘い言葉が出てしまっていた。

その日の夜、キンジの部屋にキンジとアリアさんとオレで集まっていた。かなえさんの公判が延びたことのお祝いと、事件解決のお疲れと——お別れ会、と言ったところだ。コンビニで買った飲み物とか『もまん』とか言うよくわからない食べ物テーブルに

並んでいる。

しばらく飲み食いしながら談笑した後、アリアさんが本題を切り出した。

「キンジ。今日はね、お別れを言いに来たの。」

「…………お別れ？」

「やつぱり、パートナーを探しにいくわ。ホントは…………あんだだつたら良かったんだけど。でも、一回だけ、つて約束だから」

「あ、ああ」

そう、キンジは武偵を辞めるつもりだから…………強襲科に戻って一回だけ事件を解決するという約束だった。

「武偵憲章2条。依頼人との契約は絶対守れ。だから、もう追わない。…………キンジ、あなたは立派な武偵よ。だからもう…………ドレイなんて呼ばない。でも、もし気が変わったら…………もう一度会いに来て。その時は今度こそ——あたしのパートナーに…………」

「……………」

照れもあるようだが、それでも一生懸命に想いを伝えるアリアさん。それに対してキンジは、まだ悩んでいるのか、答えを先送りにする。少し前まで辞める一択だったキンジの心に、アリアさんの想いか、それとも金一さんの影か…………強い影響を与えたようだが時間が待ってくれない。そろそろ移動する時間だ。ロンドン武偵局の人たちに

送ってもらう手はずになっっているんだ。

「……キンジ。答えを出すのは難しいかもしれない。けど、オレもいつの日か、お前が会いに来てくれることを待っている。覚えていてくれ。……いつかまた、ロンドンで」

「ソウジ………ん？ソウジ？」

キンジがマヌケな顔でオレの名前を呼ぶ。どうしたんだ？

「……お前も行くのか？」

「え？当たり前だろ、何言っただ？オレはアリアさんの奴隷だぞ。オレに意思なんか無い。ただ付き従うのみ」

「いや、お前学校はどうするんだ？というか本当に行くのか?！」

一体何がおかしいというのか、当然の流れだろう。アリアさんの行く道こそオレの道。迷いなんか無い。

「あたしも一緒に来るって言われた時は驚いたわ。でもドレイになれって言ったのはあたしだし。ソウジは使えるヤツだし」

「ありがたき幸せでございます。アリア様」

「待て！早まるなソウジ、正気に戻るんだ。もつとよく考えろ！」

さつきから何なんだキンジは。まるでオレがおかしくなったみたいないない扱いをしやがって。さてはオレの忠誠心をなめてるな？一度決めたら主人を変えることなんて無

いからな。

そんなオレの固い意志をようやくわかってくれたのか、キンジもどこかあきらめたように口を開いた。

「……ああ、わかったよ。俺はアリアのパートナーになる。いつかと言わずに今すぐにな。……悩んでたのがバカらしくなってきた」

「……！キンジ！いいの？」

「本当は迷っていたんだ。武偵を辞めて全てを忘れるか……兄さんを追うか」

「金一さんを追う？」

金一さんは武偵殺しの起こしたシリーズジャック事件で死んだはず……。いや違う、そうだ、武偵殺しは……調べによれば、誰も殺していない。まさか——

「——兄さんは、『イ・ウー』にいるらしい。……詳しくは聞けなかったが、理子からそれだけ聞き出すことができた」

「キンジのお兄さんが?!」

「……マジかよ」

『イ・ウー』。その名前を中心に、キンジとアリアさんの運命が交差する。母に何百年もの冤罪をかけられたアリアさん。そして失ってしまったはずの、憧れの兄を追いかけるキンジ。

「兄さんが何のつもりでそんな組織にいるのかはわからない。だが、本当に生きているなら……イ・ウーと決着が着くまでは、パートナーでいてやる」

「……ソウジ、ロンドン行きはキャンセルよ。パートナー、見つかったから。ママの裁判が終わるまで日本に残るわ」

「承知しました。先方に連絡と謝罪を入れておきます」

「キンジ、本当にいいのね？」

「ああ、俺じゃ頼りないかも知れないが……『独奏曲』のBGMぐらいにはなつてやるさ」

「頼りないというか……そうね、キンジにはちよつとムラがある気がするわ。すごい時とダメな時の差が激しいって言うか……」

「っ?!」

キンジが慌てている。そう言えば女性関連でトラウマがあつて『ヒステリアモード』を隠してるとか聞いたことあるな、詳細は知らないが。……バレかけてるぞ、これは。

「そうだ！それはこれから調教していけばいいのよ、いつでも最高の力が出せるように！」

「ちよ……！、それは物理的には……可能だが！倫理的にダメだ！」

ヒステリアモードは性的興奮をトリガーに発動してるから、確かに『調教』は効果あ

るかもしれないな。ふむ、しかもキンジ的にそれはアリの方向らしい……なるほど。そうか、お前もそうなんだな、キンジ。

「ダメよ！あなたにはちゃんとしたパートナーになってもわかないと！そしてあたしは立派な『H』になるの!!」

「何なんだよその『H』つてのは……ソウジ！お前も何か言ってくれ、いつもこのタイミングで殴ろうとするだろ？」

「殴りたいのか。……やっぱりキンジも『M』なんだな？」

「お前は何の話をしてるんだ」

思わぬ同士の出現に喜ぶ。良かった、オレだけじゃないんだな。キンジ、お前は最高の友達だよ。で、『H』ってなんだ？アリアさんのミドルネームだよね？

「ああもう！あなたで決定したんだから教えてあげるわよ！あたしの名前は——神崎・ホームズ・アリア！」

「ホー、ムズ……?!」

キンジと同時に驚く。何てことだホームズって言えば誰でも知っているような名探偵じゃないか。ということは理子さんの『リュパン4世』つてのはホームズのライバル、アルセーヌ・リュパンか。そういう因縁だったのか？

「そう、あたしはシャーロック・ホームズ4世よ！で、キンジはワトソンに決定したの！」

……もう逃がさないからね。逃げようとしたら——」

「——風穴あけるわよ!!」

久々の風穴宣言を聞いた後、キンジとコンビニに、追加のももまんと飲み物を買いに来ている。お別れ会改めパートナー結成祝いだな。

「まさかアリアさんがホームズの子孫とはな。驚きだな」

「驚きというか信じられん。あんなホームズありえんだろ……」

棚に並ぶ商品を適当に取りながら、先ほどの信じられないようなことの話をしていく。その流れでハツ、と思いついたことを言ってみる。

「キンジ、どうでもいいことなんだけど、いいか?」

「なんだよ?」

「……遠山・ワトソン・キンジってなんか語呂悪くない?」

「……本当にどうでもいいな」

「オレ的には日本人の名前過ぎる『キンジ』の部分が邪魔なんだ。遠山ワトソンに改名しないか?」

「芸名みたいだな」

そんなどうでも言いことを話しながら、久しぶりに帰ってきたような日常で、つかの間の平和をかみ締めていた。

魔劍

8. 星伽白雪とエンカウト

シャーロックホームズ——100年ほど前に活躍した、イギリスの名探偵で拳銃も格闘術も達人。そして、そんな初代シャーロック・ホームズと、初代怪盗リユパンはフランスで戦い引き分けている。ホームズはフランスでは『オルメス』と発音するらしい。

そしてアリアさんと理子さんはその子孫というわけだ。

そういうことだったのか、と1人で納得していた。それと同時に釈然としない思いもある。祖先同士の因縁……それだけで相手を殺そうとするだろうか。いや、オレにはわからないそういう世界があるのかもしれないが、祖先は祖先、子孫は子孫だろう。そこまでこだわる理由にはどうしても感じられなかった。

「……で、アリアさんはまだ帰らないの？もう夜だけど、送っていいんか？」

すっかり日も落ち、外は暗くなっているのだが、まだオレ達はキンジの部屋にいる。いくらアリアさんが強いといっても夜道を1人で帰すのは気が引ける。一応ドレイとして提案してみたのだが、返ってきた言葉は意外、ではなくやっぱりかという答えだった。

「ここに泊まってくからいいわ」

「……左様でございますか」

「何を言ってるんだアリア?! 帰れ! 泊まる理由なんか無いだろ!」

そうだよな、泊まる理由はもうないはずなんだよ。元々キンジを強襲科に戻すための強硬策として泊まったんだ。晴れてパートナーになった以上もうそんな必要は無いはずだ。

「あんたを調教するって言ったでしょ! まずほ、キンジが全力の力を出すにはどうすればいいの、監視するのよ」

「だ、だから調教はダメだ!」

『調教』の上に『監視』か。いよいよ危ない言葉が並び始めたな。しかしこれしきのことで驚くことはもうない。こんなのは日常茶飯事として処理しなければ体がもたないと悟ったのだ。

今の状況は、キンジ本人は嫌がっているのに、恋人でもない美少女が同居すると言つて譲らない、という感じだ。……うん、きつとオレの感覚がおかしいんだよ。世の中にはそういうこともあるんだよ。オレのところだけにだけそんなフラグが全く来ないだけなんだよ。もうあきらめよう。もう突つ込むのは止めよう、心が持たない。

「というわけでオレは帰る。たっぷり調教してもらえよ」

「おい、帰るのか？ちよつと待て、助けろ」

「もうお前はオレの手に負えないんだ。後ろから女に刺されて死んでくれ」

そう言つて先に帰るとする。後ろから薄情者とか何とか聞こえる気がするが知つたことではない。……何かもういろいろあつて疲れたよ。すぐに寝付けそうだな。眠い……今夜はよく眠れそうだな。

『天誅——つ!!』

「!?」

どれくらい眠れただろう。そんなに眠れていない気がするのだが、下の階から聞こえてきた大声に飛び起きてしまった。まるで耳元で叫ばれたような大声だった。眠つていたはずなのに感覚が鋭くなつていたのか？

しかも聞き間違いでなければ、今のはキンジの幼馴染みである星伽白雪さんの声に聞こえた。あんなに大声を張り上げているのは聞いたことがないが、たぶんそうだろう。

一緒に銃声とか聞こえる気がするのだが、何が起こつているのだろうか。……なんかもう関わらない方がいい気がしてきたな、寝よう。無視して寝るんだ、オレは何も聞いていない。耳栓しとこ。

翌日の朝、学校に来たオレは白雪さんに会いに温室に来ていた。朝に『昨日の件で話がある』と呼び出されたのだ。声からして来ていることはわかっていたが、その時に何かあったらしい。温室を覗いてみるとすでに白雪さんはベンチで待っていて、入っていったオレにすぐ気付いてくれた。

「あ、黒野くん、おはよう。ごめんね、こんな早くに呼び出して」

「おはよう、白雪さん。気にしなくていいよ」

律儀にベンチから立って挨拶してくれるあたりは、さすが大和撫子といったところか。でも……元気が無いようだ。

「昨日の件だけ何かあったの？すごい声とか音とか聞こえた気がするけど」

「あ……うるさかったかな。その、キンちゃんのアリアと同居してるって聞いて、気が動転しちゃって」

気が動転すると銃声が聞こえるような事態になるのだろうか。……深く突っ込むのは止めておこうか。しかしあの2人が同居していることをどこから聞いたのか。アリアファンクラブかな？

「それで話って言うのは？」

「……キンちゃんとアリアってどこまで進んでるのか聞きたくて……」

「どこまで?……ああ」

そういう話か。確かに同居するなんてただならぬ関係な気がするよな。

「二応、本人たちは武偵活動をする上でのパートナーって言ってるよ。付き合っているとかそういう関係じゃなくて、仕事のために同居してるって感じじゃないかな」

「そう、なの?でも……」

こちらの見解を好意的に伝えてみたが、釈然としない様子の白雪さん。何か気がかりがあるのか、しばらく考え込むようにしてから、泣きそうな顔で言った。

「アリアが……昨日、子供はできて無かったって……だから大丈夫だって……キンちゃんに言ってる……」

「……………え?」

白雪さんが泣き出してしまった。オレも泣きたい。どういう……ことだ?いや、確かに可能性はある。過去にも同居していたし、2人でデートして、おそろいのストラップをつけていたこともあったし。そういうえば強襲科に一度戻ってきた日の前日に『何でもするからパートナーになって!』イベントが発生したとキンジの口から聞いたな。それにハイジャックの時は舞台裏で何かやっていたようだし。まさか――

「2人はオレが思っていたより進展しているのか……?付き合っていないって言ったの

に

「……黒野くんも、知らなかったんだね」

裏切られた気分だ。そんな、付き合っていることを隠されるなんて。……男同士の友情なんて男女の恋愛の前には無に等しいんだな。ちゃんと喋ってくれば文句は多少言うかも知れないが、祝福してやったのに。

白雪さんにだってそうだ。彼女は周りからみればキンジが好きだって言うのが丸わかりなのに、そんな彼女にきちんと伝えることもせず、彼女の想いを宙ぶらりにさせている。

「白雪さん、その、こんな時になんて言ったらいいか」

「ううん、いいの。早く気付けてよかった。今から排除……今ならまだ、間に合うかもしれないから」

なんて健気で一途な子なんだろう。それでもまだ、キンジが好きなんだな。途中で物騒な言葉が聞こえた気がするが気のせいだろう。オレも気が動転しているんだ。聞き間違いくらいあるさ。

「……実を言うとき、ちょっとキンジとアリアさんの仲を応援していたところもあったんだ。でも、それはやめるよ。フェアじゃないもん。……頑張って、白雪さん」

「ありがとう、黒野くん」

いいさ、と言葉に出さずに笑いかける。ようやく泣き止んで、白雪さんも笑ってくれた。……これが青春ってやつか。いいんじゃないかな、そういう経験も。そんなことを思いながら——キンジはあとで全力で殴っておこうと心に決めたのだった。

白雪さんと別れ、そろそろ教室に戻ろうか、というところで……とても、とても不思議なことが起こった。

……目の前から『白雪さん』が歩いてくるのだ。

——え?……うん、おかしいな、ありえない。先ほど白雪さんと別れ、彼女はもう少しここにいて、花占いを始めていた。相当傷心の様子だったんだ。そして、オレの進行方向からも今、『白雪さん』が来ている。

位置的にありえない。先回りするルートがないとも言えないが、わざわざそんなことをする必要が無い。誰だあいつ。白雪さんに電話してみよ。

「もしもし白雪さん? 変なこと聞くけど今どこ?」

「え? さっきの温室だけど……」

「だよね、そりゃそうだよね。はっはっは」
『?』

……だよな。じゃあ誰だよあいつ。なんで堂々と廊下歩いてんだよ。

……まずい気がする。とても嫌な予感だ。ハイジャックの時、CAと対峙した時の嫌な感覚と、にじみ出る雰囲気。あの時と同じ印象だ。

違うのは……あの時は『知ってる気配の知らない顔』だったのが、今は『知らない気配の知ってる顔』だということだ。すごい、気持ちが悪いんだ、この感覚は。

『白雪さん』が近づいてる。近づいても、どう見ても白雪さんの顔だった。

「……おはよう、『白雪さん』」

「あ、おはよう、黒野くん」

距離が近くなる。そして——すれ違う。声も、彼女のものだった。……でも違う。こいつは一体——

「……『白雪さん』」

「なに？」

振り返らず、後ろの彼女に聞く。トンファーを握り締める。

「目的は……なんだ？」

「……何の話？」

武器を握り締めた手のひらに汗がにじむ。

「伝わらなかったか？……お前、『誰』だ？」

振り返り、相手を正面に見据える。

そして……『白雪さん』は答えた。

「……ほう、私に気付いていたのか」

その声は……聞いたことの無い声だった。

9. 侵入者と護衛任務

「ほう、私に気付いていたのか」

場の空気が変わる。気のせいか、気温が下がったような気がする。目の前の『敵』が声を発した瞬間に、だ。まどつている空気、足運び、そして本性を現す前に、腕前を察せなかったことからわかる。……強い。もしかすると『イ・ウー』の人間かもしれない。まだ『イ・ウー』という組織がどんなものかも掴めていないが、理子さんを見るに強敵揃いと判断したほうがいいはずだ。

……どうするべきだ？この場で確保できるのか？いや、少なくともオレー人では勝てない。

だが、目の前のこいつを放っておくことはできなかった。何故なら『白雪さん』だからだ。放っておけば白雪さんか、その周りの人間に危害が及ぶかもしれない。これほど完璧な変装なら、事前に本物に会っていなければ気付けないだろう。だから、声をかけた——今この場で見過ごすのは絶対にダメなんだ。

「よくわかったな。私が偽者だと」

「……？ああ、さつき本物と会ったからな、電話でも確認したし」

「……………」

「……………」

「……想定内だな」

「そ、そうか」

今少し間があつたのはなんだろうか、なんでちよつと目をそらしたんだ。いや、目の前にいるのは強敵だ。余計なことを考えている暇は無い。相手を『イ・ウー』と想定するのなら、最低でも交戦経験のある理子さんと同等か、それ以上の相手とみなすべき。侮るわけにはいかない。

理子さんは超能力によつて髪を自在に操り、ナイフ2本と銃2丁を同時に扱つていた。手数が多く、複数人を同時に相手していたような戦いだった。それと同等、もしくはそれ以上か。どう考えても強敵だ、超能力は持つているものという前提で動くべきか。

……足が震える、目の前にいる『白雪さん』と目が合ったときから。寒いわけではないのに氷の中にいるような感覚。オレは、怯えているのか。

しつかりするんだ！たとえ相手が強敵だろうとオレのやることは変わらない。いつだって、どんなときだってそうだ。細心の注意を払え、よく考えて動くんだ。……仲間を護るために。

「黒野ソウジ。『撃てない武偵』、か。知っているぞ」

「っ?!」

調べられている。やはり白雪さんの周りを探っているのか? こちらは相手のことを何も知らない。相手にアドバンテージを握られている。……! そうだ、こいつはいつから『白雪さん』だったんだ。オレの知らないところで、既にキンジと接触している可能性もあるじゃないか。オレが思っているより、こちらの情報を握られているかもしれない。

「……別名、『負けない武偵』。回避、防御に関しては右に出るものは無いらしいな」

「……?」

それ知らないな、誰から聞いたんだそんなこと。どこ情報だよそれ。いや、確かに防御は得意だし、勝てない相手にも負けないように努力するけども。なんだよ『負けない武偵』って。無敵かよ。

「ふっ、どんなものかと思えばただの臆病者か。まるで縮こまった亀だな」

「……よく言われるよ」

こちらの怯えを察知されたのか、嘲るように笑う。今更そんなことを言われた程度でどうってこと無いが。

「……お前ごときに知られたからと言ってどうなるものでもない。わかっているんだらう？お前では私に勝てない」

「……っ！」

わかっている……さつきから嫌というほどわかっているぞ。

「私に気付いたことは褒めてやる。……だがそこまでだ、そこで大人しくしているがいい。それとも——」

「——ここで、死ぬか？」

空気がさらに冷たくなる。圧倒的だ、目の前のプレッシャー。……勝てない。最初からわかっていたんだ。

オレは声をかけるべきじゃなかったのか？あそこで気付かないフリをしていればよかったのか？

自分を護るために、自分が傷つかないように……仲間を迫る危機を見過ごせば良かった？

——違う！そんなわけがない!! そんなことできるわけがないだろ!!

1人では勝てない？だから何だっけ言うんだ。知っているやつが……仲間が、友達が！今危険にさらされようとしているときに、そんなもの言い訳になるかよ!!

『武偵憲章第一条 仲間を信じ仲間を助けよ』

オレは仲間を、友達を助ける。……そして……仲間を信じよう。

だからオレは——叫んだ。

「侵入者発見!!強敵だ、援護を求めろ!!」

「なに?!」

そうだ!ここは犯罪者を捕まえる人間を育成する東京武偵高校の廊下!当然他の正義感溢れる武偵校生の仲間だっているんだ、オレは一人じゃない!

「侵入者だつて?!」「どこのどいつだそんな身の程知らずは!!」「ここをどこだと思つていやがる!」「いいだろう……相手になつてやる!」

一時限目が始まる前、廊下にはまだ結構な数の生徒がいる。なんて頼もしいやつらなんだ、すぐに武器を構えて大勢で駆け寄つてきてくれた。思つたよりいっぱい来たな?!ありがとうみんな!ありがとう仲間!!

『武偵憲章第四条 武偵は自立せよ。要請なき手出しは無用のこと』。でも要請すれば来てくれるんだ!

「オレの目の前にいるヤツは『星伽白雪』という女生徒に化けている侵入者だ!!確保に協力してくれ!!」

「確証はあるのか?黒野!」

「別のところでさつき本物と会っている!!」

「なんだつて?!本物と同じ時間に学校にいるなんて、なんて大胆なヤツなんだ!なめや

がって!!」

話しかけて来たのは同じ強襲科のAランク武偵、後藤だ。よく一緒に演習したりする気の良い奴さ!

「相手の底が知れない、みんなは一定の距離を保って援護してくれ! オレが盾になる!! 誰か! 対超能力者用の手錠をオレに貸してくれ!」

「了解だ黒野!!」 「一石君も来てくれたんだね!」 「手錠だ、受け取りな!」 「囲め! 囲め!!」

みんな手際がいい、さすがプロの武偵を目指しているだけはある。『武偵憲章第五条 行動に疾くあれ。先手必勝を旨とするべし』だ!

敵が超能力を使うのは前提だ。手錠も用意してもらった。『武偵憲章第七条 悲観論で備え、楽観論で行動せよ』だ!!

目の前の侵入者に向かってトンファーを構える。もう大丈夫、オレは1人じゃない。もう何も怖くない。

「……………くつ、ただの武偵の分際で…………お前たちごときが、いくら集まった所で!!」

ごとき、だと？オレの仲間になんて言い草だこの糞侵入者が！

「……なめるなよ。ここに居るのは、みんなそれぞれ熱い思いを胸に秘めた武偵だ。——お前ごときが！オレ達に勝てると思うなよ!!」

侵入者に向かって走り出す。ヤツがどこからか取り出した大剣を振るう。それを剣の腹を打ち、いなす。その隙に各方面から一斉に銃弾を撃つみんな。オレにも当たりそうになるが大丈夫だ、全部弾いといたから。

「ぐっ!!」

ヤツに雨のように銃弾が飛ぶ。でもみんな急所は外しているから大丈夫だ！

「確保！」

手錠をかけて侵入者を捕まえた、みんなの勝利だ。手ごわい奴だった、一体何者だったんだろう。やっぱリイ・ウーの人だったのかな。

「どうやら銃撃で受けた傷は大したことが無さそうな辺りはさすが強敵と言ったところか。」

侵入者は警察に引き渡しておいた。

翌日の朝、綴先生に呼び出され、教務科に白雪さんと来ていた。綴先生は尋問のスペシャリストで、その技術は日本でも五指に入るらしい。

「ねえー、単刀直入に聞くけどさあ星伽——アイツにコンタクトされた？」

「『魔剣』、ですか」

魔剣——聞き覚えがある。超能力を操る武偵『超偵』ばかりを狙う誘拐魔だ。星伽さんもこの武偵校の超能力捜査研究科に所属する超偵である。コンタクトされる可能性もあるわけだ。

だが、魔剣はその実在自体がデマだと言われている。都市伝説のようなものになってしまっている。

「それはありません。と言いますか……もし仮に魔剣が実在したとしても大物の超偵を狙うでしょうし」

「もつと自分に自信持ちなよお。あんたはうちの秘蔵っ子なんだぞー?」

「そ、そんな」

「……というわけで黒野お。星伽のボディガードナー?」

それが用件と言うことか。

「要は魔剣とやらから白雪さんを護れつてことですか……もつと適任がいると思いますけど。というか女性の警護なら同性の護衛がいた方が良いでしょう」

もし魔剣が実在するのなら、今まで尻尾をつかませずに誘拐を完遂させているということだ。それも都市伝説と言われるほどに証拠も目撃者もないんだろう。相当な相手のはずだ。

「んーそうだなあ。他にも声かけてみるかあ」

「そ、そこまでやらなくても。それに……私は、幼馴染の子の、身の回りの世話をしたくて……誰かがいつもそばにいと、その……」

……そうだよ。キンジの身の回りの世話がしたくてどうしようも無いんだね。オレは邪魔だね、うん。

「……白雪さんがそう言うならキンジに護衛を頼むのが手っ取り早いですね。アリアさんも協力してくれるかもしれませんし。キンジに24時間体制で護らせましょう、そうしましょう」

「キ、キンちゃんど……24時間?!」

もういいや、キンジに任せよう。そうしよう。アリアさんと白雪さんに挟まれて死ぬばいいんだあんな奴。

「……ふうーん……そおかあーそういう関係かあー。で?どーすんのさ星伽は?」

「キ、キンちゃんと……ど、同棲?そ、そんな……」

「……しばらく戻って来ないので無視しましょう。オレもできる限りのことはやりますから」

「……そうかあ。じゃあそれでいいかー」

こうして対魔剣のボディガードは決まった。

護衛任務……責任重大だ。だが任務を受けた以上、誰にもケガさせたりはしない。絶対に白雪さんを護ってみせる。来るなら来い——『魔剣』

10. 作戦会議と三角関係

事後承諾になってしまったが、白雪さんの護衛任務についてアリアさんに連絡したところ、意外にも快く受けてくれた。

『魔剣』に狙われる可能性のある白雪さんを護るため、キンジ、アリアさん、オレの3人でキンジの部屋に集まり作戦会議を行うことになった。部屋の中がなんかすごいことになっているが、それはいったん置いておこう。

「悪いな、まずは護衛任務を引き受けてくれてありがとう」

『魔剣』はあたしも追っているの。ヤツはママに冤罪を着せている敵の1人なのよ。迎撃できればママの刑が残り635年まで減らせるし、うまくすれば高裁への差戻審も勝ち取れるかもしれない」

「ああ、『イ・ウー』の人間らしい。俺も兄さんを追うために情報が欲しいし、そいつに白雪が狙われていると聞けばな」

協力的だとは思ったが、2人にもメリットがあるらしい。超偵ばかりを狙う誘拐魔『魔剣』。都市伝説と言われるほどに正体がつかめない恐ろしい敵だ。イ・ウーと言われると説得力がある。

「そうか、魔剣はイ・ウーの人間なのか。だったらオレの仮説もあながち間違っていないかもしれないな」

「仮説？魔剣について何か掴めているのか？」

「ああ、もしかするとヤツの尻尾をな」

「本当なの？ソウジ」

「そう、仮説だ。白雪さんを狙う魔剣と昨日の事件。証拠は無いが繋がっている気がする。」

「……昨日の朝、学校に白雪さんに化けた侵入者が現れた。かなりの強敵だったが、周りにいた奴らと一緒に捕まえて事なきを得たんだ」

「周知メールが来ていた。本物の白雪が校内の温室にいる時に同時間に現れたらしいな」

「ああそうだ。何故か見つかるリスクを負って廊下を堂々と歩いていて。何か理由があったのかと思って考えていたんだ」

「本物がある時に、わざと見つかるようなマネをする意味があるって言うの？」

あの時あいつが『白雪さん』だった理由。今回の『魔剣』の件と合わせれば一つの作戦が見えてくる。

「逆に考えてみたんだ。大勢の人間に見られる必要があった、ってな」

「見られる必要があつた？」

「アリバイ工作だよ……白雪さんを誘拐するための」

「なんだつて?!」

「……そういうことね。『白雪』が大勢の人間に見られている時に、本物の白雪を誘拐するのよ」

「……！ そうなれば目撃証言もあやふやになる。白雪が同時刻に現れることで『いつ』『どこで』白雪と会つたのかという情報が交錯するのか」

「ああ、それこそが『魔剣』の手法。『魔剣』は2人組み、もしくはもつと複数人のチームじゃないか、つて言うのがオレの仮説なんだ」

これは仮説に過ぎない。だがこう考えれば『魔剣』が都市伝説だと言われる理由にもなるかもしれない。かく乱要員や目撃者を排除する役割を持った人間が組んだ誘拐チームならば、証拠を残さず迅速に誘拐できるだろう。目撃証言も不確かになり、捜査が困難になる。

「でも待つて、ソウジ。だったら何も学校内じゃなくて、女子寮とかもつと離れたところに『白雪』を配置すれば良いんじゃないの？」

「そうだな。それに本物の白雪の方に『魔剣』が現れたわけじゃないんだろ？」

「だから仮説なんだよ。ヤツには他にも目的があつたかもしれないし、見当違いかもし

れない。昨日捕まえた侵入者も口が堅いヤツでなかなか吐かないらしい。でも無関係とも思えない」

このタイミングで白雪さんに化けた侵入者が現れたことには『魔剣』と何かしらの接点がある気がしてならない。アリアさんも何か引つかかるのか、考え込むように俯いている。

「……その侵入者の目的ならあたしに心当たりがあるわ」

「侵入者に会ったのか？アリア」

「直接会ったわけじゃないけど、この前女子更衣室のロッカーを開けたらピアノ線が仕掛けてあったのよ。あたしが……その、身体的な理由で、ロッカーの中に潜り込まないと服が取れないのがわかって、首の位置にちょうど当たるように設置されてたの。……そして白雪があたしのロッカーで何かやっているのを見た人がいる」

「……それはおかしいな。確かに白雪ならやりそうで怖いけど、そんなトラップは強襲科の3年や諜報科じゃないと習わないはずだ」

「なるほど。それをやったのは侵入者の『白雪さん』で、本物の白雪さんに罪を着せるためか、校内でのかく乱と同時にアリアさんを狙った、ということかもしれないな」

「そうね。いくら嫌われてるからって、命まで狙われたらたまったもんじゃないわ」

そんなトラップを仕掛けたとしたら、オレの感覚では100%偽者がやったと思うの

だが、キンジの感覚ではやりかねないらしい。アリアさんが嫌われていると言うのは、恋のライバル的なアレだろう。……え？やりかねないの？白雪さん。そこまでしたらさすがに冗談じゃ済まないぞ。

「……とにかく、捕まえた侵入者が口を割らないことには、確かなことはわからないけど、今まで存在すら怪しいとされてきた『魔剣』だ。一筋縄じゃいかないと考えるべきだな」

「そうだな。それで具体的に白雪を護るための作戦はなんだ？」

「キンジが24時間体制で護る、以上だ。おはようからおやすみまで、そしてお休み中もお前が護れ」

「……俺はいつ寝るんだ？」

「寝るな、がんばれ。以上だ」

「以上だ、じゃない！普通は交代制だろ。それにずっと一緒にいれるわけ無いだろ」

往生際の悪いやつだ、もうこれは決定なんだよ。白雪さんがどうしてもキンジと一緒にしないと嫌だつて言うんだ、仕方ないことなんだよ。というかなんで知らないんだ？こいつ。

「アリアさんに承諾とつたはずだけど。白雪さんしばらくここに住むからな」

「ええ、聞いてるわ」

「俺が聞いてない！俺の部屋なんだから俺に承諾取れ」

「いいじゃない！ここで一緒に住んだ方が護りやすいし。白雪もそれが良いって言うてるんだから」

「なんで俺抜きで話が進んでるんだよ……」

どうやらうまく連絡が通っていなかったようだ。でも今更どうしようもない。教務科にも言つちやつたし多分そろそろ来るし。

「そろそろ武藤が白雪さんと、荷物を載せてここに来るだろうから先にこの部屋を片付けよう、そうしよう」

「無駄に手際がいいな。俺じゃなくてお前の部屋の方に泊まらせた方が良いだろ」

「……………毎日オレの部屋からお前の身の回りの世話をしに行く白雪さんを見送るってなんの拷問なんだよ」

「何でそれが拷問になるんだ？」

「新手のいじめか？毎日オレの心に癒えない傷を残していくのか？なんて恐ろしいことを考えるんだキンジのヤツは。想像しただけで死にそうだよ。」

そんな恐ろしいことを考えるより今は部屋の片づけをすることが先決だ。

「……………とここでこの部屋はなんでこんなにめっちゃくちゃなんだ？銃痕とかあるけど」

「ああ、白雪がアリアに攻撃を仕掛けてな。アリアもその喧嘩を買ってこんな感じだ」

「アイツが悪いのよ！あたしは自分の身を守っただけだわ」

白雪さんがアリアさんに攻撃を仕掛けた？そんな馬鹿な。オレの知っている白雪さんはおしとやかな女の子だ。そんな物騒なことをするなんて、にわかには信じがたい。

……いや、まてよ？可能性ならある。そうだ、まさかこれも――

「……キンジ、1つ聞かせてくれ。それは本当に本物の白雪さんだったのか？」

「ああ、いつもの白雪だった」

「……………」

「……………？」

「………そ、そうなのか？」

「間違いないな」

自信満々に即答されてしまった。そう、なのか？違和感を感じているのはオレだけ……？もしかしたら『魔剣』の1人かと思っただが、幼馴染のキンジにここまで確信を持って断言されてしまうと納得せざるを得ないな。

……まてよ？まさかこのキンジもキンジじゃない？……いや、落ち着け。疑心暗鬼になるんじゃない。さつきまで会話をしていた感じでは、キンジから違和感は無かった。……！そうだ、昨日の侵入者は言っていた。オレに見つかった事を『想定内』だと。もしかしたらこちらが仲間を疑うように仕向けているのか？完璧な変装が可能だという

ことを、こちらに見せつける意味合いもあったのかもしれない。

だがそれも全て仮定に過ぎない。今確認できることはあまりないな。とりあえず白雪さんについて確証を得るべきか。

「ちなみに白雪さんはどんな時にそんな感じになるんだ？それと今回はどんな状況でそうなった？」

「基本的に俺が女と一緒にいる時だな、急に暴れだすんだ。今回は俺の携帯に、『女の子と同棲してるってホント？』に始まる49通のメールが来た。直後に白雪本人が突入してきて、アリアを見つけるなり攻撃して、この有様だ。……どうしてそうなるのか全然わからん」

「……わかれよ。バカなのかお前」

「?!今のでわかったのか?」

……そうか、白雪さんはそういうタイプの子か。口喧嘩程度で済むならかわいいもんだが、この部屋の惨状を見るに相当激しいみたいだな。自制が効かないというのはなかなか厄介だ、やりすぎたら誰かケガするかもしれないし。オレもしよっちゅうキンジを殴ろうとするからわかる。

しかしそうすると、ここでキンジとアリアさんと一緒に住まわせることは失敗だったか？いや、逆にチャンスかもしれないな。うまいことやれば大人しくなるかもしれない

い。

と、なると次に確認するべきなのはアリアさんとの関係だな。

「……それと今度はアリアさんにも聞きたいんだけど、キンジとアリアさんは付き合っているのか？つていうかお互い好きなの？」

「な?!そ、そそんなわけ、な、ないじゃない!!何言ってるのよ!!」

「誓つてな無いな。ありえないだろこんなお子様」

これも違う?白雪さんの情報では2人はそういう関係のはずなんだがな。だがアリアさんはこういう恋愛話に耐性が無いらしいし、キンジが嘘を言っている様子もない。……話の流れからして白雪さんの暴走による勘違いとあったところか?

何やら喧嘩を始めてしまった2人は置いておくか。今の人間関係を整理すると、アリアさんとキンジは付き合っても好き合ってもいなくて、白雪さんはキンジが好きすぎて暴走して、キンジは白雪さんの好意に気付いて無い、と。

……白雪さんを論じて、暴走を抑えられるようにするのが最善だろうか。いつそキンジと白雪さんが付き合えば丸く収まるか?少なくとも好意に気付けば今よりマシにはなるかもしれないな。

そんなことを考えていたところで、武藤が白雪さんを連れてきたようだ。……このや

やこしい人間関係もどうにかしたいところだが、まずは護衛任務が優先だな。

『魔剣』——得体のしれない奴だが何としてでも任務は遂行して見せる。どこからでも来い！

11. 見えない敵とプランB

警察署にて

取調べを受けている少女は、頭の中で今後について考えをめぐらしていた。

(……まさかこんなにも早く捕まってしまおうとはな)

刃のように切れ長いサファイア色の目を伏せ、先日 of 失態を思い出す。

(星伽白雪の行動は把握していた。周囲の人間の行動も予測し、あの時間帯なら同一人物に本物と同時に見られることなど無いはずだった)

頭を振り、2本の三つ編みをつむじの辺りに上げて結った、その氷のような銀色の髪を揺らす。

(だが、奇跡的なタイミング……ほんのわずかな隙間があつたのか?)

自分を捕まえたあの男を思い出し、苦い顔をする。

(……まあいい。星伽をさらうことができなかったのは、運が悪かったとして諦めよう。だが……これで終わりではない。私が捕まることも『想定内』だ)

終わったことを考えても仕方が無いと、頭を切り替える。

(予定通りではない……が、次の計画に移るか)

伏せていた目を上げて目標を次に設定する。

(プランB——始めるとしよう)

「魔剣、捕まったらしいわ。ママの弁護士から電話が来たの」

白雪さんの荷物を運び終え、キンジの部屋を対魔剣用に要塞化し、改めて今後について話し合おうとしているところで、アリアさんから予想外の事を言われてしまった。全ての準備を終え、さあここからだ！状態だったところでこの話だ。外はすっかり暗くなっている。

白雪さんも予想外過ぎたのか、目を見開いたまま固まっている。

「……え？捕まったの？護衛任務終了？」

「ええ、別件で捕まった犯人が自分の事をそうだ、って言ってるみたい。まだ全部自白したわけじゃないけど、『魔剣』の仕業だと思われる事件について、犯人しか知らないはず

のことを話してらって」

「……肩透かし食らった気分だが、捕まったならそれでいいだろ。……それよりこの部屋どうすんだよ……」

「……キ、キンちゃんとの……ど、同棲が………24時間キンちゃん祭りが……」

捕まっちゃったのか……いや、キンジの言う通り、捕まったなら良いことだな。と言うことは昨日の件は関係なかったのかな？

既にキンジの部屋には対侵入者用トラップ、対盗聴の逆探知装置、監視カメラを設置して、武藤にも防弾仕様の車での送迎を、同じ強襲科の不知火にもキンジとアリアさんのフォローを頼んでいたのに。とりあえずキンジが寝ている間は警戒しておこうかと思っていたのに。装備科の平賀さんにも対超能力者用の新兵器頼んでおいたのに……まあいいか。

「うーんそうか、『魔剣』は複数犯かなって思ってたけど違うんだな。考え過ぎだったか」
「!!」

「そういうこともあるだろ。この部屋片付けていいよな？」

「……昨日の侵入者がなんであたしを狙ったのかはわからないけど、魔剣とは関係なかったみたいね。レキにも見張りの手伝いを頼もうと思っていたけど、必要ないわ」

仕方ない、犯人が捕まったことは素直に喜ばしいことだ。さっさと片付けよう、侵入

者の方もすでに捕まってるんだし、気にしても意味がない。

そうして片づけを始めようとしたところで、白雪さんが何かを閃いたように口を開いた。

「……黒野くん、『魔剣』が複数犯って黒野くんも、思っていたの？」

「ああ、もしかしたらそうかな、ってくらいだけど……？『も』？」

「……私もそんな気がしていたの。占いにもそう出た気がするし、予知夢も見た気がする」

……占いに予知夢か。白雪さんは星伽神社の巫女さんだし超能力者だ、そういう力もあるのか。何故か白雪さんが必死なような気もするが、信憑性はあるかもしれない。

しかしキンジの方はそれでも無いらしい。

「占いだって？当たるとかそんなもん」

「あ、あとでキンちゃんも占ってあげるよ。恋占いとか、恋愛運を見るとか、結婚運を占うとかあるんだよ」

「種類が偏ってるな」

顔を赤らめながら、どう見てもアピールしている白雪さんをスルーするあたりは、さすがキンジである。まあそこら辺は後回しにして、今は『魔剣』についてだな。

「……それで白雪さん、その占いはどれくらい当たるものなんだ？」

「うん、99%だよ」

「それももう占いじゃなくない？」

そんなに当たるのか……完全に予知だな、それ。信じたほうがいいのだろうか？アリアさんもそんな白雪さんの言葉を信じられないのか、納得いかないような顔で口を開いた。

「あたしは違うと思うわ。『魔剣』は1人、今捕まっているヤツだけよ」

「私の占いに文句言うなんて……！許さないよ、そう言うの」

「そんな事言うお前にはなんか証拠でもあるのかよ、アリア」

「勘よ」

「勘かよ」

「占い対カンか、どちらを信じるべきか……そういう話じゃないな。ここは普通に警察の調べを信じるべきだろう。それを疑いだしたら何もできない。」

しかし、一応自分で立てた仮説だ、責任は持たないといけないな。

「複数犯って言ったのはオレだし、この部屋もせっかく要塞化したわけだから、悪いけど少しの間は予定通りに同居してくれないか？それに部屋片付けるのも面倒くさいし、むしろもうこのままで良くない？」

「良いわけないだろ。……まあそういう可能性があるって言うなら、期限付きでな」

「あたしは必要ないと思うけど。ま、もう魔剣は捕まったんだし、少しぐらいなら付き合っただげるわ」

「……アリアは要らないのに……」

「主な周囲の警戒とかはオレがやるから、みんなは普通にしてみてもいいからな」

白雪さんがボソツと何かを言ったが声が小さくてよく聞こえなかったな。うん、聞こえなかった。

白雪さんの護衛は、とりあえず近々行われるアドシールド終了まで、ということになった。年に一度行われる武偵校の国際競技大会で、校外からの人の出入りもあり、事件が起こるとすれば一番危険な時期であるためだ。魔剣ではなくても何かしらの事件が起こるかもしれない。

『魔剣』は捕まったことにはなった。だが一度任務を受け、一つの可能性を見出した以上は、最後まで努めよう。

数日後

……何も無い。あれから護衛を続けているがまったく何も無い。近くから不穏な気配も噂すらもまったく無い。アリアさんと白雪さんも事あるごとにケンカしているみ

たいだ。胃が痛い。諜報科の友達から『魔剣捕まったのにお前何やってんの?』って言われるし、なんかもう嫌になってきた。

……いや、挫けるんじゃない。自分で出した仮説だ、せめてアドシアードが終わるまでは全うしなければ、自分が納得できない。たとえ一人になっても、その責任は取らなければ。

さらに数日後

……相変わらず何も無い。今日はキンジと白雪さんが、一緒に花火大会に行く計画を立てていた。なんでも白雪さんは『星伽』から神社や学校から出ることを禁じられているらしい。そこでキンジが『俺がついて行ってやるから一緒に行こう』とか何とか言つて、デートの約束を取り付けていた。

まったくいい身分だ。まあキンジと白雪さんが付き合うなら、その方が丸く収まるだろうとは思っていたから、良い流れかもしれない。影ながら応援して……え? それ、オレもついて行くんですか? あ……オレ護衛だもんね、そうだよ。遠くからお前らのデートを見守ってるね。

……くじけそう。精神的ダメージが半端無い。あいつらなんかデート中にキスしそうな勢いだったし。アリアさんも数日前からどっか行っちゃったし、もうオレはダメ

かもしれない。

そして特に何事も無くアドシアードの日を迎える。

……何も無かった。アドシアード当日まで本当に何も無かった。綴先生から昨日『お前まだ護衛やつてたの?』とか言われた。苦笑いしかできなかつた。今日のアドシアードも競技にも雑用にもイベントにも出ない。任務優先だからな、仕方ない。

だが今日だ。今日こそが本番だと思わなければダメだ。今までまったく何も無かつたが今日は来るかもしれない。魔剣……いるのか? いないのか?

『魔剣』——結局会うことも無かつたが今日こそは来るかも知れない……つていうか来い。いつそ来てくれ『魔剣』。いつでも来い。どこからでも来い。早く来てくれ『魔剣』! いたら返事をしてくれ! 『魔剣』!!

某日 警察署にて

(魔剣、捕まる。……か)

ゆるい金髪をウェーブにした少女は、数日前の記事を眺めて考えをめぐらせていた。

(……やっぱり、だめだったか)

イ・ウー内でも友達と言える程度には付き合っている彼女を、信じていなかったわけではない。だが少女はどこかで、計画は崩される予感がしていた。……自分自身もそうだったように。

(そんな気がしてたんだよねー)

だが少女の心は動じない。それもまた、『想定内』なのだから。

(……じゃあ、プランBってことだね………ジャンヌ)

その少女——峰 理子は妖しく笑った。

12. 魔剣と武偵殺し

アドシアード当日——ついにこの日がやってきた。白雪さんの護衛任務もアドシアードが終わったら終了となる。すでに任務と言うかこだわりや意地といったものになつている気がするが、もしここで投げ出したことで白雪さんに危険が及んでしまったら、後悔してもしきれない。

途中でいなくなつてたアリアさんも、一応レキさんと一緒に見張りをしてくれてほしい。護衛が手薄になれば、敵をおびき寄せられるかもしれないと頑張ってくれていたいようだ。ありがとうアリアさん、ありがとうレキさん。

白雪さんにはキンジがびつたりとついている。その周囲を周ってオレが警戒し、さらにその外からアリアさんが見張つている、という形だ。

装備科の平賀さんに頼んでおいた新兵器も手に入れたことだし、準備万端だ。

ここまでやったならやり通そう。その結果何も無ければそれでいいじゃないか。任務中に誰もケガをしないことはとてもいいことだよ、うん。

学校内の人も増え、にわかに活気づく。

そして、とうとうアドシアードの競技が始まった――

――そして何事も無く終わった。

………何か起これよ。ここまで来たら何かしらあるだろ。全ての競技が滞りなく終わりました、じゃないんだよ。なんて空しい時間だったんだ。とても平和でしたよ。……いや、そういうことを考えちゃダメだな。何事も無かったことを素直に喜ぼう。関係者の方々には改めてお詫びしておこう。すみませんでした皆さん。

競技が終わったということで、残すは閉会式だけということになった。閉会式にはチアが踊るようで、何がどうなっただかアリアさんと白雪さんも一緒に踊っていた。

そして……その閉会式も何事もなく終わりました……。

まあ、最初からわかっていたことだ。『魔剣』は捕まっていると言う警察の調べがあった以上、そこでやめておくべきだったんだ。

閉会式の片付けも終わり、日も傾き始めた。

『護衛任務』終了……無駄に疲れたな。帰って寝よう、そうしよう。

悪い夢を見ていた気分だ。オレは『魔剣』という幻を追っていたんだろうか。魔剣は別の事件で捕まったと言うのに、何から護ろうとしていたんだろう。心が悲しさと空しさでいっぱいになる。今誰かに優しくされたら泣いてしまうかもしれない。

急に眠気がしてきた……集中力が切れてしまったようだ。疲れのせいか、すごい気持ち悪いし体が重い。さっさと帰って寝ようか……。

そう思い帰ろうとしたところで、後ろから白雪さんが話しかけてきた。

「黒野くん、あの、お疲れ様でした」

「……ああ、白雪さん。いや、何も無くてよかったよ、うん」

「すごい疲れてるみたいだね、大丈夫？」

「帰って寝れば大丈夫だよ……たぶん」

心配はしてくれているようで、いくらかは救われる。わざわざキンジを置いて来て、こちらをねぎらってくれているのだから本気で言ってくれているのだろう。……そういえばキンジはどこに行つたんだろう。少し前まで白雪さんと一緒に居たはずなのに。そう思い、少し後ろにいた白雪さんに声をかける。

「そういえばキンジは——」

——全てを言い切る前に……オレの首元には刃があつた。

「……あれ、白雪……さん？」

状況がよくわからない。確かなことは、今、殺されるかもしれない、ということだ。

そして……『白雪さん』が口を開いた。

「……情報通りだな。不意をつけば、やはりこの程度か」

白雪さんでは無い声……だがそれは、どこかで聞いたことのある声だった。

「……あの時の侵入者か」

声の主を思い出し、現状を理解する。……報復ってやつだろうか。

「言っただろう？お前を知っている、と。お前は任務中と緊急時以外は隙だらけだ」

ああ、オレが集中状態を切るのを待ってたわけか。そんなこと言っただって、ずっと気を張っていられるわけじゃないじゃないか。

「ずるい、とは言わせてくれないよな」

「当然だろう。少なくとも、数で私を抑えたお前が吐いていい言葉ではない」

そりゃそうだ、油断したオレが悪いな。こちらの任務は『アドシアード終了まで』だろうが、そんなもの敵には関係ない。

「……キンジと白雪さんは？」

「そちらは仲間が抑えている」

——そう、か。やっぱりそういうことだったのか……

「やはり『魔剣』は複数犯……まさかお前は、この時のためにわざと捕まったのか？」

「……………?」

「……………」

「……………そう、その通りだ」

「……………そうだったのか」

なんか違うようなリアクションをされてしまったが、もう、そう言うことにしよう。その方がお互いのためにも良いのかもしれない。

「それで、オレはどうすればいい? キンジと白雪さんを解放するための条件は?」

「この状況でその余裕か。私がこの刃を少し動かせば、お前は死ぬというのに」

確かにそうだ。だが、その状態で止まっているということは、きっとオレを生かす意味があるんだろう。

そう思つて交渉でもしようと思つたのだが、意外にも何も言わずに剣を収めた。

「…………『司法取引』で出てきた以上、私も今は囚われの身も同然だ。今のはあいさつ代わりと、まあ、証明のようなものだ」

「証明?」

「私は、お前ごときには負けていない」

そう言つてこちらを睨む。…………根に持つてるのかな。

「いやいや、最初からひとりで勝ったつもりもないし。で、ご用件は？」

用件を聞くと、彼女は何故か納得がいかないような顔してから、後ろを向き、こちらを促した。

「私について来い。お前も『プランB』のメンバーだ」

「……意味はわからないけど、大人しくついていくよ」

なんのメンバーだとかはよくわからないが、キンジと白雪さんが捕まっている可能性がある以上、ついていくしかないだろう。

未だに目の前にいるのは『白雪さん』で、結局この人は誰なんだろうとは思っているのだが、名前を聞ける雰囲気ではないな。

誘導され、たどり着いたのは何故か女子寮の屋上だった。そして捕まっているはずのキンジと白雪さん、そしてアリアさんに——理子さんもいた。

一体どういうことだ？2人が捕まっている様子も無いし、理子さんも『司法取引』で出てきている。そして……アリアさんと理子さんと白雪さんが睨みあっている。

「この……汚らわしい、ドロボーの一族！あたしのパートナーは盗めないわよ！」

「くふふ、キーくんだってその気だったんだよ？アリアだって見たでしょ？キーくんは

もう、理子の胸に溺れる3秒前だったんだからあ

「…………ドロボー猫が2人も！キンちゃんは渡さない!!」

…………なんだこれ。キンジを取り合っているのか？どういう経緯かわからないな。キンジはそんな3人の睨みあいを傍観してるしどうなってるんだろうか。

とりあえずこの場で、一番話ができそうな人に聞いてみるとしようか。

『魔剣』、2人を抑えたというのはブラフだったのか？

「私をその名で呼ぶな」

「いや名前知らないし…………」

「…………30代目 ジャンヌ・ダルクだ」

…………へえ、ジャンヌダルクさんて言うのか、珍しい名前だね。突っ込むのは後にして現状把握を優先しよう。

「それで、ジャンヌさん？」

「まあ、そういうことだ。円滑に事を進めるために、そう言った方が良いと判断した。ここに全員集めることが目的だったのだ」

…………そうか、とりあえず今、危険な目に会っているヤツはいないわけか。…………良かった。ということは次はあいっつだな。この状況を傍観しているヤツに経緯を聞こう。

「キンジ。なんでこんな事になってるか教えてくれ」

「……ああ、愛らしい子猫同士がじゃれあっているだけさ」

「意味不明なこと言うなぶん殴るぞてめえ」

ダメだ、キンジが『ヒステリアモード』になっている。今のこいつと会話する気にならない。やっぱりジャンヌさんに聞こう。あの人がこの場で救いだ、助けてくれジャンヌさん。

「現状が呑み込めないんだけど、どういうことか教えてくれないか？ ジャンヌさん」

「……プランBは理子の計画が失敗に終わり、私も早期に捕まった場合、司法取引で2人同時に出ることから始まる。2人ならば『ヤツ』に立ち向かえないまでも、理子を危険から遠ざけることができるからだ」

先ほど言っていたプランBとやらがこの現状と関係あるらしい。そして『ヤツ』による危機……そういえば前に理子さんと面会した時に聞いたな。捕まっていた方が安全だと。

「……その『ヤツ』って言うのは？」

「イ・ウーのNO. 2——『ブラド』。理子に執着し、幼い頃から彼女を監禁し、監視していた変態だ」

「なんだよそのド変態は……！」

幼い女の子を監禁して監視だつて？ 完全に変態だ。監視するだけで手を出してなさ

そんな当たりが生粋の変態じゃないか。

「ああ、だがそのド変態は恐ろしい力を持っている。私達2人では恐らく倒せないだろう。だからこそお前達を集めたのだ。理子を……私の友達を解放するために」

「……………」

……こいつは『魔剣』、白雪さんを狙っていた誘拐魔だ。司法取引で解放されたからって、情に流されていい相手じゃない。そんな都合のいい話を受けるわけには……

だが——理子さんを友達だと言ったその目は、嘘では無いようだ。

「……………こつちにメリツトが無い。っていうか都合良すぎじゃないか?」

「お前の望む情報をやる。……それに、友達には甘いのだろうか?」

そう言つて彼女が笑う。

「……………本当に知つてるんだな」

どこ情報だろうね……理子さんかな。

いつの間にか3人の睨み合いも終わり、辺りはすっかり暗くなっていた。

そして、雲間から現れた満月を背にして、理子さんがにやつと笑い、言った。

「キーくん、アリア、ゆきちちゃん、それにジャンヌにソウくんも、みんなで一緒に——」
「——化け物退治、やろうよ!!」

ブラド

13. 依頼と化け物退治

武偵少年法により、犯罪を犯した未成年の武偵の情報は公開が禁止されている。人権上の問題で武偵同士でのやり取りも禁忌であり、マスコミの報道でも名前は明かされない。

おかしな話だ。海難事故で乗員乗客を全て救助した金一さんは『無能な武偵』となりキンジの心も傷つけられ、犯罪を犯した武偵は名前すら明かされず法に守られる。状況が違うからと言って、納得できるものじゃないな。

その武偵少年法は、司法取引なども合わせて悪法であるとの声もある。……そんな法律のおかげで、こういう事も起こりうるわけだが。

「たっだいまー!」

女子寮での件の数日後、昼休みに入ったところで、いつものフリフリの制服と、何故か赤いランドセルを背負って理子さんが武偵校に帰ってきた。理子さんはみんなの認識では、長期の極秘犯罪調査のためにアメリカに行っていたことになっているらしい。

「みんなー、おっひさしぶりー!りこりんが帰ってきたよー!」

『りこりん！りこりん！りこりん！』

教壇に上がりくると回ってそう言った理子さんに、ノリの良いクラスのみんなは教壇に駆け寄り、りこりんコールを送る。のん気なものだ、真相を知らないと言うのは幸せなのかもしれないな。

『りこりん！りこりん！りこりん！』

「ソウジ………おい、ソウジ」

「りこりん！りこりん！りこ………なんだよキンジ。今忙しいんだ」

「なんでお前もやってんだ」

教壇の方に駆け寄ろうとしたオレに、キンジが呆れた顔でそんな事を言う。やるだろ普通。ここは余計なしがらみは忘れてノッておく所だろう。それに司法取引で解放された以上、合法的なわけだ。納得いかない気持ちだつてあるが、それはオレ個人の感情でしかない。

「お前もやっておけよ。これからチームで動くんだろ？表面上だけでも、わだかまりは無いはうがいいだろ」

「やってたまるか。……別に納得いつてないわけじゃない。ただアホっぽいからやらないだけだ」

キンジの場合は、シージャックの件でギクシャクするのかと思つたが、金一さん関連

の情報を報酬に理子さんに協力することに決めたらしい。

ただ、ノリが悪いのはまずいな。理子さんに振り回されるのが目に見えている。

「くふっ。キーくんもおいでよー!」

「……………」

理子さんもそんなキンジをわかっているのか、わざわざ名指しで呼ぶ。完全におちよくってるな。

その元気でいつも通りの彼女を、今にも銃を撃ちそうな目で、アリアさんが睨んでいた。

「アリアさんもずっと睨んでないでさ、『ブラド』分の冤罪を晴らすために協力することにしたんだろ?」

「…………武偵殺しの冤罪が晴れたからって、すぐにその張本人と仲良くできるわけないでしょ。それにリュパン家の人間と組むなんて、ホームズ家始まって以来の不祥事になるわ」

それはもちろんそうだ。そこですんなり受け入れてしまったらおかしいだろう。ただ……チームで動く以上は、そういう負の感情はなるべく早く処理しなければ、トラブルに発展しかねない。

アリアさんもその辺りはわかっているとは思うのだが、抑えきれないといったところ

だろうか。それだけじゃなく、キンジをめぐる争いをしているせいもあるのだろう。

「なんであんたは平然としてるのよ」

「平気では無いけど、割り切るよ」

正直なところ微妙な気持ちで自分自身も感じてはいるのだが、そこを割り切つていかなければいつまで経つても先に進めない。

盛り上がった教室もなんとか落ち着きを取り戻した。昼休み中の用事を果たしに行こうかというところで、理子さんが話しかけてきた。

「ソウくん！りこりん、無事お務めを果たしてきました！」

そう言つてビシツ、と敬礼をする。

「あ、ああ。ご苦労様」

「あれ？なんかリアクション薄いね。さっきまでノリノリだったじゃん」

それはあの場での勢いみたいなものだ。割り切ろうとは思つても、実際1対1で話すとなるとどう接したらいいか戸惑ってしまった。

「いや、いきなり前みたいなのりに合わせるのは無理があるって」

「……うん、そうだね」

少し間があつたが、それは彼女もわかっているのだろう。だからこそ、変にならない

ようにテンションを上げているのかもしれない。

「その辺りは徐々にということで。それよりもまず、化け物退治の方、がんばってな」

「ソウくんはジャンヌとちやんと仲良くやるんだよ?」

「……何とかやってみるつもりだけどね」

『化け物退治』は辞退させてもらった。オレがそういう、こちらから攻め入って逮捕するような任務には役立つとも思えない。迫る危機を振り払う、誰かを護るといった方が得意だ。

しかし、いがみ合っているアリアさんと理子さんと白雪さんが同じチームとなるとラブルが起こる予感しかない。何とか仲良くやって欲しいものだ。そもそもなんで白雪さんも参加してるんだらう。

「そういえば白雪さんって、なんでこの作戦に参加することになったんだ?」

「なんかねー、キーくんを女子寮に呼び出した時についてきてたみたい。アリアが来る前に先にゆきちやんがきたの。それで、どうせなら巻き込んだりやえ! って」

巻き込んだりやったのか。あの日は白雪さんにキンジをびったりつけてたから、確かに呼び出されたらわかるか。でもだからと言って見返りなしに参加したりはしないだらう。白雪さんにも欲しい情報でもあるんだらうか?」

「ちなみに何か交換条件はあるのか?」

「あたしは知らないよ？ ジャンヌと何か取引してたみたい」

いつの間に……というか抵抗はなかったんだろうか。直接会ったことは無いといつても、自分を狙っていた相手だろうに。

「……そっか。当人が納得してるならいいや。じゃあ、オレはこれからジャンヌさんと会う約束があるから」

「うん、そっちはよろしく！」

そう言つてまた敬礼する。マイブームなのかな。それはまあいいとして、あまり相手を待たすわけにはいかないし急がないとな。……その前にこれだけは言っておこう。

「一つ言い忘れたことがあった」

「ん？ なーに？」

「……おかえり、理子さん」

ただいまには、おかえりを返さないで。

「……言うタイミング、外してない？」

そう言つて彼女は、笑顔を見せてくれた。

情報科の一室、そこでジャンヌさんと待ち合わせている。ジャンヌさんは司法取引の

条件の一つとして、この学校の情報科2年生という扱いになっている。設定としてはパリ武偵高からの留学生ということになっているが、実際のところは解放の条件として、そうすることを強制されているらしい。もともと本人はそれも織り込み済みだったようだが。

待ち合わせ場所に着いたところで、中から話し声が聞こえた。ジャンヌさんと、相手は白雪さんだな、本当に抵抗は無いみたいだ。

ジャンヌさんが白雪さんを狙っていた理由は、優れた能力を持つ者を集めて競い合い、教え合うことで超人を作るという、イ・ウー内の目的のためらしい。誘拐しないで普通に教えて、つて言うんじやダメなんだろうか。

まあ、交換条件とやらもあるらしいし、2人の関係がそれほど険悪にならないのは良い事だ。そう思い、オレも中に入ることにする。

「悪い、少し遅れた……」

「——つまり盗聴、盗撮と言ったものは、相手の隙をつくことで効果を発揮するということだ」

「勉強になるよ、ジャンヌ。次はキンちゃんの情報……あ、黒野くん、こんにちわ」

「なんの勉強だろうか。任務？ そうだな、盗聴だの盗撮だのはきつと仕事に必要なんだろう。それ以外思いつかない、思いつきたくない。……これが交換条件というヤツか？」

確かにその辺りは、相手の情報を集めて行動を予測する『魔剣』の得意分野ではあるのか。

こちらの話の邪魔になると思ったのか、白雪さんがそそくさと帰る準備をし始める。

「続きはまた今度お願いね、ジャンヌ」

「いいだろう。次は証拠を残さずターゲットを連れ去る方法も教えてやる」

「……それを覚えて白雪さんは何する気なんだよ」

これは放っておいて大丈夫なヤツなのか？ターゲットつて誰だよ。誰か連れ去る予定でもあるのだろうか。深く突っ込まないほうがいいのかもかもしれない。

白雪さんは出て行ってしまい、この部屋には2人だけが取り残された。とてもプレッシャーを感じる。

「……座れ」

「はい」

……怖いんだよな、この人。やっぱり根に持つてるのかな。

この前、初めて素顔を見せてもらった時は驚いた。銀髪でサファイア色の目をしたとてもキレイな白人さんだったんだから。ジャンヌ・ダルクの末裔というだけある。あまりに予想外過ぎて思わず『初めました』って言った時はすごく怒られてしまった。

一緒に行動する以上はジャンヌさんともある程度良好な関係を築きたいものだが、そ

の辺りは難航している。

「時間が無い。先に作戦の概要を説明する。質問は随時するがいい」

「……お昼ご飯食べながらでいいかな？」

「……………」

「我慢します」

ダメだ、無言で睨まれてしまった。おなか減ったな。

「……………まず、『ブラド』については、全員の前で話した通りで理解できているな？」

「ああ、真正銘の化け物で、基本的に死なないけど弱点があるって言う話だな」

理子さんを狙う変態ストーカー、『ブラド』。オニのような化け物で、120年以上前から生きているらしい。そして傷を負っても回復する力があるが、体にある4ヶ所の魔臓と呼ばれる弱点を同時に潰すと、その回復能力を無効化できる、と。……ゲームのボスみたいなの、なんともファンタジーな存在だ。最初は信じられなかったが、ジャンヌさんも理子さんも嘘をついている様子は無かったのが、最終的にはみんな納得した。

「そうだ、『魔臓』の位置は3ヶ所までわかってるが、残り1つの場所がわからない。そこがヤツを倒す上での障害となる」

「うん。その辺りは化け物退治チームに任せるけど、そこでオレがやることってあるのか？」

今日の用件はそこだ。化け物退治は他のメンバーに任せるとして、オレの仕事はなんだという話だ。

「1つは理子の護衛。『ブラド』の所在が掴めるまでの危険を防いでもらう。理子に直接つづのは私で、お前は周囲の警戒だ」

ブラドは、この学校に非常勤講師として勤務している小夜鳴先生が管理する館に出入りしている、というところまで判明しているらしい。当然、その小夜鳴先生も警戒の対象となるだろう。

ジャンヌさんもその点を考慮して、司法取引の条件である武偵高生になるということも受け入れた。計画通りと行ったところなのだろうか。

「まあ理子さんを相手が狙っているとすれば、もちろん必要だな。それでもう一つは？」

「魔臓の位置がわからないまま『ブラド』との戦闘が始まった場合、残り1つの魔臓の位置が特定できるまでヤツの攻撃を防げ」

「ええ……」

オニのようなほぼ不死身の化け物相手に時間を稼げ、と？確かに倒すだけじゃなく、捕まえる必要があるからこそ、魔臓を潰して弱体化させる必要があるんだろうけど。

「……それオレ死ぬんじゃないの？」

「お前なら問題ないだろう。何とかしろ」

「ええ……」

死んでも問題ないってことでしょうか。オレの扱い雑過ぎないか？相当恨まれてるんだな。

「仕事はそれだけだ。受けるか？」

「……時間を稼ぐ方法をオレに任せてくれるって言うなら」

死にそんな気もするが、その役をやらなければ他の誰かが死ぬかもしれない。どうか方法を考えなければいけないな。

そんな事を考えていると、満足そうな顔でジャンヌさんが言った。

「大した自信だ。期待しているぞ、『負けない武偵』」

「だから、それ知らないって」

オレにできることといえれば防御して、逃げて、必死に考えることぐらいだ。その時点で負けているようなものだろう。

『報酬』もあることだし、依頼は受けることにした。相手は化け物らしいが、オレのやることは変わらない。誰も傷つけさせないために努力するだけだ。

14. オオカミと神童

時間を稼ぐ方法は任せてほしい、とは言ったものの、正直なところほぼ何も思い浮かんでいない。オニのような怪物なんて戦ったことも見たことすらもないから、加減がわからない。でも自分で考えなければ全部トンファーで受けろと言われかねない。それは最終手段だ、死ぬかもしれないし。

相手はほぼ不死身な化け物なわけだから、極論で言えば理子さんの操るような機関銃付き無人機で包囲射撃しても良いかもしれないが、それで全部の魔臓が潰れてそのまま死なれても困る。想定ができない相手に対する時間稼ぎの方法を考えるのは難しいものだ。対人用トラップとか獣用の麻酔弾とか効果あるのかな。

ジャンヌさんも実際『ブラド』が戦っているところを見たことがあるわけではない。一応、彼女が描いた『ブラド』の絵を見せてもらったが……参考にはならなかった。

かといって、理子さんに直接聞くのも戸惑われる。ブラドの話をしている彼女の目は、怯えているように見えた。きつと恐ろしい目にあつたのだろう。

装備科の平賀さんに新兵器を頼んでおいたが、間に合うかどうかかわからない。対魔剣

用に作ってもらった物も結局使わないままだし、今度こそ役立てたいとは思っているのだが。

第一目標は交戦前に魔臓の位置を全て特定することだ。オレは保険のようなものだが、だからこそ手を抜くわけにもいかない。最悪は自分自身の力で時間稼ぎするとしても、まずは安全策を考えるべきだ。

『細心の注意を払って行動しろ、よく考えて動け』

感情に身を任せてばかりだったオレの、今の基礎となつている言葉。視界を広げて対応すること、動く前に考えること、それが大事だ。未だに感情を抑えきれなくこともあるのは困ったものだが。

依頼を受けてから数日後、この間は特に不穏な気配は感じられなかった。ジャンヌさんとも何度か情報交換したが、あちらも問題ないらしい。この数日間であったことと言えば、白雪さんがS研——超能力捜査研究科の合宿に行つて、今日戻ることになつていくくらいだ。

化け物退治チームの方で、小夜鳴先生を何か理由をつけて拘束し、『ブラド』の所在を吐かせるなりヤツをおびき寄せる餌にするという案も出たらしい。しかし、彼は表向き

は聖人のように性格の良い、女生徒から多大な人気を集めるイケメンだ。素行も女癖が悪いと言う噂を聞く程度で、何か犯罪に手を染めているわけでもない。危険を冒してまで拘束する理由が見つからなかったようだ。

こちらとしても魔臓の位置も掴めず、足止めする方法が固まっていないうちに『ブラド』に來られても困るし、そういった強引な手段はやるとしても、もう少し後だろう。他にも彼の管理する館へ潜入し、ブラドの手がかりを探す作戦もあるらしいが、その辺りはあちらのチームに任せよう。

今日は中間テストが行われる。午前中の一般科目のテストが終わり、今は午後からの体力テスト中だ。さつきからキンジとアリアさんが、かなり近い距離で何やら話しているがその程度で動じることは無い。好きなだけいちやつくがいい。そして死ねばいい。

この後、探偵科と救護科が合同でテストを受けるそうで、その担当が小夜鳴先生らしい。その間はさすがに何かアクションを起こすとも思えないが、一応キンジが護衛役となる手はずになっている。

そんなことを考えているところで、ジャンヌさんから電話が来た。

『そちらはどうだ？』

「相変わらず異常なし。そつちは？」

『こちらも同じだ。影も形も無い』

いつもやっている定期連絡のようなものだ。ジャンヌさんの読みでは、そう遠くない内に『ブラド』の下僕であるオオカミが来るかもしれないらしい。下僕とは言っても全国各地に放し飼いにされていて、どう動くかまではわからないみたいだが。

『……お前はこの状況をどう見る？』

これには少し驚いた。ジャンヌさんがこちらに意見を求めることは今まで無かったのに。

「……近場で怪しい人間が小夜鳴先生しかいないとなれば、彼の周りにブラドの影が見え次第即、拘束する。動きが見られなければ、こちらから接触することも考えているけど」

彼自身が理子さんに危害を加えるような行動を少しでも見せたら、準備ができていないなどとは言ってられない。

『それには同意見だ。おそらく近いうちに動きがあるだろう。気を抜くな』

「了解。お互い気を付けよう」

『……………』

事務的なやり取りをして電話も終わりかと思ったら、まだ電話口に気配がする。

『お前はなぜこの依頼を受けた？』

「……？報酬と、まあ、理子さんのためだよ。それをわかってジャンヌさんも依頼した

んじゃないか」

『違う。なぜ私からの依頼を受けた？他のメンバーは面識すらなかったから、まだいい。だがお前とは直接敵対したはずだ』

言われてみれば確かにすんなりと受けてしまった。魔剣とは一進一退の推理戦と死闘を繰り広げたような気がするしな。あの時の記憶は少し曖昧だが、敵対していたのに手を組むことにそれほど抵抗は無かった。司法取引などそのあたりについては割り切りうろとは思っているが、それにしてもだ。

依頼という形なら、アリアさんからだって来たかもしれない。ジャンヌさんから受ける必要は無かったかもしれない。

「……自分でもわからないけど、たぶんジャンヌさんが本気だったからかな」

『私が？』

「友達を助けたい、っていう言葉が本気だと思ったからだよ。それに、もう同じ武偵校生だったし」

きつとそんなところだろう、深く考えていかなかったただけだ。よく考えずに言葉を出してしまうと、そんな甘い感じになってしまうと最近気付いた。

『……身内となった途端にそれか。確かに甘いな』

「ああ、自分でもそう思う」

心を読まれたかと思った。呆れたような声だった。なぜ彼女があんな質問をしたのかはわからないが、これだけ話せたのは依頼を受けてから初めてだ。今なら聞けるかもしれないな。

「……こつちからも質問。なんでオレに依頼したんだ？他に優秀な人間はいるじゃないか」

『……………』

その場では受けてしまったが、よく考えればオレじゃなくても良かったはずだ。

『……最初のプランではお前はメンバーでは無かった。私が推して、理子も承諾した』

「え？」

『この計画に必要なだと思ったから、以上だ』

そう言つて電話は切れてしまった。……まだまだ壁はありそうだが、一応評価はしてくれているようだ。少しづつ関係は良くなっているのだろうか。

その日の放課後、今、目の前に正座させた1人の男がいる。探偵科と救護科が合同で講義を受ける間は、ヤツがアクションを起こすとも思えない。そう考えていたのだが、とんでもないアクションを起こすやつが現れた。

「……噂に間違いは無いか？キンジ」

「俺は無実だ」

その講義を受けた人間の間で、みんながDVDに夢中になっていることをいいことに、キンジが理子さんの服の中に手を入れ、胸を揉みしだいていたと言う噂が立っている。あろう事かそれを小夜鳴先生に見られたらしい。それなのにしらを切る気か。

「……理子さん、証言を」

「キーくんは意外と大胆でした……」

「ジャンヌさん、これは……？」

「有罪。死刑だ」

「待て！本当に無実なんだ。ただ俺は盗られたシャーペンを取り戻そうと……」

どうやら理子さんからかわれたようで、その流れでそうなったとのことだ。一体どういう流れなのか。どんな人生を歩めばそんな流れを掴むことができるんだろう。こいつの周りにだけ不思議な力が働いている気がしてならない。

それからさらに数日が経ち、対ブラド用にとりあえずワイヤーや閃光弾などの一通りの装備を揃えた頃、ついにブラドの下僕が現れたとジャンヌさんから連絡があった。

絶滅危惧種、コーカサスハクギンオオカミ。100キロに迫ろうかと言う巨大なオオ

カミの目撃情報が、人工浮島の南端であったらしい。

護衛対象からあまり離れ過ぎるのは避けたいところだが、ちようど小夜鳴先生が担当する身体検査の、再検査とやらがあるタイミングで調査に乗り出すことにした。その再検査は理子さんと一緒にアリアさんや白雪さん等も受けるということで、そちらの心配は要らない。このタイミングで彼がオオカミと接触したり、不自然な行動を見せた場合は即時拘束も考えられる。今なら彼の周囲に人がいても違和感無く、かつ行動も読めるだろう。

こちらはオレー人での捜査になるが、たとえオオカミが複数頭いたとしても何とかして来い、とジャンヌさんに言われてしまった。やっぱりオレの扱いは雑だな。これも『周囲の警戒』に入るらしい。

南端にある工場跡地に着いたが、何かの気配は感じられない。だが、動物は気配を殺すのも、足音を消すのも上手いので油断はならない。

割と奥まで進んだが、ここにいた痕跡は見つかった。数本の獣の毛のみだが、おそらく間違い無い。すでに移動してしまったのか。

この痕跡を追うことが、ブラドを追うことになるかもしれない。放っておけばその痕跡も消えてしまうだろう。このまま追うべきだろうか、と考えていたところでまたジャンヌさんから電話だ。

『黒野、学校内にヤツの下僕が現れた。今は遠山と、狙撃手1名がバイクで追っている』
「みんなは無事なのか？」

想定内ではある。だがそれでもトラブルは起こりうるものだ。

『生徒にケガは無い。だが……小夜鳴が腕を負傷したらしい』
「……？なんで小夜鳴先生が」

彼にはブラドとの繋がりがある、その前提で動いていた。その彼がブラドの下僕に襲われた？

『それはわからない。それよりオオカミがそちらに向かっている。迎撃しろ』
「了解。……ここが巣？それとも飼い主との合流地点か？」

気になるところではあるが、まずはこちらに向かっている獣の相手が先のようなだ。しばらくしたところでオオカミがこちらに走ってくるのが見えた。……思ったよりでかい。そして速い。まともに受けたら死ぬな、これは。

こちらを認識しながらも、まっすぐ向かってくる獣。正面から受ければ力負けしそうなので、トンファーを構え、受け流す体勢を作る。

飛び掛ってくるオオカミ、何とか受けるが巨体の割りに動きが速い。そして……その一度の接触で逃げられてしまう。

「さすがに追いつかないか！」

相手は獣。その足で逃げられてしまったら追いかけるのは無理がある。とつさに銃に手を伸ばす。相手が獣なら――

銃に手をかけようとした瞬間、一発の弾丸がオレの横を通り過ぎて言った。オオカミに当たったかと思われたその弾丸は素通りし、オオカミも逃げてしまった。直後にバイクのエンジン音が工場内に響く。

「ソウジ！俺がヤツを追う!!」

「――?!相変わらずナイスタイミングだな、お前は！」

まったく、本当に狙ったかのようなタイミングだよ――『正義の味方』!

……ん?今あいつ『ヒステリアモード』じゃなかった?『ヒステリアモード』のキングが運転するバイクの後ろに……下着姿のレキさんが乗っていた。……ん?おそらくオオカミを追ってきたのであろう、それはわかる。だがどんな流れでそうなった?なぜあいつは隙あらばそういう事態になるんだ?オレがシリアスな事をしようとしている裏であいつはいつも何をやっているんだ?

オオカミもいる。ブラドもいるかもしれない。それはとりあえず置いておこう。オレの横を通り過ぎて行つたあいつを最優先でぶん殴ろう。

「キーンジイ!!今からあ!お前を!全力でえ!ぶん殴るう!!」

「今?!バイクに乗つてるんだぞ?!」

「至急戻つて来い!!Uターンしてこつち来い!!その勢いで殴るから!!」

「死ぬだろそれ!!」

くそ、オオカミを追いかけて行つてしまった。この怒りをどこに向ければいいんだちくしょう。

その後、そのオオカミはなんとか捕獲できたらしい。キンジは身体検査の再検査を覗いていたらしく、武藤と一緒に怒られていた。本当に何やつてるんだあいつは。

その現場にオオカミが襲撃し、小夜鳴先生が負傷。その場に居合わせたレキさんがキンジと共に、逃げたオオカミを追った、とのことだ。

そしてオオカミは、なんとレキさんが飼うそうだ。力の差を見せ付けて従わせたらしい。こつちも何やつたんだろう。

翌日の昼休み、オオカミの件と小夜鳴先生がケガをした件の話を聞こうと思い、今は先にレキさんと話そうと試みている。……試みているのだが、うまくいかない。

「……レキさん？」

「……………」

さつきから何度か呼びかけている、というか完全に彼女の視界に入っているのだが、無視されている。さらに、2メートル以内に近づこうと思うと彼女の足元にいるオオカミに威嚇されてしまう。

ヘッドホンをしているから、前みたいにおレの声が聞こえていないのかもしれないのは、まだいい。けどおレのこと完全に見えてますよね？なんで無視されてるんだろう。嫌われているんだろうか。

しばらくそのまま粘ってみたところで、ようやくレキさんが口を開いてくれた。

「風が………」

「風？」

「風が、『あまりククロノと関わるな』と言っています」

……？意味がわからない。風？風がそう言っているというのはどういう意味だ？

「よくわからないけど、今日はそのオオカミについて聞きたいことがあって……」

「風が………」

「え、また?」

「風が『話しかけるな』と言っています。」

……これはあれか、電波というヤツだろうか。本当は自分の意見なのに誰かが言っているというようにして、言いにくいことを言おうとしているのかもしれない。ということ。これはレキシさんの本音で、オレと話たくないということか?だがそういうわけにはいかない。オオカミをどうやって従えたのか、その詳細を知りたくて来たんだ。

もう少し粘つてみると、何とか聞き出すことができた。

「——脊椎と胸椎の間、その上部を瞬間的に圧迫しました」

「それは……すごいな」

すごいなんてものじゃない。バイク上でその場所を寸分違わず狙い撃ち、脊髄神経をマヒさせ、しばらくの間行動不能にしたのだ。急場で麻酔銃など持つていなかった彼女が、どうやってオオカミを無傷で捕獲できたのか不思議だったが、とても真似できないレベルの神業だ。

オレがああ場で撃っていたら、無傷での捕獲は不可能だっただろう。彼女の技はオレの理想とするところにあるのかもしれない。

それと同時に一つ思い付く。『ブラド』も化け物だと言っても生物ではあるはずだ。レキシさんの技とまではいかなくても、生物を行動不能にする方法ならあるかもしれない。

い。筋肉、関節などに損傷を与えれば時間稼ぎになるか。見たことも無い相手だとして、人間等とはまったく別のものだと考えてしまっていた。

「ありがとう、レキさん。参考になったよ」

「いえ」

相変わらず距離があるが、なんとか聞けて良かった。今後、自分が目指すべき技術をすでに持っている人が同年代にいるなんて驚いたが。やっぱりSランクに評価される武偵は格が違うと改めて思い知らされる。

話はこれで終わりのな訳だが……やっぱり気になるな。聞かないほうがいいかもしれないけど。

「……レキさん、あと一つ聞きたいんだけど」

「はい」

「……今、『風』はなんて言ってるの？」

「『死ぬ』と言っています」

「ええ……」

なんでそんなに嫌われているんだろう。気付かないうちに彼女の逆鱗に触れてしまったのだろうか。しばらく立ち直れないかもしれない。

とりあえず収穫はあったが、同時に心に深い傷を負ったような気がする。だが挫けて

はいられない。次は小夜鳴先生と直接話すのだから。

15. 潜入任務と行方不明

「——ブッコロス」

「……………」

昼休みにレキさんとの会話を終え、次は小夜鳴先生に接触するために偶然を装って廊下で話しかけようとしたところで、殺意に満ち溢れた独り言をつぶやかれてしまった。すでに深い傷を負った心に塩を塗られた気分だ。

一瞬オレに向かつて言われたのかと思った、変な発音だったけど。その発言にちよつと引いてると、窓の外を見ていた彼がこちらに気付いた。

「…………おや、黒野君。どうかしましたか？」

「いえ。その腕どうしたのかな、と思ひまして。大丈夫なんですか？」

昨日の工場跡にはあれ以上の痕跡は見つからなかった。だとすれば手がかりは小夜鳴先生を追うことで見つけるしかない。

「ああ、これは昨日のオオカミ騒ぎの時にケガしましてね。この状態で講義に出るわけにもいかないので、お休みをもらおうと思つて届け出をしたところなんですよ」

そう言つてギブスを付けた腕を見せてくる。無害そうな笑顔と柔らかい口調で話す

姿を見ると、裏があるような人に見えない。

「それは災難でしたね。オオカミについては周知メールで見ましたけど、とても大きなヤツだったそうで。ケガしたのは腕だけなんですか？」

「いやー、不幸中の幸いと言うやつです。すぐに逃げてくれたので、運が良かったんだと思えますよ」

「ははっ。良かったとは言えませんが、命に関わる事態にならなかったのは幸いですね」

小夜鳴先生は武偵高の先生とは言え、救護科の非常勤講師なので戦闘訓練は受けていない一般人のはずだ。あまり関わりの無いオレの名前を知っているのはまだいいが、そんな人があのオオカミに襲われてこの程度で済むのか？……ブラドが使用している館の管理人である以上、ヤツと関わりが無いとは考えられない。

彼が襲われた以上はその関わりも無視できない。これがこちらの油断を誘うための自作自演のケガなら良いが、もしあのオオカミが小夜鳴先生の意図しないところで行動し、彼を襲った場合……ブラドに脅迫されて従わされている可能性もあるだろう。

「ええ、本当に。……ああ、すみませんねえ。これから用事があるので……」

「いえ、こちらこそ引き止めてしまって。それでは、お大事になさって下さい」

彼はこれから『紅鳴館』に向かうはずだ。彼が管理している、ブラドの別荘。そこに

ヤツが戻ってくるかはわからないが、手掛かりがあるとすればその場所だ。

直接話ただけでは裏が無いように見えるのだが……何故か話していると不安になる人だ。変装している人間とはまた違った気持ち悪さを感じる。

次は化け物退治チームとの情報交換だ。以前から紅鳴館に潜入するための下準備をしていたはずだが、今どうなっているのか。ハウスキーパーを2名を臨時で採用するらしく、それに紛れて潜入する計画らしいことまでは聞いている。

午後から強襲科棟の授業と合わせて、アリアさんと会うことになっていた。

「——なるほど、潜入はアリアさんとキンジで行くんだな」

「そうよ。……あ、あんな衣装着るなんて……嫌だけど」

顔を真っ赤にしているがどんな衣装だろう。ハウスキーパーなわけだからある程度は想像できるが。

館や教務科へはすでに根回し済みであり、キンジとアリアさんが臨時のハウスキーパーとして採用されているらしい。いつも働いている人が休暇を取るための臨時採用なので、館内には小夜鳴先生のみとなる。

「次は小夜鳴先生についてだけど、現場にいたんだよね？不自然なところは無かった？」

「不自然な点どころか、あいつケガしてないわよ。あたしも手当したから間違いない。気付かないフリしておいたけどね」

「……そうなの？」

自作自演の負傷どころかケガすらしてなかったか。……黒だな。

「完全にブラドと協力してるわ。もしかしたら自分でオオカミを操ったのかも」

「確かに、状況的にそれがしつくりくるな」

これはもう拘束するべきだな。ブラドの下僕を操ることができる人間を放置しておくことはできないだろう。そのせいでブラドが動き出すかもしれないが……もう何とかするしかない。

次の動き方を考えているところで、アリアさんが何かを言いにくそうにしていた。

「あんた、理子のこと許してるのよね？」

「……うん、まあそうだね」

アリアさんを前にして言うことでは無い気がするが、どちらかと言ったらそうなる。怒られるかもしれないとも思ったが、どうやら違ったようだ。

「あたしは……許したってわけじゃないけど。……それでも理子が何か背負ってるのは、なんとなくわかった」

「……………」

本人から何かを聞いたのか、多少は2人の関係は軟化しているようだ。壁はあるのだろうが、それでも以前より彼女の話を話すアリアさんにトゲは無い。

「……理子をちゃんと護りなさいよ、ソウジ」

「……どんな状況だろうと護つて見せますよ、ご主人様」

予想外の言葉ではあつたが、アリアさんも思うところがあるようだ。

自信があるわけじゃない。それでも必ずやり遂げて見せる。そんな決意を新たにしたらとここで、急に不機嫌そうになつたアリアさんは言つた。

「話は変わるけど、キンジどこに行つたか知らない？」

「……?知らないけど、どうしたの？」

「いつの間にか消えてたのよ、あいつ。昼休みに、気付いたらいなかつたの。電話も通じないし」

キンジが消えた……?電話も通じないとは何かあつたのか

「まあ、見かけたら教えるよ」

「まったく、どこに行つたのよあいつ!白雪も実家に帰るつて言うし……みんな勝手なんだから」

白雪さんについては聞いてるな。実家でいろいろあつたらしく1か月くらい里帰りするそうだ。『星伽』はとても厳しいとは聞いてるし、この数週の間、こちらの穴を埋め

るように手伝ってくれたので抜けられても文句は無い。戦力的には痛いかもしれないが仕方ないと言える。だが……なんであいつはいない？

嫌な予感……は別にしないな。何故かすぐくどうでもいいことのような気がする。放っておこう」

放課後、最終的な報告をしようと、情報科の一室でジャンヌさんと待ち合わせている。ドアの前まで来ると、すでにいて誰かと話しているようだ。相手は理子さんだな。

「お待たせ。昨日のオオカミ事件、小夜鳴先生の情報と合わせて聞いて来たよ」

「ソウくんお疲れー」

「さっそく聞かせてもらおう」

集めた情報を一通り教え、今後の方針を決める。紅鳴館潜入時、2人が隙を見て小夜鳴先生を拘束。後に館内の捜査をすることになった。こちらから攻勢に出る時が来た、『化け物退治』だ。

ついにこの時が来てしまった。オニのようなほぼ不死身の怪物である『ブラド』。とてもおそろしい力を持っていて、あの理子さんとジャンヌさんが協力しても立ち向かう

気すら起こさない強大な敵だ。協力者を集い、入念な準備をしてついにこの時を迎えた。ヤツの協力者である小夜鳴先生を確保する。これ以上先延ばしにするわけにはいかないだろう。そのせいでブラドが動き出すかもしれないが、何とかするしかない。

見たことも無い化け物を足止めする方法は何か目処が立ったが、それでも安全策とまではいかないだろう。ヤツの魔臓の位置が掴めるまで、最悪はこの身を盾にしてみんなを護ってみせる。恐怖もあるが……覚悟はできた。

「魔臓の位置も思い出せたし……ついに来たね」

「ああ、魔臓の位置も……え？」

「理子が思い出して良かった。これで準備は万全だ」

魔臓の位置わかったの？ そうなんだ……微妙な気持ちだな。いや、いいけど。自分でも第一目標は交戦前に位置の特定、って思ってた。むしろ綱渡りのな事をしなくて済んだことを喜ぼう。依頼でも位置がわからないまま戦闘が始まったらという話だった。レキさんから無慈悲な言葉を受けながら教えてもらった事だって、今後の自分を見つめ直すには良い刺激になったじゃないか。オレの苦悩は無駄じゃなかったはずだ。

それより、理子さんが『思い出した』か。それは大丈夫だったんだろうか。おそらく変態に監禁されていた時に見たんだろう。思い出したくも無いことだろうに。

「……理子さんは平気なのか？ 『ブラド』に立ち向かうのは」

「……平気じゃないよ、今だって怖い」

ブラドの話の振ると、やはり怯えたような目をする。あまり本人に聞くべきじゃないとは思ったのだが、確認しておきたかった。

少しの間震えていたが、決意をしたような目で彼女は言った。

「ブラドは強い。あたしはイ・ウーで決闘したけど手も足もでなかった。アイツには初代リュパンすら勝てなかった……何をやっても敵わない——そう思ってたけど、ジャン又と一緒に戦おうって決めたんだ」

「我が一族ともブラドは仇敵だ。3代前の双子のジャンヌ・ダルクがその初代アルセーヌ・リュパンと組んで戦い、引き分けている。だからこそ……今度は倒す。再び『リュパン』と共に」

「……………」

120年以上も前から生きているとすれば、その祖先と戦ったのはブラド本人だろう。そこから因縁が続いている……ホームズ家とリュパン家のように。

「……ブラドはホームズ家の末裔に勝って、初代リュパンを超えた事を証明すれば解放するって言った。だからアリアを狙ってたの」

「……そうだったんだ」

「だが私には信じられなかった。ヤツがそんな約束を守るはずが無いと。だからこの計

画を理子に提案したのだ。ヤツに勝つ事で祖先を超えた証にしてやろう、と」

それが2人の決意か。恐ろしい相手に立ち向かうことを決めたんだ。

「……無粋な事を言うけど、2人だけで勝とうとはしなかったんだな。現実的で何よりだ」

「当然だろう。事前の準備、周囲の環境の利用から勝負は始まっている」

「ジャンヌは策士だからねー。その辺は容赦しないよ」

おそらく容赦できる相手でも無いだろう。確実な勝利に向けての準備からが勝負つて言うのは共感できる。動く前に考える事が大事だからな。

「魔臓の位置はわかったが、お前にはまだ働いてもらうぞ、黒野」

「それはもちろん。理子さんの護衛任務は続いているし、アリア様にも『理子を護れ』って命令されたしね」

「アリアがデレた?!あたしの前じゃずっと怒ってるのに……ツンデレだあ!」

いろいろ障害はあるだろう。それでも強大な敵に立ち向かおうとする2人なら、成し遂げられると思う。

計画も整ったしあとは……一応あいつについても聞いておくか。

「そういえば2人とも、キンジがどこに行ったか知らない?」

「……? たぶん探偵科の授業にもキーくん出てなかったかな?」

「私は見てないぞ」

あれ？本当に何やってんだろう。授業に出ずに連絡もつかない。……嫌な予感はいくしない。ジャンヌさんと白雪さん……確か何か繋がりがあつたような。……ダメだ、思い出せない。きつとすごくどうでもいいことだろう。忘れよう。

館に潜入する日にちも決まった。あとは行動に移すだけだ。ブラドは強大な敵だろうが、きつと力を合わせれば倒せるだろう。

16. 剣と盾

理子さんがアリアさんを狙っていた理由を知ってから、ハイジャックの時の事を思い出してしまっている。今でも間違っていたとは思わないが……何も知らない奴がでしゃばるな、か。彼女の言った言葉は確かにその通りだったのかもしれない。この計画よりアリアさんを狙う事を優先するほど、ブラドに恐怖を抱いていたのだろう。

だからと言って、今更ヒーロー面して助けるつもりも無い。彼女を一度否定したオレがそんなことをするのはお門違いというものだ。ジャンヌさんからの依頼として、アリアさんからの命令として、そして友人として彼女を護ろう。……ヒーロー役ならばぴったりの奴がいるしな。

そのヒーローは行方不明になったあの日、何故か青森に行っていたらしい。まったく、変なタイミングで旅行に行く奴だ。詳細は作戦終了後にでも聞いておこう。

6月13日の潜入作戦当日、既に準備は完了し、あとはキンジとアリアさんが潜入するのを待つのみである。いろいろあったが、何とか支障無く始められそうだ。

『紅鳴館』——ホラーゲームにでも出てきそうな妖しい洋館だ。周囲を囲む黒い鉄柵

の向こうには、茨の茂みが続いている。黒雲が見える今日の天気のせいか、館本体は霧で包まれている。ここに小夜鳴先生がいる。館内には他にブラドも、ハウスキーパーすらもいない。ターゲット1人である。

館には、まず潜入する2人と派遣会社の営業を装った理子さんとジャンヌさんが入る事になっている。オレは近場で待機。小夜鳴先生を拘束後、安全を確認次第こちらも中に入り、館内の捜査をする。彼は戦闘訓練などは受けていないし、本人の戦闘能力はそれほどでも無いはずだ。あの4人がいて手こずる相手では無い。

作戦が開始され、4人が館内に入る。待機中も周囲を警戒し、ブラドが接近してきたのを感じたら、館内のメンバーと合流して倒す。化け物退治は依頼外だが、さすがに目の前で戦闘が始まったら加勢するつもりでいる。たぶんいらないよりはマシだろう。

しかし自分で考えておきながらブラドが接近して来たら、というのは曖昧だな。どうやって来るんだろう、車かな？ まさか飛んで来たりしないだろうな。

そんなことを考えていたところで、付けていたインカムからキンジの声がした。

『終わったぞ。入ってこい』

「……仕事早いな」

潜入任務とは何だったのか……4人が入ってからそれほど経っていないと思うのだ

が、もう終わったようだ。潜入する2人は衣装に着替える時間すら無かったんじゃないか？ 時間的に、館内に招かれて小夜鳴先生が後ろを向いた瞬間にでも拘束したんだろうか。手こずらないだろうとは思ったが本当に容赦無いな。

だがここからが本番だ。『ブラド』が来るとは限らないが、来ないとも限らない。気を引き締めていこう。

館内に入ると、すでにロープで縛られている小夜鳴先生と取り囲むように4人がいた。中に進むとキンジがこちらに気付いた。

「ずいぶん早かったな。もう少し時間かかると思ってたのに」
「一応小夜鳴も銃を取り出したんだがな。扱いは素人だった」

縛られて座らされた小夜鳴先生は、ジャンヌさんに見下される形で尋問されているようだ。剣を支えに、どこぞの騎士のように立つ彼女はなかなかの圧力だ。

「それで、ブラドはどこにいる？」

「……彼は間もなくここに来ます。狼たちもそれを感じて、昂っていますよ」

彼がそう言った途端に、館の外からオオカミの遠吠えが聞こえる。ブラドが来る事の真偽は別として、外に下僕がいるのは間違いないようだ。

「……！ 黒野、小夜鳴を見ていてくれ。行くぞ理子」

「りよーかい。館の外で待ち伏せだね」

「キンジ、あたし達も行くわよ！」

「ああ、ついに化け物とご対面か」

この流れも打ち合わせ済みなのだろうか、頼もしい事だ。あの4人で4か所の魔臓を狙えば化け物退治は終了つてところか。本当なら加勢したいところではあるが、彼を放つておく事も出来ない。

これでブラドの所在はつかめたわけだし、依頼その1の理子さんの護衛は終了。その2はそもそも作戦前に魔臓の位置が掴めたので何もする必要なし。……なんだろう、全然働いた気がしないな。一応ずっと気を張ってたんだけど。

まあ、化け物退治が終わるまでは気を緩めずにいよう。その間、小夜鳴先生から話を聞いておこうか。

「……貴方はブラドとどのような関係で？」

「ブラドとの関係、ですか。そうですね……」

先ほどから気になっているが、彼は拘束されているのにそれほど動じていない。なぜこの状況で余裕でいられる？あの日廊下で話した時と変わらず、柔らかい口調で話す。

「私とブラドは、会えない運命にあるんですよ」

「会えない？ 間もなくブラドが来るんでしょう？」

変な事を言う人だ、さっき言った事と矛盾してるじゃないか。

「……その質問に答える前に、ブラドについて一つ講義をしてあげましょう」
「……………」

質問に答える気は一応あるのだろう。講師としての性か、講義という形で話してくれるようだ。

「——この世には、吸血で自分の遺伝子を上書きして進化する生物……吸血鬼がいました。ほとんどの吸血鬼は滅びましたが、計画的に遺伝子を上書きし、屈強な個体となった者は今も生存しています。『彼』もその一人でした」

「吸血鬼……？」

「しかし、『彼』は知性を保つために吸血を継続して行い、やがて『殻』に隠されることになってしまったのです」

……殻？　なんだその表現は。ブラドが吸血鬼であることもすぐには信じられないが、いまいち彼の言いたいことがわからない。

「そして、『殻』に隠されたブラドは激しく興奮した時のみ——つまり神経伝達物質が大量に分泌された時に出現するようになっていました。そして永い時が流れ……あらゆる刺激に慣れてしまったせいでブラドは殻から出ることが難しくなったのです」

「……でも今はその『殻』から出ているんでしょう？」

なぜブラドの正体を自分から話すかはわからない。だが……『激しく興奮したときの

み』という言葉が引つかかる。

「ある日、『彼』と『私』に転機が訪れたのです。ヒステリア・サヴァン・シンドローム——遠山金一の力によつて」

「…………… ヒステリア」

ヒステリアと金一さん……………まさかヒステリアモードの事か？

「『彼』の吸血は遺伝子を写し取り、能力を写すことができる。『私』は誰からでも写せるよう、その力を人工化してイ・ウーにその技術を提供し、革命を起こしました」

彼の言葉を信じるなら……………例えば誰でもヒステリアモードになれるという事か。そんな事が可能なのか？ あの状態のキンジみたいなのがいつばいいるかもしれないのは嫌だな。そんな集団に会ったら全力で逃げ出したい。

「……………そして『彼』も、その力によつて『殻』から出ることができた。HSSによる神経伝達物質の大量媒介は……………『彼』を呼ぶのに、十分なものでした」

……………つまりヒステリアモードは、性的興奮をする事で神経伝達物質を大量に流し、能力を高める力。そしてその力を利用してブレードを『殻』から出す。……………だとしたら殻と言うのは……………

「幸運な事に『私』は動物虐待でも愉悦できる加虐嗜好の持ち主でしてね」

「……何が幸運なんだ？」

……まずい気がする。とても嫌な予感だ。『殻』が想像通りなら……みんなを呼んでおこうか。

「絶望が必要なんです。彼を呼ぶにはね。彼は絶望の詩を聴いてやってくる。……今私は絶望していますよ。この私がこんな惨めな扱いを受けるなんて……」

だが、こいつが言ってる事が本当なら今『ヒステリアモード』になれないはずだ。そんな加虐嗜好のヤツが縛られているんだから。

「ですが絶望と同時に新しい扉を開くことができました——」

「——縛られるのも、意外とイイですねえ……」

「なんだこの変態は……！」

あらゆる刺激に慣れたって言ったじゃないか……！なんで今そっちに目覚めたんだこの変態は！

「よく見てくださいよ？私は人に見られている方が掛かりがいいものでしてね。ほら、私のこの惨めな姿をもつとよく見てください！ジャンヌのように見下す感じで!!」

「そこで目覚めたのか……！」

人が変わって行くような印象。これは……ヒステリアモードか。

「さあ かれ が きたぞ」

——最悪だ。縛っていた縄なんて物ともしない。全てを引きちぎって彼の体は化け物となっていく。

着ていたスーツも破け、その下から出てきた肌は赤褐色に変色していく。雄牛のよう

に筋肉が盛り上った。毛むくじやらの腕と脚、そして牙。これが……吸血鬼か。

「Ce mai faci……いや、日本語の方がいいだろう。初めまして、だな」

声帯まで変わったのか、急に何人かが同時に話しているような不気味な声になっている。

……ダメだなこれは逃げよう、ここで戦うメリットも無い。みんなと合流して倒してもらおう。ここで無理をする必要は無い。弱点もわかっているんだ、合流して戦った方が……

「黒野！ さっきの緊急コールは……」

「……?! ブラド！」

「あ……理子さんにジャンヌさん」

来ちゃった。いや呼んだのオレだけど。

「……キンジとアリアさんは？」

「外でオオカミ達の相手をしている」

「ブラド……小夜鳴に化けてたなんて！」

目の前の化け物を理子さんは憎しみと恐怖が混じったような目で見ている。

「おう4世。久しぶりだな。イ・ウー以来か？放し飼いにしてみるのは面白えかと思っただが、感付いて逃げるとはなあ」

「……ブラド。やつぱりだましてたな！オルメスの末裔を倒せば、あたしを解放するって約束したくせに……！」

「——お前は犬とした約束を守るのか？ゲウウアバババハハハハ！」

下品に笑いながら約束は嘘だと当然のように言い放つ。……こいつ今理子さんを犬って言ったか？『動物虐待でも愉悦できる加虐嗜好』か。なるほど……そういうことか、この糞……

……ダメだ、熱くなるな。こいつと正面から戦うのはたぶん得策じゃない。

「ジャンヌさん。他の2人と合流しようか？」

「……いや、挟まれるのはまずい。ここで倒すぞ。……これも想定内だ」

ブラドと理子さんが話している内に声を落として提案してみたが、確かにオオカミと挟み撃ちはきついか。さすがに彼女は冷静だ、この状況でどんなプランを……？

「奴の攻撃をお前が全て防げ。その隙に私と理子で倒す」

「……やっぱりそうなるのね」

「……まあ、ここまで来たら何とかするか。オレは一応——『負けない武偵』らしいからな。」

外の黒雲はいつの間にか雷を鳴らし、暗くなった館内を照らす。

「いいか？ 4世。お前は一生、俺から逃れられねえんだ！ 檻に戻れ……！ 繁殖用牝犬」
ブルード・ピッチ

ブラドの心無い言葉が館に響く。その言葉を受け止め、理子さんは恐怖を……いや、それを上回る怒りをぶつける。

「——4世じゃ、ない」

「ああ？何を言っている。お前は4世だ。いい5世を作るしか利用価値が無い、無能な4世じゃねえか！」

その瞳に意思を込めて——彼女は吼えた。

「——っ！あたしは……『4世』じゃない！『峰 理子』だ!!ふざけんなっあたしはただの遺伝子かよ！あたしは数字の4じゃない！あたしは『理子』だ!!『峰・理子・リュパ ン4世』だ!!——あたしは！あたしは5世を産むための機械なんかじゃない!!」

「——っ?!何だと……！犬の分際で!!」

館に響くその悲痛な叫びは、ブラドを一瞬怯ませるほどだった。だがヤツはすぐに激昂し、こちらを威嚇する。……戦いの時が来たようだ。

「理子……やるぞ。ここでヤツを倒す。お前は無能なんかでは無いという事を……私と証明するのだ」

「……ありがとう、ジャンヌ。ここで勝って、あたしは初代リユパンを超えるよ」

決意を胸に戦う意思を見せる。オレも仕事はこなさなければ。……だが、まあそれはひとまず置いておこう。

！
——さつきから無能だの犬だの……理子さんになんて言い草だこの糞吸血鬼は……

「お前の居場所はあの檻の中だけなんだよ！ 4世。これが人生最後のお外の光景だ!!」

「……いい加減黙れよ変態野郎。——お前こそ！ 一生檻にぶち込んでやるよ!!」

一度彼女を否定したオレがやる事じゃない。それでも今だけは……彼女を助けよう。

17. 氷と銃

「ゲアバババハハハ！俺を檻にぶち込むときたか！どこのガキか知らんが大口叩きやがって！」

オレが言った事がまるで不可能だと確信しているかのように、ブラドは笑う。

——確かにその通りだ。こんな化け物、オレがどうにかできる相手じゃない。というか攻撃するの理子さんとジャンヌさんだからオレが檻にぶち込むって言うの変な気がするな。

「……調子に乗ってすみませんでした……」

「せつかくキメたのになんでへタレちゃうの……？」

「おつしやる通り大口を叩いてしまったなど思っ……さっきのセリフ理子さんが言ったことにならない？助けてくれ」

「ならないし助けて欲しいのはこっちだよ」

ならないか……オレがあれを檻にぶち込むのか。あんな太い腕で殴られたら死にそうだ。防御すると言ってもまともに受けたら間違いない大ダメージを食らうし、かと

言つて回避しては意味が無い。最低でもヤツの攻撃に一度接触して受け流し、相手の体勢を崩すまでやらなければ2人が攻撃する隙を作れない。……自分の無傷はあきらめよう。

そして恐らくチャンスは一度きり。ヤツがこちらを舐めている間に倒さなければならぬ。こちらの狙いがバレて魔臓をかばうようになってしまったら、倒すのがより困難になる。

交戦前に魔臓の位置がわかつてしまったので足止め用の装備は持ってきていない。依頼終了しちやつたからな。悲観論で備えればよかつた。加えて、あの化け物相手に筋肉や関節に損傷を与えるなんて芸当は出来そうもない。レキさんや『ヒステリアモード』のキンジならともかく、オレはそんなに器用じゃない。あいつ今回は来ないのか？ 良いところが1つもないな。結局のところ、この身とトンファーで何とかするしかないわけだ。……いや、一つだけあつたかな。あまりやりたい方法ではないが、そうも言つてられない。

もう1つの武器に気付いたところで、ひとしきり笑い終わったブラドがこちらを見る。

「ガキ共、作戦は立ったか？ 銀でもニンニクでも持つて来い。俺はこの数十年の遺伝子上書きで、何もかも克服済みだ。まあ……いまだに好きでは無いがな」

出来ればもうちよつと待つて欲しい。作戦は既にあるようだが、オレは知らない。ジャンヌさんに目配せすると、こちらの意図を読み取ってくれたようで小声で話す。

「この方法は理子と2人での非常用だ。元々不可能に近い」

「……………問題はリーチか威力か？オレが一発増やすから合図を」

「……………わかった、任せる。理子は少し距離を取つて両側、黒野は正面、私は脇だ」

一瞬『できるのか？』と言う顔をされたが、任せてくれるようだ。

2人での非常用で不可能に近い。それでも倒せる可能性があるという事は、手数は2人で一応足りるという事だ。おそらくは理子さんのあの力を使い、ジャンヌさんと合わせて5つの武器で魔臓を狙うといったところだろうか。

だがあれは髪の長さ以上のリーチにはならないはずだ。理子さんがかなりブラドの懐に入らなければいけない。その上でヤツにナイフが刺さるとも限らない。現実性の無い、2人で戦わざるを得ない状況での非常用ということだ。

そこでオレに現実性を足す役割が課せられた。ヤツの攻撃を防ぎ、隙を作った上で倒すという事だろう。確かにそれも可能かもしれないが、それに加えて手数を増やす方がより確実だ。理子さんの負担も減る。

魔臓は、ブラドの体にある目玉模様のようなものの中心にあるらしい。理子さんが右肩と左肩の2つを撃ち、ジャンヌさんが右脇腹のを斬る。そして正面……………口の中だ。こ

れだけが外部から見えない場所にあった。そこがオレのターゲットだ。

……『小夜鳴先生』の顔が頭をよぎり、少し手が震えてしまうのは我ながら情けない。余計な事を考えてしまうからそうなるんだ。

でも大丈夫だ。あれは『殻』で目の前にいるのは正真正銘の化け物。だからできる。今だけは感謝しよう、ブラドが化け物だった事を。人の形をしていなかった事を喜ぼう。

集中しろ、いつもよりもっと深く。遠くの水一滴が落ちる音ですら聞き取れるくらいに。

集中しろ、考えるな——敵を撃つために。

黒髪の男は覚悟を決めて武器を手に取る。両手にいつも誰かを、自分を護るための真つ黒な棒状の盾を持つ。

先ほどまでとは打って変わり、余裕は無い。それどころか追い詰められたように、何

かに怯えるように構える。頼りのヒーローはきつと来ないという事を予感しているせいなのかも知れない。

金髪の少女は過去と決別するために、敵を睨む。母の形見である青い十字架を手に取り、祈るようにその力を解放する。両手に銃を、操る髪に2本のナイフを持たせる。

距離を保ちながら不意に自分に攻撃が向かって来た時のために武器で威嚇する。

銀髪の少女は友を救うために、勝てるはずの無いと思つた事さえある化け物に、大剣を持ち立ち向かう。

男の腕を信用していないわけではないが、相手が悪い事を理解している。不可能だと判断した場合は即時撤退する事も視野に入れている。

そして化け物——ブラドは笑う。自分が捕食者であり、人間は餌でしかないと考える彼の目には、この状況は滑稽に映っている。狼がネズミを警戒しないように、あまりにも無防備に立つ。自分が負けるなどとは微塵にも思っていないのだろう。銃も2丁しか見えない。自分の弱点を狙い撃つには足りないことが、さらに彼の油断を誘つていた。

男は攻撃を誘うように、真正面からブラドに近づいていく。勝負は一瞬で決まるだろうと予測し、失敗すれば死ぬ可能性がある事もわかっている。それでもその歩みに迷い

はない。2人の少女は囲むように左右に別れる。

ブラドは一瞬、怪訝な顔をするが、目の前の男が自分を倒せるとも思わない。腕で払えば飛んで行きそうなほど身体能力に差があると見ただけでわかり、無警戒に右手を男に向かつて横に振るう。

——その瞬間。ブラドの手は彼の予想以上に左に流れていった。当たったはずの拳は自分の意思に反して動き、そのままバランスを崩してしまふ。同時に状況を理解した。自分の攻撃が、その動きに従うように回転した男に受け流されてしまったのだと。そして崩してしまつたバランスを戻せないまま、あお向けに倒れこむ。

油断した、それだけの事だ。あまりにも弱そうな、臆病そうなその男は、確かに真正面から戦えば負けるはずの無い人間だった。

「——今だー！」

合図と共にそれぞれが撃ち、斬る。想定外の事態に呆けて口を開けていたブラドは構える暇すらなく、全ての弱点を潰されていた。

ブラドが倒される前に見た光景は、いつの間にか右手の武器を銃に持ち替えた……感情の無い目をした男の姿だった。

「いやーなんとかうまくいって良かった、ギリギリだった」

「……ギリギリアウトだけだね。腕、ブラブラしてるよソウくん」

一発で決まって良かった。左腕が痛い。今すぐに病院に行きたいところだが、後始末が残っているしな。この怪我は自分が未熟なせいで招いたものだ、かなり痛いけど我慢しよう。……いや、ダメだなこれは、どんどん痛くなってきた。超痛い。体中痛い気がする。しかし自分の腕とは対象にトンファーは折れていない。なんなんだろうなこの棒は。

「……まあオレの腕はいいとして、ジャンヌさんはさつきから何やつてるのあれ。トドメ？」

「ブラドを氷で固めるんだってさ。力が入らないみたいだけど、いつ動き出すかわからないし」

ブラドが倒れた直後からジャンヌさんが剣を構えて、少し溜めてから倒れているブラドに振り下ろしている。一応話には聞いていたが、彼女は氷を操る超能力者だったらしい。見るのは初めてだ。

『オルレアンの氷花』——銀氷となって、散れ——!」

……結構全力でやってる気がするな。

「……ブラドが銀氷となって散りそうなんだけど放つて置いて大丈夫なのか? 死んじやうんじやないのアレ」

「たぶん大丈夫じやないかな、ブラドなら」

「そうなんだ……」

死んでも大丈夫って事じやないよな? あれぐらいならたぶん死なないんだと思う。動きだされたら困るしあれだけ固めれば安心だろう。

ブラドが完全に氷付けになったところで、キンジとアリアさんが戻って来た。

「終わったのかソウジ、やけに早いな」

「お前が遅いんだよ。てつきり良いタイミングで来ると思ってたのに」

「こいつ、ずっとバカキンジモードなのよ。あたし一人で戦ったようなもんだわ」

「……しようがねえだろ」

アリアさんが不機嫌そうにキンジに言い、キンジもまた不機嫌そうに答える。……そうか、キンジは今回ヒステリアモードにならなかつたのか。それなら良いか。

「やればできるじやないかキンジ。今日は真面目に仕事してたんだな」

「……なんで褒められたのかわからんが、それよりお前その腕……」

オレのブラブラしてる腕を指差しそう言うキンジ。そういえばさつきより痛いな……体中の痛みもはつきりしている。

「……ああ、そうだった。至急、救急車呼んでくれ。痛くて死にそうだ」

そこからの記憶は無い。後から聞いた所によると、オレはその場で倒れたらしい。